

はみ給ひしおもかげとぞい傳ひふ今のさやうのことなし唯脛巾をうしろさまにはくを彼門院の後向せ給ひし餘風といへり魚賣と同日の談なるべし此脛の説ひがことなり「建保職人盡」大原歌「うき身にの敷はづかしくゆふはきの其むすびにもあらばこそあらめ判云大原の里にの神の誓にて男になれたる敷を足のくびに結ふことの侍るとかやそれもおはねばむすびめなしとよまれたる云々外物うるもの又常の下づかひ女童までみな頭にさいげ持こさ常なり今大原女にのみ残れるハ殊勝の事なり「宗因干包」水桶にあまりてさつちりけも下女が心やすしがるらん古き前付「たらしらりさく」首すえてをさほの瀧と汲小桶江戸にも今より二十年ばかり先までハ橋賣の廻みな夢だてに橋と荒神松を包みていたきたるものなりしいつさなく止て今更になし

千日詣の  
行人  
鳥足

千日詣の行人のかなならず鳥足一枚齒の高あしだをはき手の長さ阿加桶に櫛をさして頭に戴き胸に鼻鉦をかけて打ならしありさしがこれも今の草鞋をはき阿加桶の手に持あるひの持ぬも多かり物戴きし古風今の絶果ぬ鳥足といひしものハ後の鷹殿の如き二またにハあらハ「諸國三ツ後一ツ鉄」「不角集」行人の興次郎つち合かた齒下駄詠流先つ年上野の草津の温泉に罷りしに御厨子女を水汲女といふみな越後より出てこゝに使はるゝものなり今の中はたらきといふものにて水汲ぬともとの名を呼になむこゝに地圖をうる其中にふるき版木すりたるもありそれにかの水汲女大きな水桶頭にいたゞきたるか處々に書てあり今ハ水汲もの男にて頭に戴る事更になしかゝる幽谷の中迄風俗時に移りかはるなれば江戸などいさもあるべき事ぞかし「中山傳信錄」入市貨物無肩擔者大小累重皆戴於首即大甕束薪皆然登坡下嶺矯首曳袖而行無偏墮者女の水桶を首にいたゞくことハ唐山にも聞傳へて「日

水汲女

本風土記」婦人條に、婦取水以桶、頂首而行、取置桶底、造頭頂之穴、以其便也といへり

「蝦夷奇觀」をみるに物を負ふに紐を額にかけたりこれまた殊なるならひ也陸次雲が「崗谿織志」に諸苗負物不以肩、用木爲半枷之狀、箝其頂繫帶於額背籠以行背籠のこゝハ「溪餘叢考」にも見ゆ「又際餘叢考」孟子不負、戴于道路、注負任在背、戴任在首、余童時甚疑之、習見內地人以肩挑也、及至瀛貽始知、苗纒擔物、皆用小架、負子背架、有兩皮革、而以兩臂挽之架上、又有形如半枷者、附於額、而以皮條、從縛于額、以固其所擔物、能負重行遠、若使之肩挑、則一步不能行矣、乃知負戴之實有其事也、然此乃苗獠所爲、孟子何以知之、意當時中國人、擔物亦如此耶、と見ゆ額に縛たらむも負るにて戴にうとさかたにやもし趙翼にこゝの大原女なとがことを聞まめば實に負戴のまさしきをさとらん今も三宅島などの女の額に緒をかけて物を背に負すべて伊豆國の島の女の大かた頭に物をいたゞく習ひなりわきて新島の婦女は何品にてもおふこにおふこにても脱スルカ桶にても籠にても荷ふも頭上にさいげ持はこふ是にのわけものとして木綿一はを二ツに折長さ四尺餘なるをくるくゝと巻て頭にねき其上におふこを居る又俵もの樽なごの管にて輪を作りこれを其上に持つべき物を戴く重さ十六七貫堪る此はたらき男に倍すと「南島雜話」にいへり

わけもの

粵述に猿人推髻跣足云々、嶺嶮險阨、負戴者悉着背上繩、繫於額、僕而趨、上下若飛兒能行、即燒鉄石、將其蹶、故能履棘茨、無傷。

「瀛貽紀」遊瀛中、苗獠擔負貨物、頂戴半木枷、徒行、亦不暫脫、相傳武侯定南蠻、設此號、令群

爨使、其不敢與漢人爲伍、以別貴賤、殊不知非也、彼戴木枷者、殆可負重以便工作耳、  
〔鄭明選批言〕に老子曰、不得志則蓬累而行、註云、頭戴物而兩手扶之、謂之蓬累、愚按、本草蓬  
藥、一名覆盆、蓬累疑蓬藥、不得志者、如覆盆於頭而行也、太史公云、覆盆何以望天、正頭戴物  
之義、

看板

酒はやし

看板酒店に杉葉のみならず、箒をつるしたる書もみえたり、漢土の〔水滸傳〕に魯智深五臺山を  
開する條、市稍盡頭、一家挑出簡草帚兒來、智深走到那里、看時却是箇傍村小酒店などあり  
酒はやし〔奇奇雜談〕に路次の小家に酒箒ありと見ゆ〔下學集〕に掃愁帚酒の異名とある故  
なり東坡洞庭春色詩、應呼釣詩鉤、亦號掃愁帚、注に李後主中酒詩、莫言滋味惡、一掃掃閑愁  
とこれなり

物の賣聲  
品々

菜さう

物の賣聲〔卅二番職人歌合〕になさうとて女のこしきめく物に青き葉を入れて頭にいたゞきた  
るを畫けりこれをなさう賣と書たる本あり誤なり其歌「春霞にくゝたちぬる花のかけにう  
るやなさうも心あらなむ又「さだめれく宿もなさうのあさゆふにかよふ内野の道のくるし  
さはの菜さうにて菜をうる者なりさうの候ふの略也〔甘露寺職人盡〕鍋賣が詞に、ほしが  
人あらば仰せられよつるをもかけてさう〔同〕蛤賣詞、ひけのある家のはぢにてさうぞ〔烏  
帽子折雙子〕牛若の詞、下女を近づけこの邊にえぼし折ばしさうか、烏帽子折が詞、くわじや  
殿のめされうずるえぼしり大さいさうかこさいさうか〔景清草子〕にわれいかななる人さう  
ぞ又れいのあざ丸ばかりでさうすの參りさうといふまゝに〔宗因獨吟〕人遣ふすへちらぬ笑

止されかしげに鈴をかまへて參りさう〔佐夜中山集〕摘うるやみやこの野邊の若菜さう 梶山保友

此集の寛文四年重頼が撰なり此頃もなさうといひしとあるし又さうといふべきところにか  
うといひしと有り〔猿源氏草子〕いわし賣が詞に、あこぎがうらのいわしかふるいと有りか  
ふりかうと書べしるいと云るの其餘聲なるべし〔醒睡笑〕に京の町を大根賣の大こかうと  
といふて通る又〔の部〕京の町にて小き足駄を賣商人こあんだくといふて先に行けば  
其跡から菜をうる者のつゝきてなかうとわれがねに似たひゞきがすまぬ ひゞきこい未と引  
さハこの響ゆふにいま、  
くしく聞ゆるなり 大この下にかうといふのこのをかさねたるやうなれをさいにあらさう又

〔同草子〕秀句の中芹かうと賣たる咄もあり又萬歳と云歌に、蛤こくと賣たる者のやまよめどう  
たふ今も京難波にての賣聲に何ことこもじをそへて呼又昔も何はとよべるもあり又山家な  
どの者京に来て物買はむとて呼あるけること猿樂狂言にもあり古き咄なほにもありてれか  
しきやうなれを賣買ともに呼ありく事い古今おなしければ昔うた田舎の者なとさることも  
ありしならん狂言また古き咄なほに賣ものを節に呼といふことあり今の蚊屋うりのやうな  
るもありしにや件のこわしむだと呼し咄の魚呼あどより古鉄買がふるひくといひしに、ひ  
とし響のさまくなるの今江戸にて柿賣の木ざはしをきざんし蠣賣のかきんよくと何とも  
聞わきがたきの雪駄なほしの呼聲なり悲田院といふことなりといへれど江戸にのさる處も  
なし是れもと手入々々といひしが詠りていゝとなりしなり京にての唯なほしくと呼  
り〔篋絨輪〕奈良晒身過す夏の呼聲に〔六玉川六篇〕寒ひとつ通した聲でなら晒このさらし賣

ていく

も今いなし古老云寶永の末大坂に天満喜美大夫といへる者説經淨るりの名人にてありしが幾玉の茶屋にて口論しこれに付て江戸に下り名をつゝみて居れり一とせ吳服屋蚊屋を賣荷持にやどはれて萌黄の蚊屋と呼に節を付て美聲を高くはり上たれば聞人これをめで、此年蚊屋大に售たりこれ蚊屋うり呼聲の始なりといへりされと前に晒うり有り

〔川柳點〕前句付「らんじの萌黄のかやのやうに呼けに羅漢寺勸化のよび聲も今のごとき蚊屋賣以後の事なるもまるべからずまた或老人云おなじ頃には挑灯うる者あり長き竹にあまた挑灯ゆひ付これを荷ひて挑灯やらんと呼聲長うして一聲一町にあまれりとなむ又奈良晒を賣しより以前の高宮を賣歩行けるとぞ〔昔々物語〕に昔の四月比より伊勢津緞子とて板にはさみ擔ぎ賣ありく事おびたしく千石已下の面々是を調着す價一二匁程なり帷子も縮高宮とて賣歩行此高宮縞をみて帷子に買また夏袴にも仕立させ歴々衆着す價一反五六匁成しを近年の帷子の奈良半晒熨斗縮いづれも高直袴も郡内平精好平など高直なるを着す緞子杯の買ふものなしとあるの享保十七年の頃なり按るにかうと云ひかはうなりかはうのかはいと同くうらんと云ことなるべし〔職人盡〕に馬かはふ革かはふあり馬かはふの馬くらうにて我かたに買もすべし革の調度にも造らで人家にあるべきものならねば買にくべきやうなし賣に來るにこそあらめさらば此例にて馬かはふも馬を賣ものなりかはふのかなわろしかはうと改むべしかはいと云ふが如くかへと云ことなりされば賣かひ共に通じてかはうと云こと、見えたり〔五元集〕に「かはかうや竹田へかへる雪のくれこれの件のかはかう

小便買

千駄櫃

高荷

にのあらず小便買などの肥とりなりかはどの厠も清器も共にいふなり此かはうのかはんと云なり

〔庭訓の抄〕七座の店の内、千朶積の座といへるの何にまれ多く積あげたるにや林逸が〔節用集〕人倫部に千駄櫃商人と出たり櫃の器物なるを商人の名とするの一種の櫃ありてそれを用ひ高ひえたる者とえらる真室が〔嘉多言〕に千駄櫃をせんだんびつゝのわろしこれ後世高荷といひしもの是なるべし〔松落葉〕外記節、現在熊坂に山賊夜盜のまれものら高荷をおとし云々近き頃高荷といひし者の木綿を高さ壹丈あまりにつみかさねしを背負て市中を賣ありきたるが安永の頃までありて今の絶たり享保七年刻〔俳度曲〕の謡曲を題にして讀たる發句集なり其中に常陸帶を「藪入におし賣するぞふくさ帯といふ句ありて帶うりの圖高荷なり又〔下手談義〕に木綿賣の高荷はどなことくしき箆を負ひ、風來が〔志道軒傳〕に仰げばいよいよ高荷の蚊屋賣といへれば木綿のみに限らず帶うり蚊屋賣も高荷ありしとみゆ老人云木綿一反づ、段々に積重ね高さ壹丈程にして背負て賣あるき買人あれば竹竿をもてあげおろしをして見するなり高荷うりやみて兩掛にして賣あるきしも近來のなくなりし按るに〔建保職人歌合〕十二番左商人戀歌「命にも身にもかへんとれもへどもあふ事をうる市のなきかな其畫のさまをみるに高荷をれんぢやくにて負たる男の傘を手持たれこれそのかみの千駄櫃なるべし又高荷にあらず背負ありきたるものをひしりといへり後の乞士の條に云り竹馬と云ものゝこと〔事跡合考〕云石黒市庵と云老人語曰本町二町目家城太郎治と云吳服の

竹馬  
吳服屋

江戸の町  
みせ棚の  
さま

大商の寛永六七年頃始て京都より江戸に下り常盤橋づめに立て腕に呉服ものを二三端ヅ、かけて居たりそれを大名御旗本の家來ども買に來りたり餘りに腕もかいだるくなり商ひもれはくなりし故木馬の如く竹にて兩足をまつらひ上の方に長き竹を横たへてそれに呉服ものをかけて商ひたり是末代絹もめん布などの商人竹馬とて右の如くまつらひその商物をかけてかつぎありく製の始なりと云々然してかの者本町に賣店を出してより日を追月をかさねて京大坂より呉服商人本町につどひ集り今の世の如き數十家といなれり

むかし江戸の町みせ棚のさま〔見聞集〕に今江戸繁昌にて屋作り美々敷事前代未聞なれば田舎人見物に來りくん玄ゆす爰に室町の棚に平五三郎と云て心横道なる人有そらばかをつくり田舎ものを近付て物をうらんと巧みて髪ひげむざ／＼とはへさせ紙頭巾を目の上まで引かぶり綴りたる古小袖を着木綿袴のよざれたるをむなだかになし手に長數珠をつまぐり口に題目をとなへ見せ棚に打かゝりこれ慶長元和の頃なり此ころもみせ棚といへりみせさばかりいふこゝはそらいぬふりして居たり田舎人在所へのみやけものをかはんとて室町を見めぐりけるにから綾の狂文唐衣朽葉地むらさきとんすりんず金らんにしき色々様々の美麗なるものをつみかさねぶげんさうなる人たちが並び居て何をかめす御用かと問ふ田舎者のことなれば恥かし顔にて物買んといひ出さむ事思ひもよらず御免候へとふるへく棚の前を通り行ばかりにて物買べき所なしみれば是なる棚に後世願ひと見えて無骨なる一人我等が里のいくぢなし左衛門四郎によく似たり此棚にて物をかはではと思ひこれなるるものむすめに似合たり直いか程ぞととへども我

現金安賣  
掛直なし

ハ耳が遠きと云て口に題目をとなふ田舎もの是をみて江戸の都にもかゝる姿のばか者ありけるぞやと思ひなう棚主殿是なる物錢三貫にうらしめと耳のかたへ口をよせてよばゝるぬぶらおのこ是を聞此小袖一貫にもとく賣たし扱三貫に賣らむといひ田舎者こひそこなひと思ひてにくべし何々二貫にかひ度とややすく候いや／＼と面をふり又いぬふり題目をとなふ田舎者我三貫といひしを二貫といふに殊に耳きかざるにやたぶらかさばやと思ひ扱々お主の欲徳にも取あはず後世の事のみ思ひ給ふ有難き人なり我里の左衛門四郎と云人によく似させ給ひたり誠の佛よと云ふぬふりたのこ目を開き打笑て其事よくははれの里の左衛門四郎殿われさハ自他さにも云人なをさ御經宗にておはする歎あらかたや正直捨方便と一の巻に説給ふ何々此さるものおぬしの娘に似合たるとや我も娘あり子にのきせて見たき物ぞおきやう御本尊おだいまんだら此玄ゆすをく代物二貫のやすけれどもまけ候ぞと云て賣たりれそろしきればかりいふに絶たりむかしハ常の人雜談の中にも八幡白痴など言ふをいへり商人ハ殊更なり人情不直なるよりのこゝなから猶實朴といふべし又室町邊に其頃有し呉服屋後になくなりしと見えたり越後屋其後の事なり此小袖賣しハ古着にハあらざるべし主が袴きたるもめづらし昔近江國蒲生刑部大輔貞秀入道智閑と云もの一向念佛を修し隣國もこれに心を安んじ居たるを俄に出陣して鈴鹿郡を討取り其ころ智閑の虚念佛と云もてはやせりさなむ語にして正しからざるこゝ此商人と似たり

凡商人の現金掛直なし安賣といふと越後屋より始れりとなむ〔永代藏〕商の道のあるもの三井九郎右衛門といふ男駿河町といふ處に表九間に四十間棟高く長屋作りにして新棚を出し萬現銀賣にかけねなしと相定め四十餘人利發手代を追廻し一人一色の役目金欄類一人日野郡内絹類一人緋緋子鎗印龍門の袖覆輪かた／＼にても自由に賣渡しぬ

越後屋八郎左衛門と云いものと駿河町木戸際に間口六間に奥へ十間程住で絹紬郡内棧留木綿類を仕入て上物のなかりし上物の本町にて調へしなり云々享保六年焼失して後吳服店と成ける此本店通室町三町目角迄一店となる切店の方西へ六七間ほど寛保三年廣がる木綿店元文五年東へ十間ほど廣がると〔我衣〕に云りされども貞享の頃よき物も賣たるよし〔永代藏〕にいへるがごとし貞享四年〔江戸鹿子〕に諸商人を記せる中に別に◇やす賣小袖駿河町越後や本町富山や同町伊豆藏や同町いゑきと有り他の吳服屋も現金安賣を越後屋に習ひたるなり其頃の唄に「越後屋現金かけ直なしとて座當杯がうたひて三線を弾たりと古老の話あり延寶中のことなるべし〔後の昔物語〕本町壹丁目の伊豆藏貳町目の富山に花色暖簾の壽の字越後やかき暖簾の釘貫越後屋いづれもはなやかなる處にて朝鮮人來聘の時棧敷の體いかめしく覺えしか壽字のいちはやく仕舞釘貫の其後伊豆藏の又其後絶たり云々大丸も朝鮮人の頃の新店と見えてめづらしげに人の云き寛延元年壽字越後屋が安賣の引札せし事あり〔下手談義〕に死字末後屋と書たるの是を取なしたると覺ゆ〔わが衣〕に享保十年本町に釘貫越後や新みせ出る同所壽字の延享元年に出寶曆九年に店を仕舞商家の興廢枚擧に違わらず安賣札を廻すこと寶永頃よりたま〜あり享保より二季に廻しぬ寶永以前の是等の事なしといへり

引札〔耳袋〕に元祖大木口哲狐かうやく平藏油みせ五十嵐屋共に世話いたしける大坂屋平六諸風散といふ風藥こしらへ其頃いまだ引札など、申物なき折から委細に風を治する譯を認

引札

古着の起立

古金買振賣商

商物の相場をふれありく

め初て辻々にて引札いたしける折ふし風はやりて此藥夥しく賣ける故俄に平六身上大になれりといへり  
富澤町古着の起立の友山の〔落穂集〕に見えて兩人づゝにて一人の麻布の袋を肩にかけ町中を左右に分れ古着かひありけりとか元祿十四年十一月富澤町名主彦左衛門願之通古着惣代被仰付同十六年十二月十三日質屋惣代古着惣代向後相止  
享保三年戊十月六日古金買店ひかへ候者の外振商賣の者ばかり四百八十五人呼出しありこれにて人數残らず相濟候  
商物の相場をふれあるくに迷子を呼まぬすることも近時に始れるにも非ず享保三年戊七月十六日本所深川筋まよひ子を尋申候山是の諸色直段高下あらせの爲の由致風聞候云々  
枋の杖の名なり〔和名抄〕行旅具、枋和名阿布古〔新撰字鏡〕にのあはことあり歌に多く蓬期によせられたれば〔字鏡〕の訓の普通にあらず〔和爾雅〕に櫛擔担同輓擔輓同〔三才圖會〕禾擔負禾具也、其長五尺五寸、刻匾木爲之者、謂之輓擔、斫圓木爲之、謂之櫛擔、匾者宜負器與物、圓者宜負薪與禾さてあふこのおとあど通ふこと多ければおひ木なるべしといへれど相木の意にて通すべし又荷ひたるさまばかりにかけたらむやうなれば俗に天秤棒といへり世にいふ婦人これをこゆれの折るゝとて忌ことありとなむこれ誤り傳へなり〔人倫訓蒙圖彙〕法論みを賣の處に曲物に奇麗なることをおほひさしになひ何方にても下にすぐにおく事なし一方を高さ所へもたせ置人にふみこえさせぬよし子なき女これをこゆればかならず懷妊

ふり賣札

すといへりさらば望みてもこのへき事ならずやとる物賣今のなければ似よりたるの納豆うりにてもあるべし

大路を何にても持ありきて賣をふり賣といふ〔見聞集〕にかい道をなかめ居しにふり賣とて萬の物を賣むと呼はる萬治二年己亥正月振賣の者年五十以上十五以下并かたの者今度振賣御札被下候唯今迄振賣仕候者共計年數偽無之様町中吟味仕書上可申家持札取候事又の新規に振賣商企札取候者堅停止之事絹細木綿麻布并蚊屋紙帳振賣仕候者に御札被下候間人數相改書付上可申事以下是の札錢壹ケ年に金一兩づ、被召上候事同三月振賣札之覺、きぬ、小間物、木綿、麻、蚊屋、紙帳、右の御札被下御赦免被成候分、一御座、あみ笠、小刀、香具、かはたび、からかさ、木綿足袋、真綿、ほうれい、きぬ糸、きんちやく絹、布切、帶紙、瀬戸物、つき米、かうじ、油、鍋、薪、まゆろほうき、物の本、かんぶつ、南ばん菓子、右の跡々より札なしに御赦免被成候分、振賣候者、肴、菜さうし、たばこ、時々のもり物、くわし、鹽、飴、おこし、げた、あしだ、味噌、酢、まやうゆ、とうふ、こんにやく、ところてん、餅、籠ざる、とうしん、つげぎ、右の五十以上十五以下片輪者之分札被下虫損、菜さうしとあるし文字の衍字なり此ころも菜さうしひ來れり古着買、煎茶賣、髮結、右の五十歳以下十五歳以上之者札金出申候髮結も同時に改め有りかみゆひ壹ケ年に師匠の金貳兩弟子の一兩づ、札錢被召上是今いふ萬治札なり後世役人足を出すものは札錢の代りなるべしこれのみ今に札を以株とすほどなく振賣自放になりて延寶七年未二月十三日振賣商賣人猥に多出來候由其間有之近日遂吟味先規の如く札を出し人數改當年新規に振賣致候者只今停止依之先達而知らせ置者也とありて此後聞えず遂

髮結札

棒手振

棒にふる

に廢れたりとみゆ後にこれをばていふりといふの訛れり〔西鶴織留〕に棒手振といへる是なり今常にも來すしてみ知らぬ商人をふりに來る商人といへるのいよく移りたるなり了意が〔浮世草子〕に家を棒にふりとあるの今もいふ諺にて身上唯初一つとなれるをいふなり建長寺圓旨か〔東歸集〕に十露ばんの詩あり認定盤星元是愚、且休分兩又分銖、人言八兩半斤重、我見知他算得能

青豆時 十九文 とつかへい 飴賣の笛 同傘 よみ賣 繪草子 紙書 ほうろくの一倍 つきつけ賣 山うり めづらしき商人品々 耳の垢とり ちもたや 古道具屋

青豆時

商人の朝まだきに出るの多かれどわきて豆腐屋納豆賣などを早き者に有ける又江戸に聞えざる物ながらむかし京師にて青豆賣といふもの有て早きものにたとへたり〔洛陽集〕髮結と青まめ賣と白露と信徳朝霧に青大豆うりに辻かく袖秋風青大豆やはじかみ二片匙をとる我鬨はしきたる大豆を賣とみゆ匙にてすくふなれの藥劑調するやうに蓋を取あひせたりこれの手の指になそらへいふなるべし箕山の〔大鑑〕に青豆を商ふもの京の町を黎明のころのみ賣まはりて日たけてよりの通らず是によりて早く來る客を嘲りて青豆といふといへり〔綾錦丈岳獨吟〕我家か近うて咄あまるなりなんでも九文鼻毛まで濟九文なるもありしにや〔我古呂裳〕に享保八九年の頃小き道具品々安賣十九文にて目すきに撰とらせ賣商人ありことの外はやり町々辻々にて後に上物を並へ卅八文一通品々或は十三文一通品々並へ賣珍

安賣十九文

らしき故彌はんふやうしけるといへり其後の廢れたりしが文化年中より又此類はやりて今に盛りなり近ごろの古道具まで細かなるものを大路に並へ賣夜に入の燭を點して人通多き處に出て賣ことはやりものにて價の高下さましくなり

今江戸に飴と古きせるなどをかへにありとつかへいと名く其ことばにめげたらふよきせるの古いとつかへにしよと呼ぶ〔諸艶大鑑〕松屋焼の土火入に取集めたるめげ烟管といへり損へることをめげると缺瓦をめげと云めげたらとつぶれたるきせるを云ふなり今是をかへる飴賣も見付たらしといふこと、心得めり此飴賣の事を或説に正徳の頃淺草

田原町に善右衛門といふ者ありしが生國紀伊國道成寺の僧つき鐘建立の爲に江戸に下りてこの事に頼まれしかば飴と古がねと取かへて町々をあるきし是の始なりその後すたれて

寶曆三年の頃より神田小柳町に甚右衛門といふもの異なる聲してとつかへいといふと呼ぶるき専ら盛になりし寶曆九年の頃なりといへり此説おぼつかなし其積が〔色三線〕大坂の

巻、傾城買が落ぶれたる事をいふ處、茶碗焼出す高原といふ處に風の神と相住して〔風神送りといふ物〕なり新町の名ある大夫天神の姿を紙のぼりに書き其身の古き破あみ笠を着て端々をもつて廻りさあわ丹波屋の小ざつま明石やのもろこし云々古釘にかへましやうと子供た

らして其日を送りける〔本朝文鑑〕左角が地黄煎解に、此ごろの人の覺えたがひて覗からくりのあしらひと思ひ古がね買のきせるの雁首とかゆる又〔伊呂芝居〕にきせるの皿ひとつに

飴賣の笛

飴賣の笛ふくこと、和漢同じくて漢土に古きこと、みゆ〔詩有警篇〕箋云、簫編、小竹、管、

飴賣の傘

如、今賣、飴賣者所吹、また〔周禮〕小師掌、教簫、といふ處の註もこれと同じことにて、古く、聞えず、〔三官飴といふ、明より來、竹を吹こと、彼國を學べるか〕雲合奇蹤〔十五〕挑了糖租一頭、辨有、

よみ賣

揺鼓兒泥人兒引線兒紙糊小箋兒燈艸發板兒了々當々傘をさすこと〔俳諧染糸〕傘のこどくかたぐるま花の枝祇園林にかすむ飴賣〔後撰夷曲集〕笠さいて出せる箱にれくあめの白きをみれば粉ぞふりにける

辻賣繪草子

よみ賣〔松落葉〕か、ふし四條河原涼八景こゝに懸路の世のうはさ唄に作りてよみうりの手びやうしそろう笠の内〔諸艶大鑑〕夜さへ編笠をきてつれぶしの讀うり〔貞享元年のさま、も今にかはらず〕人倫訓

紙畫

蒙圖菜〔繪雙子賣世上にあらゆるかはつたる沙汰人の身のうへの悪事萬人のさし合をかへり見ず小歌に作り淨るりに節付てつれぶしにてよみ賣なり愚なる男女老若の分ちなく辰巳あがりのそゝりもの是を買とりて樂となす誠に遊民のまわざなきに事かゝぬ商人なり辻賣繪草子といふも是なり〕元祿會我物語に遊女の心中三勝が時分めづらしさの儘狂言にて作りぬ次第に類多くなりて今のふるめかして辻賣の繪草子にも載せず

の一倍

すべてめらづらしきものを繪にして賣を漢に紙畫といへり〔東京夢華錄〕に蠻國より象の來ることをいひて御街遊人嬉集、觀者如織、賣撲、土木粉、捏小象兒并紙畫、看人携歸以爲獻遺、

乙州が

會禮々々草にはらろくの一倍とて賣だにすれば利のあるものなり古き前付〔一倍〕

賣つきつけ

るな 炮烙の世の商の惣領なり

〔人倫訓蒙圖彙〕につきつけ賣といふものあり老婆發燭ツケキを持って人家の暖簾の内に入る圖ありて其よし記さるるの誤りて脱しなるべし人の買むともせざるに強て賣に来るものをいふなり今もさる者あり女などいさましく難儀にあへるよしをいひて憐みを乞ふ又一種憎むへきの物よりも價のやすけなるにめて、かふものあれ敷あるもの、必足らず初によきをみせて價を定め賣すますときわろきとかへなごさましくたばかり事する是を江戸の俗に暖簾師といふとか〔誰袖海〕に日本橋にたゞみ往來の袖にすがり短冊のつきつけ賣其頃、橋なかり〔伊呂三線〕〔深あみ笠〕に大腸差の似せ半人家々に入ながら訛に是の御合力買とて壹文ツ、が耳かき楊枝のつきつけ賣などみえたるいづれも放蕩もの、落ぶれたるをいへり又人のつどへる處に出てえもまれぬ物など賣を口上商人ともやまうりともいふ〔永代藏〕に山賣人參のつきつけなごいへり物賣ならぬと賣僧などをか云るにや〔永閑節、寛活一休〕にさてやまうりかなくと有り不角が點「賣ぐすり木偶せんまいを腹に羅什が孫か針を吞所作」今ヤシと云の山師の略なるべし

暖簾師

口上商人  
やまうり

ヤシ

めつらし  
き商人品々

耳の垢取

西鶴が〔織留〕に竈の上塗釜みがき餅米洗障子行燈のはりかへ猫の蚤取などをめづらしさうにゐるしたり猫の蚤取釜みがきの外の皆今あるものなり殊に餅なごの米洗ふのみにあらずすへて彼より器もて來て搗の自由の至りといふべし  
齒取の唐人の〔沙石集〕に見えたり兒戯の條にいへり耳の垢取の〔江戸庶子〕に神田紺屋町三丁目長官と

飴菓子諸  
の藥賣

蓮葉商ひ

ふもたや

古道具屋

まゆむ

あり〔五元集拾遺〕観音で耳をほらせてほど、ぎす〔簀絨輪〕延たる爪の指のふくりん、耳堀の髻唐物の似せ渡り〔笑林廣記三〕一待詔爲人取耳といふ物語ありこの髪ゆひ耳垢をとるごとく見えたり  
飴菓子諸の藥うり昔より時々さましく趣向をかへて賣にはやりたるもあまたにて枚擧にたへず

蓮葉商ひ享保二年艸子〔娘容氣〕に桃や柿や梨の實是ぞ蓮の葉商ひ七月十三日より云々  
商ひせざる町人をふもたやといふのふもたやを約めて云なりそのかみ古道具やを仕舞物店といへるも身分をかへなごまたる者の家財をかひ取て賣ものなり承應二年丑六月十九日町中仕舞店之賣物ひさし切に置可申候〔一代男五〕うきよの事も仕舞たやの金左衛門云々  
〔風流旅日記二〕大坂上鹽町のことをいふにこの處のよろつ仕まうたやの樂隱居ならずもの、俄道心云々

本居大平が〔萬葉下十四〕可奈刀田乎安良我伎麻由美比賀刀禮婆と云る歌の註にまゆみはまゆむとはたらくことにてまゆむの地の干わるること、開ゆさればまゆみの地の干われてと云ことなりまゆみ故の今いせの國人など夏の早に畑ツもの、枯るをまふと云是早の時に限て云ことなれはまゆみまゆむにて地の干わる、より出たることなるべし又よめわるといふことありこれもよめとゆみと同言なるべしといへり東國にてゑみわる、と云も是なり  
ゑみり咲にてゑまひの約りなり何にても口の開くを云ふ



茄子の枯るを舞云ふ

〔秉穂録〕に俗に茄子の枯るを舞といふ加賀の邊邑に舞々をするもの多しその地茄子を産す茄子のあしき年の舞者四方に出て錢穀を求む故に茄子の枯るをもやがて舞といへりとあり此説いかゝあるべきや舞の仕まひにて終りのことなり

○乞士化子 阿彌陀の聖 高野ひしり いたか ひしりといふ吳服屋 作り山伏 梵

天 桂姫 かつら館 大原みこ 八瀬大原 手灯 腕香 すねきり 仲間六部 鳩

の飼 慶庵 口入 方齋 葛西念佛 てうさい坊 べらぼう 足を手に代 鼻に笛

吹 胸たゝき 節季候 物吉 かたいの仕切札 なりんぼ 雪駄直し

乞食の佛氏の道ながらわきて一遍上人などの如く遊行をととするあり〔舊本今昔物語〕に阿彌陀の聖といふこととして行ふ法師有けり鹿の角を付たる杖の尻に金の机にたたるを突て金鼓を叩て萬の處に阿彌陀佛を勤め行ける云々此聖古畫に往々見えたるか其さま有髪なるもあり〔撰集抄〕に播州小屋野にて髪生ひたる僧むしろを着足手泥によこれたるがさゝらすりて居たることをいひ又自然居士東岸居士なども頭を剃らずさゝらすりたること其傳に見えたり鉢の瓢を用ゆみな乞食の所作なり自然居士舊跡の山城東福寺龍吟庵の東溪に有り居士の南禪寺開山大明國師の徒弟なり自然居士の法相を學び後に大明國師の弟子となる東山に住す泉州自然田村の人なり龍吟庵國師の本栖なり〔雍州府志〕悲田寺條に、繡繡下巻を引て云、小兒捧定 一個瓢云々といへり〔類書纂要〕乞丐條、障頭仰面操瓢而乞など見えたりしかしこもひさごもて米錢を乞へると同じ瓢の水を汲に用故に水くむ器の竹木にて作れる

乞士 阿彌陀の聖

暮露

鉢扣

もひさくと云瓢のことなり勸進ひしりの諸の勸化にひさくを用るの件の故なり又むしろなぞ着たる僧を大かた暮露といへり〔楊鳴曉筆第三〕草花の論に、夕がほの云々はてには暮露人といふものにかはれて人の家ことにかしらをたゝかれし有さま南無三寶いふばかりなしとあり是後世の鉢扣なり〔七十一番職人盡〕なる鉢扣のことに賤しけにて鹿角の杖の地に立て瓢を敲く處をかけり其歌「うらめしやたがわさつものぞ昨日までこうやく」といひてとはぬの判云はちたゝきの祖師の空也といへりわさつのも此道具といへりさ有はわると一本にうやふべしこの歌來をこうといひかけたるなり後に杖をばもたで鉢ばかり扣くこと、なれり其後も賣れり昔より笠の着ず一休和尚のこれが讚にも晝不笠兮夜不極樂院名づく此間に僧師鹿を殺したるを發心して空也の弟子なりし古書四條坊門通たゝき町南行に鉢扣の住侍るも空也上人の跡なり極樂院名づく此間に僧師鹿を殺したるを發心して空也の弟子なりし古書有念佛となへ瓢箪を置き修行しける故に今も鉢扣と名づけてふしをつけて申なる事、空也上人の作りて教へ給ひし法語なりかの杖につけ給ひし鹿の角の今も極樂院の什物として去る頃後光明院崩御の御中陰に此處より鉢扣十人打つれて般舟院に參り念佛となへ諷吟しける時にかの角をさゝげて白洲に立たりけるをまのあたり見侍る世にたぐひもなく大なる五支の角なり又常に鉢扣とも茶筌を作りて賣也鉢扣の歌「諸法實相ときく時の岑のあらしも法の聲萬法一如とくわむすればはまの蟻蟻も佛なり佛の三世にましますせどかゝるひくわんいたのみなしひくわん教主の釋迦だにもねはんの空にかくれますましてや凡夫の愚にていかで無常をのがるべき無常眼の前きて火宅を出よとすゝむれど名利の心つよければ聞

鉢扣の歌

て驚く人もなし人の男女にかはれども赤白二ツに分られて生ずる時も唯ひとり死するやみぢに友もなし東岱前後の夕煙北嶺朝暮の草の露おくれ先だつ世のならひ只何事も夢ぞかしとなふれの佛も我もなかりけり南無阿彌だ佛くくうや上人御法事説經の條にいへり合せ考ふべし鉢をするに竹籬を用たる證の茶釜を嚮ぐにてもあるべし寶倉に茶に鷹爪の名有ば茶釜售の鷹の羽の袖をかつぎ云々そのかみの畫を見るに茶筌うりの十徳の紋大なる鷹羽付たり彌兵衛ときけば哀や鉢扣素堂鉢たゝきいかにうき世を茶せんがみ超波陸奥の人に聞しにそのあたりにていこも僧茶せんを售といへり是今も煮たる茶をたてゝのむ故なり

高野聖

高野聖庭訓に聖道とあるの眞言僧をいふ此宗の僧を俗にひしりといふ又天台宗にも聖道といふと名ひ沙石集高野の明通僧都善阿彌陀佛といふ通世ひしりをかたらひて三井寺の公顯僧正の行儀をみせにやる處高野ひかさにはぎたかなる黒衣きてとやうなれどもあかじかと申入たりければ高野聖と聞てなつかしく思はれけると有り三十二番職人盡高野法師たかの山修行せぬまも宿かせと坊をうかれて花や尋ねん甲陽軍鑑に上杉家に盜賊はやりし頃高野ひしり半弓にて鍋釜盜人を射殺しければ則政これに千貫の知行をあたへて足輕大將にまたる事みゆ鍋釜など持ありきて野宿をもせし事と知らる見聞集に關東みだれ國郡在々所々まで私の弓箭を取爰かしてに關をする海道往來やすからずされども高野ひしり笈を負て關東へ下る是の弘法大師信行のかたちを學べる聖とて弓箭の中をもあけて通す云々宗鑑が犬筑波集高野ひしりの宿をかる聲、大きな笠きて月もふくる夜に又おひつ

いたか

かんどや思ふらん高野ひしりの跡のやりもち此三句めを貞徳が與止加波に「人のねかたどるものわたす京の町自注に小歌にかうやひしりのねかたどると有り罪科人を京の町わたすにの警固あるなり跡の鎗持是也醒睡笑廢忘條に、高野の威をかりて諸國をありく聖の若輩なるが一夜の宿をかりけるに中畧あるじの女房に雞の鳴を學びて相圖にして達忍びんさ約す聖高野笠を手に持はたゞとしてけり女房はや雞が鳴といふ聲を相圖にやどうかといへる咄あり彼の小歌のおかたどるといへるをとりて作れるなめれどその謔もさる事有しよりいひ出しことゝみゆやどうかといひしが廢忘にて常に彼が宿をかる呼聲にてありしなるべし一蝶等が畫に笈を居る笠を上此帳の體と職人盡にに覆ひ下に帳をはりて野宿するさまを畫けりもてハ古様にて異なりむかし戰國の中も出家の妨げずいづく迄も通ひしこと高野ひしりのみならず又職人盡にいたかといふ者あり流瀧頂をいするをもて物もらふなり後世の高あした是なり江戸にもありしが今いなくなりぬ誰が家其角撰高野のうへの小田原の花嵐雪夜めくるいたかの袖に春の露學白いたかの經木を卒都婆の形に刻み文字かくなれば板書の略にや

ひじり

骨董錄高野山事略に、聖と云ひ中頃時宗の此山に來り住で念佛を修行し或は廻國勸進せしを日御時に至て眞言秘密の靈場に其法侶にあらざるもの、雜り居べきこと然るべからざるの由の仰によりて悉く皆眞言の教に隨しと云ふ又云正保元年十一月御使登山して歸て申すやう學侶の公家の如く行人の武家の如く聖方の町人の如しとなり

ひじりま  
云免服屋

吳服賣ものにひじりといふもの有り新著聞集に江戸通銀町二丁目に堯順と云商聖あり云

せり呉服

々どあり思ふに吳服所茶屋と稱するもの剃髮僧形のものある寛文八年申二月廿四日町觸に去年御觸之通今度吳服屋并聖共手前三百匁以上之小袖表御改に付町中に吳服ひじり方より預り置候物於有之者早々其主方へ返し可申候按るに和州西巖寺古湖法師のかける「職人盡繪」に絹賣ありさまの絹を脊に負左右の肩の處より削りたる竹を前下りに二本差夫にさまの絹切を付たること四手のことし是負へる絹の色品の看ばんにするにやむかしの絹賣みな此體なり其形高野聖の笈を負へるに似たり又高野聖きんらん錦のきればしを佛像精具の裁のこしなれば守りにすべしとて賣たりと「見聞集」に見えたりかたよしわれは絹を負賣ありくを聖と名つけたりとみゆ今せり吳服といふものは是なりせりとい迫るの義なるべし今うちきけば聖といわまりおほぞうの名のやうなれど高野聖を俗に専ら聖とのみいひしなるべしこれい異なり聖といふことのおかしき「沙石集」に上人の子、智者にてひじりなり申せ比興ば或人難云交に似て聖るへからずといふ答云さらば一生不犯の聖の故交に似て聖らんすらんす

せり賣色

せり賣も色々あり持行て賣も人に賣まけじとする意にや買ふ人にあひるにのゝあるべからず春米を桶に入れて荷ひ歩行町々裏家に五合三合の米をせり賣せし初の淺草花川戸の米屋兵庫屋松屋といへる兩人なりとぞ

作り山伏

作り山伏「醒睡笑」に推い違ふたと云咄の中に、信長公天下をまらせ給はぬ迄の關役所の難を遁れんとて皆その相を學べり駿河なる清見關のあたりにてにせ山伏東より上るの一人上より下るの馬に乗て強力七八人具したり互に怖れてへり道しときんすかけななどをとりた

梵天

りといふ物がたりあり義經が奥州落などをおもふに此風古きこと見えたり後世のまた町人奢りて京師にて大身のまねをし正護院峯入の供奉なせしもの有りとか江戸に寛文五年巳十一月町中にて山伏行人のかんばん并ぼんでん自今以後出し置申間敷事諸旦那より祈念之事申來候ハ繪像を用可申佛壇并木像置候儀可致無用事祈念仕舞候ハ繪圖なども取置可申候これハ在家を借て佛壇等を構ふべからずと有し内なりぼんでんといふものいもと梵天帝釋尊と書しものにてもあるか但し梵天の影に准へたるか明和八年ごろ俗人多く集り袈裟をかけ錫杖をふり梵天を持町中をサンゲくと云て祈禱をなしありきしが禁せられて止む「松落葉」三瀬川と云歌に「ながるゝ水のかも川やころの卯月とゆふまでのぼんでんすこく立ならぶ

桂女

梵天、梵天といかな書なりもと棒手なり棒をぼんと云ハ「見聞集」にみを杭をぼんぎといへり是棒木なり坊をぼんと云と同じ手の横につくものなり昔のなぞくに、やす半紙なにもちつゝじとく、心の花が手につく是ハ竿頭につゝじの花を結付て四月八日に出すことあり今天秤棒をかつぎて商ひするものをぼていふりと云も棒手振なりさて此ぼんでん江戸にてハ端午に町々に作り設て幣を多くさし山伏を雇ひほらを吹て持あるき家毎に幣を配りて軒にさし錢を集むることありもとより禁あれども町々のわか者どもこれを行ふおもふに是そのかみ端午に小兒が山伏の學びしたりし名残なり

桂女「鹽尻」に伊勢の子良鹿島の齋の月のさはり知らぬ少女なり巖島の内侍ハ年老までも仕

へ侍るにや又伏見の桂姫の代々同號を傳へて神功皇后の靈を奉祀すされば後の家主の如くして其夫の家司の如し男子生すれば他に養はしめ女子生すればやがて家號をつがしめ侍るとかや時々東都に参り諸家にも出入す綿にて製せる帽を戴く傳へ云神功皇后の三韓御征伐の時服しましませし御帽を學ぶとかや〔安齋隨筆〕に天中庵立志が浮籠集に委しく記せりその大よそい山城國桂村上下あり上村名主累世相續して桂女と稱す諸役免許なり遠祖神功皇后御腹帶を持傳へ代々女子相續して男の家より迎ふ下村の諸役勤る者もこの分流なり其外にも其家筋あるよしなり女子家督する時代官所諸司代へも参る下知に任せて關東にも下向し時服白銀を頂戴する由下知なければ叶はず諸司代へ参るやうす名主を勤る桂女が夫麻上下にて先に立立關迄來る桂女の取次の者案内して殿中に入かの腹帶を包みて頭に戴きて入る鎌倉以往其後足利家の時分にさして其事跡見聞なしと歎豐臣太閤文祿元年朝鮮征伐に進發の時先日伏見御香宮に参詣せらる然て後聚樂出陣の砌桂女山崎の邊に至り首途を祝し奉り神功皇后の嘉例とて物捧をなせり此時太閤より衣服金銀を賜るとなり按るに〔義殘後覺〕文祿五年撰太閤御香宮に詣られし時神主女の市女なる者神前の金幣を持て公を三度祓ひ奉る公笑はせ給ひて市の心も賢くみめもよき女房かなとの給ふと有り山崎まで出て首途を祝し奉りし此市女なるべし〔鹽尻〕に伏見の桂女の代々同號を傳へて神功皇后の靈を奉祀すといへる是也但し今東都に参り諸家にも出入すといへる桂の里より來れるとなれば〔鹽尻〕の説誤れり又〔狂歌咄〕にいにしへ都の内にさもある人の家にてたき祝言のある處に

桂の里よりわかき女の参りけるその出立の顔うつくしうけはひ眉つくりうるはしき小袖をかさね我名をかつらと名乗て新婦いりむて取家造り何によらずめでたき御事の候と聞て桂が参りて候とてその事につけてさまざま詞をかざりいひつゝ祝言のはらひを致しその程々の賜物とりて歸る事侍りきといへりかく巫女めけるわざして推参し物もらふ事を古へといひし一つの頭をいへるにか更に聞も及ばぬ事なりさまで古き事にいあらじ〔山城名勝志〕に御香宮の起立年代詳ならず太閤これを大龜谷に移せしが故有てまた舊地今の處に復すと有り其神主の女を桂女といへるのも桂の里の者なりしやいふかはおもふに頭にかつら卷きたる故にかつら女といひたるにや又桂の里の女昔より鮎を賣れり俗傳に神功皇后筑紫にて鮎を釣給ひしとも云ればこれらをかごとにして其先祖彼皇后に隨ひ参らせし杯いひ皇后の腹帶といへるのかつら帯より思ひよれる歎又竊かに聞ける事あり八幡の正寶寺より阿彌の方つかひ〔職人盡〕建保のも後のも桂女のみな鮎賣なり〔三十二番職人歌合〕桂女述懐の歌「名のりのみあへり上臈けたましやよこれわらうつまはれかたびら判云上句の桂が境談の持言下句の桂が朝暮出立也云々その郷談に上臈ともいひしなりけたましの消魂の義なりけたましともいへり又花の歌「春風にわかゆの桶をいたゞきて袂もつしか花を折かなこの歌のこゝに衣服の條にいへり〔春湊浪話〕に古より京都將軍の頃に至る迄も布をもて鬻にしかつら卷ともいひて常の事にてあれば婚禮に古式なりとてする事なるべしこの體桂女に限らるにあらざるに或は桂の里の女を用なといふ誤れり此説いはれたるやうなれど彼桂がこぼさきの處に参り

桂館

祝ひごととなふることの有しよりさるとも出来しならむ又おかしき「狂歌咄」に桂のこ  
をいふ處、此はどい館を煉出して名物となり桂館とて世にもはやすとかやと有る館のい  
づくにもあれど是の桂女と世に聞えたるより館もおのづからかつらあめと廣まりしなり  
を腹帯させしよりし是  
を腹帯させしよりし是  
を腹帯させしよりし是

大原みこ

大原みこと云ふもの古くの聞えたる事なし其うへ唯名のみにてまこと其里より出るにあ  
らず「人倫訓蒙圖彙」大原、丹波國にありこゝに崇め奉る神を大原大明神と申て利生あらた  
なりこれにつかへ奉る神子昔の勸進にありけるにや今の大原みこといふの京のかたはどり  
に住で人のわすれ時分にありくなり女の鈴を振ば一荷のかますをかたげたる男鈴を合す  
る大鼓のてうしとなはつて一風あるなり其碩か「賢女心化粧」に塙末なる裏やの女共つとひ  
て物語する處に、亭主の手計まもつて居ずとも大原どの、神子に化て成とも面々が持かれ  
よとも有り

八瀬大原

八瀬大原なごの都の近き邊りなるにそのかみの詞いとふつゝかなり凡を都會の地少しはな  
れたる處其詞わきて聞くるしきの今もまかななり「東海道名所記」都の處に、年五十計に見え  
しもの二人あふといふものに繩をつけ蒲簀とかやいふもの持たる男とも女とも見えぬく  
せものなり髪をわけて結たるがさかやきもなしかね黒うつけ髭のむさくとして云々紺の  
ちいみかたびらに白布のまどき帯白き足袋はききけたれたるが黒木といふものをいたゞき  
かのえせもの行合女いふやう右子大夫殿の京へか我も今出るのといふ彼くせもの是を聞

姥た

て返事するやう父も母も京へ出たにやけら(我)も出てにや、今から京へ(來)へたらにや、  
日かくれにやといひけるどぞれかしきくせ者の八瀬といふ處北山かたの男なり都よりの  
畿に二里の山家なれども人の形も言葉つきも京どの各別なり八瀬の明神の御祭の四月九日  
なり此男共かたひらに衣裡さし美しき帯を褌にかけ御こしを振奉り云々女の大原とて八瀬  
よりの一里おくの山家ものなりされども八瀬よりの人の形はるかに勝れり  
「西武が獨吟」姥た、が参るの春の彼岸にて注た、いと、なり五音相通なりといへり然らば  
た、の都にてもいひし詞か「五元集」賀茂川に一むれとよみたるを「釋迦とよふ頭も雪の黒  
木かなちれがみなる女のおだ名にやいとけふさめたり寶永七年七月訴訟のことありて山  
城國八瀬村童子十三人江戸に來る川端伊與、松伊與、安保出雲、讚岐コボ、近江のフヂマ、越前  
入道、サヌキマシキ、播磨入道、出雲ノサル、近江入道、備前コホウ、丹後のサル、出雲のま、等  
なり

物もらひ  
多し  
偽手  
燈香  
腕香

物もらひ昔より偽り多し順禮伊勢參納經鐘鑄怪我たりといふ船頭日雇取の類也又僧の手  
燈頭香などたきて經よむものを見しとあり恐らく其方ありてするものならん「博物類纂  
十」掌中燒蠟燭、先以麴作餅、稠稀得所、舖放手、掌内外用薄紙、蓋定嚙、紅麴噴之、少間揭起、  
紙與燒爛肉相似、以燭放上火燒不痛、かやうの術にや又一種の腕香あり「鷹筑波集第二」か  
うがひなはしすげる小刀句にあらすのうで香たきやありくらん吉勝これの香を焼にあらす  
腕に小刀を指なり「訓蒙圖彙」に圖あり有髮なる者腕に刀を貫きたる物もらひなり注云佛法

火わたり  
鷹きり

を求るに、身命をおしまぬ事古今の通法にして、諸祖師其行跡あまたなり、然れども、今行人のこれをふれありきて人にみせ食をもとむる手だてなれば、名行にして、澆山キヤウかはれりとかくつらき命かはとい入るおかし、是又苦痛なく身を貫く方もあるなるべし、山伏に火わたりといふことする者なり、又觀場に鏡火をつかむもの時々あり、又膏藥を賣る者鷹をきりてその痕に膏藥をはり、即功を驗するもの有り、近年是なし、予か稚き時よく見しに、是ハ股を剃刀にて横にきりたり、その切やう二三分ツ、引々して三寸ばかりもきるなり、剃刀の尖少し残して、刃を引たるものとみゆ、日々幾度となくさる故股の上五六寸の間、すきもなし、愈たる處を切るなり、唯毛筋はどに切ゆ、血も出ざれば、外に刃引のわきざしを、抜みねに手をそへ、押切る體をなし、て切たる邊を押して血を出すなり。

慶長頃の古書に、千日參りの如き行人高あしだに乘たるが腕に香を焼小刀をさしつらぬきたるもの一人、又鉦打ならして米錢を乞ふ者一人、其かたはらにありてゆく處をかきたり、是より香を焼か、小刀ばかりさしたるも腕香といひしなり。

仲間六部  
鳩の飼

仲間六部「下手談義」に、年中江戸に住居しながら日本回國とまかくしき顔つき、是を仲間六部といふ昔のやうのものを鳩のかひといへり、此名義あるべからぬと定家卿の鷹百首の内「男山鳩やかひたるたかはかりかけれくれてや、落に行らん鷹秤の説あれ共、此歌聞えがたし鳩をもて鷹をとる事にや、彼鳩の飼いたかはかりの意なるべし」後撰夷曲集「寄鳩戀本茂」さまくにかたり付てもなびかぬ鳩のかひなき君が心中後にかたりといへるも、是なるべし。

すれから  
鳩の戒

慶庵

「和名抄」云々又はこのかひのすりからしなごもいへり、今すれからしなごもいふ是なり、すりからしなごもいふは、野の盡たるをいふなり、又鷹をすりき訓り、行旅具なり「兼盛集」に「旅人かすりもはたごも空しきを早くいまして山のされたる」  
「浮世はなし」寛文十鳩の戒とありて、鳩の糞をよく作るを見て、それを學て糞を作れども木の枝なごを組てその上に卵をうむ、故枝の間をまれて碎く、それ故物ごと心得がほにふるまふものを鳩の戒といへり「浮世物語」「浮世物語二」京にも田舎にも鳩の戒と云もの有て、萬のこの間を合せさなから其根に入たることいひ、ひとつもなければ、又えらぬ事もしあれば、是に成りかへくうそをつきて世を渡る是を鳩の戒と名付る事、鳩の人里近くすむものにて云々、鶯の巢をならひて作らむと作りやうを見るには、き竹きれ柴の類を下にしき、その上に巢をかくるそれまでも見と、けずもはや心得たりと思ひ、木の枝に柴の折四五本を渡し、其上に木葉をまきて卵をうむに、柴のあひだよりもれ落て打くだく口傳も師傳もうけずして、只見及び聞及びたるに任せて根に入らぬわざどもをまらぬことなく、覺えがほなる鳩の巢にたとへたり、又秋になれば鳩すなはち鷹となりて鷹のまねするものなれば、時に隨ひ折によりて色々になりか、はり世を渡る業をいたし人をへつらひだますものを鳩の戒とい申すとなり。  
けいあん「洞房語園」原本に傾城の辭に、譎をいひ輕薄がましき者のことをけいあんらしいといふ事、今もつてやまず、是ハ承應のころ京橋の邊に慶庵といひし醫者有しが、療治のかたのごとく下手なるが能人に追従し時々嘘をつきし、逆誰がいふとなく、輕薄がましき者の事をけいあんらしいといひふれて、終にはやり言葉になりし由といへり「伊呂芝居」享保三年雙子 萬買半分のけいあん云々萬買ハ今いふ萬引これなり 又茶人をいふ處からにも、此道に入ていけいあんをいひならひ取

口入  
念佛はうさい

賣かたぎになるぞかし取資さし道「安齋隨筆」諸家深秘録を引て云、慶安といふ事武州江戸木  
 挽町に大和慶安といふ醫師有けるが又同町に伊達三郎兵衛長谷川助右衛門といふ浪人彼慶  
 安と參會し入魂の上にて世間の人々の出入或の訴訟公事沙汰男女婚姻の媒妁等右三人にて  
 肝煎す然る處に酒井家縁組寛文五年乙巳八月廿四日彼三人御追放になりぬ其頃よりして謀計  
 をなす人を慶安者といひけり按るに此等の説然るべからず「可笑記」昔さる人のいへるの  
 狂人走れば不狂人もはしるといへる禪話ありけにもく、江戸上下の人々が慶庵の泡齋のと  
 いふ狂人共が町々小路をかけ廻り趨りありけり是を見物にしておとなしきをさなき男女ま  
 じはり走り廻り見物すさあれば彼物狂ひもいよく氣亂れてつらくせ手くせ足ずりする  
 是正保元是によりて見る時はやく慶庵といひける氣ちがひ有て諸方をさまよひありき人  
 年の記なり是に於て有し程にそれよりいひひろこれる名なるを後に同名の醫師ありて其名  
 混れたるにこそ「永閑節」寛活一休さてやま賣かなくけけけいわんて、んかう今時その  
 手をくんべいか今の専ら口入するもの、名となれり人を口入するものなども古く有しと見  
 えて「源氏玉葛」筑紫より京に上りたるに召仕ふ人もなしといふ處、京のおのづからひろき處  
 なればいちめなぞやうのものいともよくもどめつゝゐてくこれいつかへ人を市女なぞ媒し  
 將て来るなりされども今のごとくかゝる事を業とするものにはあらじ又口入といふも雅言  
 なり「常夏卷」おとゞもねんごろにくちいれかへさい給はゞこそいとあり  
 又はうさいの氣違の名なりとど踊の條にいへり「曾々路物語」もと吉原女かぶきの事をいふ

處とりわけ猿若出て色々様々の物まねすることおかしけれさうさい念佛猿まはし酒に酔云  
 々是慶長中の事なり「似せ物語」の寛永の冊子とおぼゆ其中におかし男いとかしげおとろへ  
 て米錢もなかりけりさるをいな事をならひていざなふものにつきて世中をすぎんと思ひて  
 出てをどらんとてかねなぞ買て首にかけ「出てゆかん心輕しとわらはれんよのはうさい  
 いを人のまらねば」をどらんとおもふてゝの歌念佛ありきくも申ぬる哉古き「畫巻物」  
 所載松羅館はうさい念佛のさまをかけるありその文に扱もはうさい念佛とて花をつくりて太鼓  
 かねのひやうしをうちをどりとびまはるすがたを見る人おかしく腹すぢをかへ大勢こぞ  
 りて見侍りける是わたくしに踊るにあらざむかしひたちの國に貴き僧一人おはしけるその  
 名をばはうさいとぞ申ける我すむ寺破損いたしければ弟子あまた引つれ太鼓かねのひやう  
 しをそろへをどり念佛をくはたてはんぞやうの所へをどり出て一錢半錢の勸進を得て堂塔  
 がらんを建立し給ふとかやされば今末代に至りてはうさい念佛と名付太鼓かねをたゝきお  
 もしろくおどりければをさないは申に及ばず老たるもわかきも我さきとこぞり出これを見  
 くわんまんを入れれば思ひの儘に米錢をまつへやぶれたる堂寺をこねたる橋までこんりう  
 をなし其所はんぞやうすると申ける其書寛永ころの物とみゆ文中にいへることく笠に花唐  
 草の作りものを付縁に絹を垂たり皆たちつけを着て二人の頸に太鼓をかけ四人の鉦に緒を  
 つけたるを持一人の杖にて蒲簀を擔ひひさくをもてりいづれも狂ひ踊るさまなり俗体にて  
 法師にのあらずその時むかしといひ又末代に至てなぞいへるいつの程にかあらん寛永に

葛西念佛

はうさいと「可笑記」に慶庵と井べい「世事談」に葛西の土人鉦太鼓に笛を混へて躍念佛にて江戸の大  
 路を廻る是を葛西念佛と云ふ泡齋と呼ことい泡齋といふ狂人の法師ありて町小路を走るわ  
 らんべ集りて氣違よ泡齋よとはやせり今もつてかくいふ言ありて氣ちがひの名目となれり  
 此泡齋はやされて躍るかたち異形にして人の笑をかさねしむかの葛西念佛が躍る所一様な  
 らず左りへ飛あり右へはねるあり頭をうなだるれば尻をふりておのがむれく心々にして  
 定まれる拍子もなく唯物に狂ふがごとし泡齋坊が踊るにひとしよつて泡齋念佛と呼ふ誠に  
 氣違念佛踊とも云べきなりといへり此念佛踊も氣違ひのはうさいも東國の事にて彼畫卷物  
 に貴き僧の名といへるの非なるべし念佛と云ひ物狂はしく見ゆるを「卜養狂歌」人のみな西方  
 とこそ願ひしかさかさまごどぞはうさい念佛鹿島踊といふもの此はうさい念佛を下總佐原のあた  
 りにての年老て家事を子孫にゆだね隠居して安らかに過る者の男女どもにをどりなならふ  
 其内男の多く太鼓をならふ年老て似げなき事なりその初の葛西念佛にてありけんをいつの  
 程よりかあらぬ小歌をうたひて踊れり

方藥拂

あほう拂

坊てうさい

〔甲陽軍鑑六〕方藥拂といふ物に成ければ又〔十四卷〕輕薄にして役に立ざる者を戯け者拂に  
 成されと有今あほう拂と云と同じかるべし方藥といふ懲しめて退拂ふのそれが身の方藥の義  
 にや世の諺の如く癡呆につくる藥なきをいかにせんはうさいももし此事にて實にさる人有  
 しにの有ぬにや方齋の齋の人を嘲弄す方なるを嘲齋と云しを是にの下に坊を付てちやうさ  
 い坊といふ是と同例にて人の名めかしたるなり然るに「籠耳草子」に普光院義教の時尾州に

よせい

だて者

べらぼう

殺つぶし

代足手に

長齋とてかくれもなきれどけもの有てつねに御前に侍んべりし云々又慶長ころよりのはや  
 り言にせんえやうといひしを世情よせいなど略していひしかばやがて世情よせいと湯桶詞に  
 いへりしもをかしこのせんえやうの借上なるを其頃千石少貳といふ人權門にへつらひしか  
 ばせんえやうの此人の名を略して千少といひたるなりなぞいへりみな似よりしことのをり  
 合しことい見ゆ又たて者だて者といふも功者だて男だてなぞの立にてあるを伊達家の從士が衣服  
 の美麗なりし事有ければそれより始れりといへるも同日の談なり  
 又べらぼうも此例なり「永代藏四」都傳内といふ芝居の近所利發なる男色々見せ物を出す或  
 年頭のねかしげなる者を使亂坊と名付け毎日錢の山をなしぬ「世事談」に寛文十二年の春大  
 坂道頓堀に異形の人を見す其貌みにくき事たどふべきものなし頭するどに尖り眼まん丸に  
 赤く顔頤ほ猿まの如し京師東武に及び芝居を立て諸人にみせける是よりかしこからぬ者を罵はづ  
 かしむる詞となれりと云り是もそのかみよりべらぼうといふ言ばありて後その片輪ものに  
 名づけしなりされば「卜養狂歌」この竹をけづりてこくを押つぶす是ぞまことのそくいべら  
 ぼう物に命いのちに謎なぞのやうなる一種あり世に益なきものを殺つぶしといふ今もいふ事なり籠  
 の飯を押潰す物故に件の如き者を籠といふなりはうの例の賤しむる意なり古き畫雙六にや  
 は太郎といふものあり上にいへる觀せものに其形似たり同雙六の内に山鳥金大夫といふも  
 のの總髪のりの男袖なしばをりをきたるが手いなくて兩足にて烟草をさざむさまなり此等みな  
 みせものに出しものどみゆ「齊諧俗談」にとくり手と有て延寶年中津の國大坂にて生れなが



鼻で笛吹

らにして兩の手なきもの有り足にて用を辨ず且文字を書き弓を射て芝居へ出て錢を乞ふ  
 〔谷響集〕に頭年手のなき女兒の字をかき弓をいる者あるを云て文會談叢を引たり文字を友  
又其文始めに引る〔酉陽雜俎〕の文を拆て別に一條に出せり後文相應せずこれに依りて今原文のまゝ引出其文に云唐段成式言大曆中東都天津橋有乞兒無  
 兩手以右足夾筆寫經乞錢欲書時先再三擲筆高尺餘未嘗失落書跡官楷手書不如也  
 此誠詭遇也然今京師有一婦人年四十餘全無兩臂又雙肩如削循行衢道求巧爲事每  
 梳頭髮右足夾櫛左足縮髮及繫衣浣面亦如之其輕捷穩便與手無異人多擲錢贈之亟伸  
 足取貫韋繩之上略無凝滯予爲兒時見之雖出處不定將一紀而豐凶寒暑彼且無恙又  
 段言景德中因事到岳州會見一婦人無兩臂但用兩足刺繡鞋片織緞與巧手相若服飾頗  
 潔而止之處觀者如堵人競以錢投之意世有無徒之人手足具完且不能自養乃甘死溝壑  
 是具手臂反不如此二婦人足也悲夫引以驗成式之言知不誣云このたぐひにあらねど  
俠客に腕を截たる者あり〔五元  
 集〕鷄合の判詞に中古野出の喜三郎と云もの片腕をさられ骨に皮引かゝりて見苦かりしを  
 鋸にて肘の程より引きりて捨たり桑門となりて片杖と號すと見えたり  
 鼻にて笛を吹先づ年坊間にて鼻を口にかへて草笛を吹て物もらふかたぬを見たり今もあ  
 りやゑらざるきたなげなると一目見るだに心ちあしされど笛の口にて吹にことならず張世南  
 が〔遊宦紀聞〕に沙隨程先生嘗云頃於行在見一道人以笛柱項下吹曲其聲清暢而不近口  
 竟不曉所以然此說已在三十年前嘉定庚辰先兄岳翁趙憲伯鳳自曲江携一道人歸三衢  
 亦喉間有竅能吹簫比飲食則以物塞之不然而水自孔中溢出每作口語則塞喉間語則以

胸たき

節季候

鳥追

きよめ

非人  
かたぬ

手掩口先兄之所自覩但不知沙隨先生昔所見者是此人否  
 胸たき〔二十二番職人歌合〕に胸たきといふ物もらひ有り頭に編たる頭巾のやうなる物  
 を着裸にて腰に餌ふごを付たり手さて胸を叩くによりて名に負るなり其歌宿ごとに春ま  
 ゐらむとちぎりし花のためなるむねたきかな判云春參らむと節季に契りしを花のため  
 ぞと春おもひゑらせぬる胸のうちやさしくこそ侍れとあり是後世の節季候なり胸たきと  
 いふ名の後世扣の與次郎といふも似つかはし與次郎の悲田寺の内に居て其類のかしらたり  
 二季の彼岸又所々の祭禮の頃いたきといひて口はやなることをいひて物もらふとなり又  
 毎年臘月より節季候となり元日より十五日まで鳥追となるこれを扣といふといへり〔俳諧  
 染糸〕たきくたびれかへる門前口々にこへと勸進いれづして  
 きよめ〔今物語〕に或藏人五位月夜に草堂へ參りけるにいとつくしげなる女房のひとり參  
 にあひたり云云かへりけるにつきて行ければ一條河原になりけり女房みかへりて玉み  
 くりうきにもなせぬをとめてひきあげどころなきみなるらんとひとりごちてきよめが家  
 のありけるに入にけり此きよめといひ穢のものなるべし〔雍州府志〕に凡穢多之始吉祥院南  
 小島爲本此處有種乃保里者云々此徒毎日輪次掃除二條城外之塵埃是出自棄不淨者  
 也いにしへ掃清めするものなればきよめといへるなるべし  
 非人のもと貧人と書り非人といひ悪行ありて人にあらぬ者の名なりかたぬり路の旁に居て物  
 もらふ故なりといへり今病の名をいふり癩の一名を〔證治要決〕に害大風とありこれを

物吉

ものよしといふの反語なり  
 物吉のものと祝詞也〔江家次第〕被補次侍従事、元日節會、輔親朝臣公則朝臣參入著幄、稱云、元日奉拜龍顏、是物吉之事也、其後久無諸大夫著幄、とみゆ瘋人にいふの〔醒睡笑〕祝ひ過るもいなものといふ中に或者正月二日の夜夢にれもひよらず我身に癩瘡いできたると見て目ざめて案ずるやうかれをば物吉といふなれば仕合なにはに物よからふといへる咄あり〔西武獨吟百韻〕またよに古質のこるものよし荷ひ賣行もかへるも二季のきりにかなならず初穂をものよしが取なればかく付るなり〔人倫訓蒙圖彙〕に物吉の竹の皮籠のすみぬりにはりたるを負て浴中を勘進に出る物吉といひをめしより縁儀よしとて名付しものなり其圖の癩人籠を負手に棒を持たる乞丐なり貞享の頃に荷ひ賣の初穂といふ定めもなく廣く物費てありさしにや〔嶺南雜記〕吳震方潮州大癩癩極多、官爲立癩癩院、如養濟院之設也、在鳳皇山上、聚癩者其中、給以口糧、有癩癩頭、治之其名亞胡、衣冠濟楚頗能饒富、人家有吉凶之事、癩人相率登門、索錢索食、少則罵言、必先賂亞胡、求片紙粘門、癩人即不敢肆、院中有井、名鳳皇井、甘冽能愈疾、癩者飲之即能不發、肌肉如常、若出院不飲此井、即仍發矣、入院游者、癩頭特設淨舍淨器、以欸之、其中男女長成自爲婚匹、生育如常人、癩女飲此水、面目倍加紅潤光彩、設有登徒犯之、次日其女宿病已去、翩然出院、而登徒侵染其毒、即代其癩、不數日眉鬚脫落、手足癩痺、肢節潰爛而死矣、この事この趣にひとし求片紙粘門といふの今いふ仕切札なり彼是似たるいとあやし唯癩女疾を人に傳とい俗説なるべし癩人を俗になりんばといふ

仕切札のなりんば

乞丐人等を断る

雪駄直してい

の取坊をとりんばといふと同例にてなり坊なり業平朝臣の像のものとよりの眉の落して額の上方に眉を作りたる故俗人は是を知らず眉なき人と見て彼病人に准へあしきものをよしといふ反語をもて然呼りとみゆ〔見聞集〕に髻を剃たるものを昔男のなりひらとやいはん又〔下手談義〕豊後ぶし語りの風俗をいふ處、曲の頂上にあがり眉毛ぬけて業平に似たり〔胸算用〕南都のことをいふに、十二月晦日夜都の外の宿の者といふ男とも大乘院御門跡の家來因幡といへる人の許にて例にまかせて祝ひはじめ富々々々といひて町中をかけ廻れば家ごと併に錢をそへてとらせける是をおもふに大坂などにて厄はらひに同じ  
 〔經濟錄〕享保年中諸乞丐人をば皆髻を断しめらる是より平人と異なる誌出來て混すること能はず目出度政なりといへり按るに享保七年寅五月年來善七彈左衛門手下にあらぬよし爭論せしが此時善七方人とも負となりしことあり髻断しめられし此時なるべし  
 江戸にて雪駄を繕ひにありくものでいゝといふの悲田院の訛れるなりといへるの非なり〔雍州府志〕にも悲田院にはさる者なし東三條の南なる天部村の悲田寺と一雙の處にてこれにもはら屠人のみ居て牛馬を剥き革を作り種々の物に製す又市中に出て履のやれたるを補と有りていゝの何を云にか上方にていゝといはずなほしといへりいゝの手入と云ふことなり〔輕口咄〕に田舎もの髪結錢十文なるを價やすきと云ふを宿主それよりあとの白川橋でい七文で坊主にしてくれますといへる咄ありそこの餘部ある故乞食のわたまををるなるべし〔洛陽集〕白河橋にて蓮の實やあまべをとんで水清し自悦又歳暮年波やか

の白川の姥らが庵有知姥等の女こしきなり十二月出て物をもらふ年わかきも姥等祝ひましやうといふとぞ

非人小屋

延寶三年卯二月廿六日町御奉行宮崎若狹守殿被仰渡柳原川端に罷在候非人共頃日の雨にて數多相果候由を聞召不便に思召候間今日の雨にも痛可申候間先今晚中にぬれ不申様早々取あへず小屋かけ入置可申候此方三人共手代召連罷出三間半に十五間の小屋懸させ日暮前に非人不殘小屋へ入申し兩奉行同心壹人ツ、名主三人罷出廿七日和泉橋と新敷橋の間に貳間に貳十間の非人小屋三ヶ所可被仰付候間早々入札爲致非人小屋掛直出來三月二日より柳原非人共に施行被下候伊奈半十郎に支配被仰付手傳の町人足十人つ、毎日出聞四月廿一日より非人少く罷成候に付役人も人足も減可申被仰付候廿五日よりもはや非人も無しに付施行相止小屋御崩し車善七に被下候

乞胸仁太夫 願人すたゝ、 神事舞太夫

乞胸仁太

乞食の部類に乞胸と呼ものあり辻はなし辻講釋其外編笠を着て物乞ふものみな乞胸に屬す其者を仁太夫といふその由緒書といふ物ありその始め上がた浪人と見えて江戸に下り説經祭文を三線に合せ往來の路次に蓆を敷合力を請たるがいつの頃にか所々の明地寺社の境内にて霞簀を張木戸錢を取小みせ物綾取猿若江戸萬歳辻放下からくり淨るり説經講釋物よみ等支配いたすべき御ゆるしを蒙りしとなんおもふに慶安中に武士浪人御府内に住居いたすまじき御定めありし頃にもや有らむ非人頭善七より毎年節季に鳥追の編笠幾つにて何程と

新非人

か定りて役錢と號し仁太夫へ贈る事となむこれをれもふに京師の與次郎にひとしきものなり乞胸といふ胸たゝきの名に似つかはしけれは是れもと乞旨などの意にや

元祿十四年巳十二月十二日より翌午五月廿一日迄本所小梅村にて小屋がけ新非人に施行有之候扶持等のこと御代官伊奈半左衛門殿より渡り候男女小兒共壹人に金壹分ヅ、被下當所立はなれ候やう申渡にて小屋御はらひ被成候金高五十八兩壹分此人數貳百三十三人右の内六十二人の本庄小屋新非人善七松右衛門に預候分百六十人今日半屋より出候無宿十一人右貳百三十三人の内女小兒の分松前伊豆守殿御番所へ町々のもの被召呼奴に被下候町々請取候町數合四十七町人數合五十二人

女兒の非人  
の奴を  
出家人  
主人願  
敷調  
敷調

又法師の乞食に願人といふものを一説におもへらく訴訟の事ありていづくよりか江戸に來りその事引ゑろひて久しく貯へ盡てその者どもかゝる者となりぬといへる非なりもどより乞食にて代待代垢離かきなどして有しもの故願人といふなり萬治元年戊戌八月十五日町宅之出家山伏願人坊主名前帳面に仕立町年寄へ可差出之尤旅人之出家の御番所へ可申上旨被申渡候慶安五年壬辰二月三日江戸町觸南方出家百廿二人之内三人家持山伏百八拾三人内十三人家持願人十三人道心者十四人行人五人五口合三百三十七人と有家持の山伏多きいむかし華美なる粧ひして峰入の供するを名聞として答られたる者など有り寛文二年寅九月十八日町觸出家山伏行人願人町屋に宿借候ハ、本寺より弟子に無紛段證文を取其上請人を立裏店に差置可申候云々〔洛陽集〕寒垢離かあびける水に月もなし有知〔俳度曲〕

願人すた

まひしよ

木葉坊

神事舞大

享保七年刻 正尊を「榎のかけや誓文ばらひ村まぐれ貴山これすた」坊主也願人坊主裸にて鉢巻し志め手に扇を開き古き畫雙六にも見えたり今も手遊に此京師に正尊の祠あり誓文拂といひて市人これ錫杖をもちに詣この願人のその代參の意とみゆ後にいわけもなくすた「坊主のくる時の世中よいと申すなごいひて踊れり」とぞ「竹丈點冠付」浮世かな賣僧すた「口の世話不角が「篋絨輪」早足に高聲あやし冬の空はだか代待自己の追劔其後の寒中行衣を着頭を白布にてかつら巻にし鐸を振て細かき繪紙を切たるを蒔ちらしなからありけり童部多く付てこれを拾へり蒔けふを子供らまよふよきいふこの繪を蒔しそのまへに天狗の面を着たる社人天王様の守とて故これが名をまかしよといふ小札をまさたり此事「事跡合考」に具さに出たり件のまかしよも寛政ころよりなくなりて榛田稻荷の代參となり住吉踊などいなり

正徳二年「鎌倉咄」我等の里々の麥秋をこゝろさす願人坊の玄海が體をして見せ申さんとたちまち日待山伏の姿になりまかはんにやはらみつと舌のまはらぬ所のあれど口ばやにくり返し印をむすびかけ手を打て其まゝの法師がら

宿なし坊を木葉坊と云へり「榮花咄」木辻鴨川に乞食坊あり此坊主世にある時はぬ女郎一人もなしその善惡をいふことうるさくいやがりて一文ヅゝやりていひやませけるに次第に奢り付てわる口いひやみ賃直あげをして後の三文ヅゝ毎ばん取ければ此處のあげ錢八十五匁と外に三文の木葉坊主が取と大笑になりぬ

神事舞大夫元祿年中より大黒の像竈神青襖像繪馬都合三枚の札支配下の者共在々に配申

候いまだ御當地に相配不申候竈神青襖札壹枚宛江戸御町中相對を以年々正五九月私方より相配申度元文二年巳八月十八日奉願候處其通被仰付夫より年々配來巡行仕候兩人之者共老衰仕寶曆年中より江戸御町中巡行仕候儀中絶仕候由乍然蒙御免候儀に御座候間淺草御町中年々巡行仕札相配申候何卒先規之通正五九月江戸御町中私爲名代淺野丈之進八坂主水と申者巡行爲仕竈神青襖札相對を以相配申度段天明八申年十二月晦日先々八太夫奉願候處翌寛政元年酉二月十八日願之通被仰付是迄正五九月前月御月番様へ御届申上札配巡行仕來候處御町中御觸被仰付被下置候より十八ヶ年餘に相成候故町方町役之者追々相替り御觸之様子不相辨勸化之様に相心得候者もまゝ御座候間依之札配巡行不行屆難澁仕候且又名代之者老衰仕候に付遠藤帶刀昌津織部を私爲名代札配巡行仕度奉存候何卒先々之通差支無御座候様御町觸被仰付被下置候様奉願上候云々文化四丁卯年十月四日寺社方へ出したる願書之略なり其札出世開運火除守竈神火除神祕青襖御札習合神道神事舞太夫頭田村八太夫に青襖のあをぶすまにあらずあすいとよむべし「古事記」大年神の御子に阿須波神あり「萬葉集」爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之とも見えたり庭に竈神と共に祭りし神なり

嬉遊笑覽卷十二上

○禽蟲○みせもの 水右衛門 馳つかひ 孔雀つかひ 天狗 猴まはし 猴引道具

見せ物

厥の祈禱 さる眼 蚤とり眼 たぬき寐 貉評定 四國を廻りて猿となる 人を馬となす 食後に臥て牛となる 十二支の歌 光陰の道行 御猫 ちよつかい 猫も杓子も 猫に袋 犬けしかくる ころく 犬の聲 へいか 一もつ 白鼠 鼠の嫁入 鼠鳴 鼠れとし 人を鳥獸に比す 鼠むつこ 鼬のまかけ みめよし 狐の窓 獺 うそつき彌二郎

水右衛門

禽獸その外片輪の人などをも觀せものとする事の歌舞妓よりも前なるべけれど物に記せるも少し〔東海道名所記〕木挽町の處、うとかまことか異類異形のものを見する〔洛陽集〕に「君が代や鬼の生捕初芝居正武これ何にても珍らしきものを觀場に出せしなり〔伽羅女〕大坂生玉の處、何事も此津の大さ猿の狂言鬼の生捕錢のもどりと看板を見廻るなどいへり

鹽屋長次

〔諸艶大鑑〕貞享元年水右衛門がまねして此藝を仕入る犬に烏帽子をさせ猿に袴かたぎぬ鼠の宮參前に反橋かけてそれく世をわたる業覗いて見るも獨わらはれて〔胸算用〕長崎水右衛門が仕入たる鼠つかひの藤兵衛云々其碩が〔商人世帯形氣〕に過し水右衛門が犬猫に藝を仕入貴人へよい金取て上げるよしとかく金まうけんとい人工夫すれば鹽屋の長次が馬をのむ術もなる事と見えたり鹽屋長次郎は元禄中の目くらましにて高名き者なりその頃の草子に往々これが見えたり〔葛藤下〕關江戶湯島天神前に住り〔江戸鹿子〕にけた物藝仕付水右衛門さある是なり

蛇つかひ

蛇つかひといふ世にぬらくら者を蛇つかひといふ是なり蛇つかひの蛇のはじめ捕へたる札りんと眞晝の影あやつりに尾花曲球打蛇つかひ又不角が撰集に「放下にならぬ輕薄の蛇といふ句あり是の世にぬらくら者を蛇つかひといふ是なり蛇つかひの蛇のはじめ捕へたる

蛇蟲

時木綿きれにてとらへ逆さまにまどけば鱗の縁にいと細かなる刺あるが皆木綿に着て落る又口をわけて木綿ぎれを含ませ堅くつめて引出せば細なる齒残りなくとれて蛇の力なくよわるをつかへば自由になるなり餌の鶏卵をととき匙にて少しづつ飼ふよし聞り〔癸辛雜識後集〕有戴生者善捕蛇凡有異蛇必使捕之至於赤手拾取如鯁然或爲毒蝮所嚙一指腫脹如椽施於篋中取少藥糝之即化黃水流出平復如初然十指所存亦僅四耳或欲捕之蛇藏匿不可尋則以小葦管吹之其蛇則隨吹而至此爲尤異其家所蓄異蛇凡數十種鏽齒毛身白質赤章或連錢或紺碧或四足或兩首或僅如一衡而首大數倍謂之飯揪頭云此種最毒其一最大者如殿楹長數尺呼之爲蛇王各隨小大以筠籃貯之日啖以肉每呼之使之轉升降皆如意其家衣食頗贍無他生產凡所資命惟視吾蛇尚存耳亦可彷彿家龍之伎矣おもふにこの蛇つかひのもの語盡のよしいはねとも恐らくい蛇蟲をもて資命とせし者ならむ蛇蟲犬蟲ともに〔搜神記〕にみゆ後の書に〔嶺南雜記〕に潮州有蛇神其像冠冕南面尊曰遊天大帝窟中皆蛇也云々凡祀神者蛇常遊憩其家甚有問神借貸者とあるの類なるべし本邦に蛇を祠れるの所々にありされども蛇蟲の多く聞えず〔和訓栞〕に大神の四國にあり甚人を害す〔御選〕云その國の人の語ると聞しに今も大神なる者の末あり良民これをいやしむにふりてそのものごち嫁娶すさ知りそれ欲しがる物を問尋ねればいたく恥ていさ殺ましき事なりいかに何の物ほしかりしとつゝ雲州にいへそのいふところの物を彼にさらす時ハ崇り止されども深く恥る故再應さされはいひ出かねるさなり狐蟲あり此いづく又四國に蛇蟲をつかふ者あり是をへひもちと云ふ石見などにて是を土瓶といふ蓄ふる器をもて名つくるなるべしよて大神とうひやうとならべいへり邪術なりか

犬神

くだ狐

るたくひの其處の人も婚を絶ち交を結ばず又備の前後州に猫神猿神など有て狐神のことし  
信州伊奈郡のくだ上州南牧の大さき使も同類なるべしといへり  
〔乘穂録〕に遠州にてくだ狐の人につくことあり其人なまを食して餘物を食せず尾州に  
て云ふかまいたちとの對なり

孔雀つひ

孔雀つかひの貞徳が〔油加須〕まへやくと江口にそ云ふ孔雀つかひをいあてやよく覺らん  
〔秘傳花鏡〕に一名越鳥出交黃廣雷羅諸山云々聞人拍手歌舞及絲竹管絃聲是鳥亦鳴舞音  
之者每俟其屏開取樂其性最妬見人着彩服必驟之といへり按るに杜甫が句に屏開金孔  
雀といへるも舞へるさまなるにやもとより舞を好むものなれば使ひならさばよくまふべし  
されど孔雀つかひ其後の聞かず此鳥の尾の金眼を孩童戯れに口に啣みて死にしこと有とぞ  
殊に膽と血と糞とい毒尤はげしといへり然るに嶺南の人肉を餉饋となすに味ひ雁の如し  
あかも百毒を解といへり但しこれを食へば薬をふくしても効なしとなり

天狗のみ  
せ物

猴まはし

〔洞房語園〕局庵梟辨、さいつころ昔や町小芝居にて天狗のみせものくと呼はつて手をた  
いさ人を招く何ならんと偽さるゝとは知ながら這入てみれば梟の額の毛をむしり丹を塗こ  
みちいさき兜巾をかぶせ紙にて裁付をはかせ其体畫ける天狗の如し世の中をたはけにした  
るやうなれど云々今も鴟なぞを作りて天狗の巢立とてみすることなど往々あり  
猴まはし猿字の手ながざるなりこゝに産せずの常のさるゝ獼猴なり猴とばかりも云べし  
さるを馬の祈禱にする故廐に猴木とてさるをつなぐ木あり〔稗海〕の中に収めたる〔獨異

猿を廐に  
置く事

志上〕に東晋大將軍趙固、所乘馬暴卒、將軍悲惋、客至更不敢通、郭璞造門語曰、余能活此馬、  
將軍遽召見、璞令二十人悉持長竿、東行三十里、過丘陵社林、即散擊、俄頃擒一獸如猿、持歸  
至馬前、獸以鼻吸馬、馬起躍、如今以獼猴置馬廐、此其義也、このみにもあらず漢土にも  
是を本據としたり〔齊民要術〕「事言  
要言」なごにみゆたかれどもこゝにこそ其物なければ猿も猴も通はしてさる  
といよめ漢土にのみとより別れたる物なれば代用む事いかなりそのうへこれの正しく猴  
にもあらず猿に似たる物とのみいへれば何にかあらんいと覺つかなきものならずやか  
るたぐひの事いよ多かれば益なき事をたくしくいはむをこなるべし世の習とな  
りての改め難き事このみならずさて猿まはし〔列子〕に宋有狙公愛養狙とみえたれば  
なすらへて猿舞しを狙公ともいふへきにや〔雲合奇蹤二十〕巴蜀成都城東七十里、座黑支山、極  
多獼猴、向來遊手遊食的人、都將他教成、拖鎗舞棒搬演雜戲、こゝに〔東鑑〕に美作國より猿をまう  
正義と有り廿一日の條の事〔著聞集〕にも見えたり足利左馬入道義氏朝臣〔東鑑〕に美作國より猿をまう  
正義と有りけたりけり其猿えもいはず舞けり入道將軍の見參に入たりければ前能登守光村に鼓うたせ  
られて舞せられけるに誠にその興有てふしぎなりけりけんもんさのひた、れに袴にさやま  
ささ、せて烏帽子を着せたりけり初めのとかに舞てするさまにのせめふせければ上下目を  
驚して興じけり〔東鑑〕教隆云是  
非直之事歟舞果て必纏頭をこひけりとらせぬ限りのいかにも出ざりけり  
云々件の猿やがて光村あつかりて養ひける馬屋の前に繋ぎたりけるにいが、またりけん馬  
に背なかをくはれたり云々〔三十二番職人歌合〕猿引か歌「ちく生もつかひいるれば中々に

われにいましの能のおほさよ又さるにえはしといふ諺も古き事なるべし〔史記〕に項羽楚人沐猴而冠耳とあるに起る楚國にい獼猴を沐しをさちのどをやま〔猿樂狂言〕にうつは猿に、猿の山王まざるめてたいまつきおろしの春の駒かはなをつるべて参りたるそや白かねこかね御知行まざるめてたきをどりの一をどりは是其頃の猿廻しが唄なるべし〔恨之助草子〕くびつなにてひきも出されざるいさんわうまさるか参りたいぬいからくなどいはいれん事めの前にて候是慶長年間の猿廻しも同じ趣とみゆそのかみ猿引長刀をさしたれば諺にも云り〔貞徳獨吟〕自注百韻「晝中によその木實をかつものかつなげる猿にまつけすさまじ手飼の猿か木實をかつけさる體なり」月かけに長き刀のまらばどり猿つかひの長刀又〔淀河〕に「ものけの太刀をつかふに逃去て犬に用心するい猿曳又〔安布良加須〕に「おきんとすれば引ぞとむる御禮をよく申せとの猿つかひ〔整草〕に世中にいらぬものさる廻しの長刀などあり又猿まひ腰といふと〔京童〕にふせきかねたる嵐山の猿舞腰となり云々仲ぬ形をたどふる也漢土に〔秘傳花鏡〕に畜之者使と索縛其脛坐於杙上鞭棰旬月自馴養馬者多畜之厩中任其跳躍可辟馬病丐者畜之教以戲舞舉動儼如優人好事者多般訓練使之應門或對客送茶以此駭觀取樂云々又一種小而毛紫黑者出交趾畜以捕鼠勝於猫狸頗有靈性能知人意飼以生采果物則不大若飼之熟物易大可厭こいにも一種小きものあり四國さるといふいづれも子のうちより飼はされば舞されずといへり又いと小き三寸ばかりなるを木葉さる又まめさるともいふ嶺南の産にて〔廣東新語〕に拳猴と

猿引道具

いへるものなり四國さるい紀州粉川よりも出と云り西土にの品數多くみえたれども今この條にえうなければいはずさる引道具と云ことい〔訓蒙圖彙〕に中國の猿いさまく藝をさする故に猿引が腰に道具を多く付るなり此故に腰に物多くつけたるをば猿牽といふなりといへりおもふにもと猿牽の長刀といふ諺より移りしなるべし道具といひしその長刀の事なるも知べん〔狂歌咄〕に「名にたてる狗と猿とのいさかひも米みせられてかみつきもせず端書この猿牽腰に餌ふごと赤熊のやうなる物を提て刀いさかず此頃の寛文そのと止しにや又〔訓蒙圖彙〕に猿舞京に来るい伏見の邊其外處々に住す羽織に編笠腰にるふごをつけ米をいるい猿牽こゑうたのふし分て備りたり古き前付付「淋しいといひはれず壁越に猿引の歌を書とめる〔事跡合考〕に西田屋又左衛門がもの語を記して云遊女屋京柳町にありし時揚屋の勝手の方に馬屋を立置馬五六疋ツ、飼置曉に客の歸る時その馬に鞍置乗せて送りし也その揚屋に橋屋といふ最上のもなり依之其頃正月の初め猿牽揚屋中の馬屋を祓ひいたしに来る先橋やが馬屋より舞し始めし也依之末代揚屋に馬の飼はざれ共今年に至る迄毎歳正月猿牽吉原町に至る時先揚や町橋屋か許より舞し初るなり云々いへり徒流云昔揚屋に茶屋一軒づい尾張屋さいふ茶やあり揚屋にのみな外繫ありしなり客の馬をつなぐ爲に設く尾張屋清十郎いまだ残りたりし程ハ猿曳大門を斷なしに入て先尾張やへ來りて祝ひそれより家こまに歩行たり今ハ猿曳廓に入事なし江戸の三谷橋のわたりに猿牽が家十二軒ありて正五九月に御廐に祈禱に出其外諸大名の家舗の廐に行皆此處より出るなり近國の猿牽ども江戸に來ればこの十二家の内に宿して毎日江戸中を引ありくとなり

猿廻し廐  
の祈禱に  
出る

猿眼  
蚤より眼

猿眼り

たぬき寐

猪睡

猪評定

猪つき

四國を廻りて猿なる

人と馬と

猿まなこ蚤とり眼の同じ事なり「守武千句」に「こそより来てこそはゆれ犬櫻さるまなこにて花をみる頃」丹前能に好物をいへば猿がのみ取眼云々今のみどり眼とのみいふの省きたることいみゆ

猿ねふり「可笑記」なまあたかなる畫のことなるにこえとりもさ馬上にさるいねふりして通るかいとう打ねふりてやゝもすれば落ぬべき時にめを覺すこと度々なり猿がねふる形に似たるをいふとみゆ空ねふりをたぬきといふ「浮世物語」に家に盗人の入たることをいふ處、たぬきねいりをして居たるもあり「續山井」つゝみ草に、狸ねいりの胡蝶かな友久たぬきねいりといへとも狸の空ねむりのせぬにや徐實父が「毛詩名物圖識」に貉睡といへり「本草啓蒙」にむじなの晝の目見えず耳聞えず人近づきても動かすして眠れるに似たり此に觸れハ驚き走るとぞ俗にいふ小田原評定と云ことをむじな評定とも云しにや「五元集」行年や猪評定夜明まで佐渡にハ狐なし土俗物さわがしくまどなき者を猪つきのやうなりといふ他にて狐つきといふとおなじ其地にてハ猪折々人につくことありとぞ

四國を廻りて猿となるといへる諺ハ風來が「放屁論」に今童謡に一ツ長やの佐次兵衛殿四國をめぐりて猿となるんの二人の連れ衆ハ歸れども猿の身なれば置て來たんのといへりその頃いひをめしにハあるべからず諺ハもとよりありしにやさてこの諺ハ誤ならむ四國猿と云事より移りしか「舊本今昔物語」に通「四國邊地僧行不知所被打成馬語あり」奇異雜談に丹波奥郡に人を馬になして買し事又越中にて人馬になりたるに尊勝陀羅尼の奇特にてた

食後に臥て牛さなる

たすかりし事なぞみゆみなむかし物語よりいひ出しことなりさればこの諺久しき事と知らる是を猿といひかへたりとれもはる又按るに「搜神記」に蜀中西南高山之上、有物與猴相類、長七尺、能作人行、善走名猿、一名馬化、或曰獲、同行道人有後者、輒盜取以去云々、取女去而共爲室家、其無子者終身不得還、十年之後形皆類之、とありこれなぞより出たる事か知べからず猿の類といへば猿のかたに似つかはしく又馬化ともいふ名をひかめてハ馬ともいふべくや「蜺菴瑣語」明朝南京孝陵内、善鹿數千、頂懸銀牌、人有盜宰者抵死、崇禎末年、余解糧到京、往遊陵上、猶見銀牌鹿往來林木中、始信唐世芙蓉園、獲漢時宜春苑銅版白鹿、爲不誣也、飽まで食て寐れハ牛になると小兒に教るハ食後に臥さしめざるなりさて又これにも諺あり「名所和歌物語」三浦淨心の撰なり見しハ今愚老みちのくへ下りしにくりはらの郡つら川といふ在所につきたり爰に池中に鳥あり昔この里にぬいゑもんと云老人あり僧を一人ふちする此僧經をもよまずひるねばかりをせし處に有時黒き牛一疋はなれて庭をはねまはる繼衛門とらへてみればいまだはなづらとをさず此牛ぬしなして牛麿ををしつなぎ置ければ晝寐を好む僧が牛に成たるなりぬひ衛門ひる寢して又牛になりたり是ハきたいのためしなればとて池をほり此島に二疋の牛を放ち置たる事百二十年以前の事なり今もその二ツの島に時々出て見ゆるとかたる愚老聞て無智の坊主里の名に負てつら皮あつき牛となりたるも世に不思議なり「智のうすく欲にまどへるびくぞくの面かはあつく名にやおふうし」此外僧の牛さなりたる古の語いさ多し又李伯時好馬を畫くを道人戒て來生馬となるべしといひしかばそれより改めて佛像をのみ畫



けりどぞ〔劉公嘉話録〕に開元中に畫匠解奉先といふもの妄に誓を立て牛に生れたるもの語あり一世に傳ふむかし能筆の畫工牛をかゝむとて思ひをこらしいねふりけるに其形牛とみたりしかば人ねどろきて呼起しかくと告しゆる其後の佛像をのみ畫きたりといふの畫寢して牛と成といふ事と此畫工のその語を取りて作しり事なるべし  
牛の聲をもうくと聞ここの昔もかはらず〔守武千句〕けふもとはれず心もうくとこの葉をいひちかゆるのうしに似て

十二支の歌

光陰の道行

十二支の歌〔新撰狂歌集〕修行者一夜の宿をかりけるに其夜彼宿へぬす人來りて牛を引ければあるし此そをうたがひすでにいましめんとえたりける時我の西行法師と申修行者なりと名のりければよも西行にはあらじ西行とやらむひきこふる人なりさらば歌よめとせめければ馬羊猿鶏犬のそちへいねうしとらぬみもうき名たつみにとよめりとかや其角が〔光陰の道行〕またおかし妻戸をあけて出給ふ畫の人目をかくれ里あなめくとかこちけん破れ扇のかなめより結ぶれもひの葛の葉のうらみかはせし二見がた伊勢の野飼の花すゝき桔梗かるかや小車のわれから物にくるふとはかの祐成のまのび妻その夜のさむし千鳥なく月海上にうかれ女の泪にくもる村雲の雨を起して鳴神もいかでか中をさけてまし巳の日の祓ゆふしでの誓ひをたのむ加茂川やいくせをわけて足揃うかれ色にてすつとんくとんと打てはまどとうつ打けん杖の下よりも獸となりし石もありげに世中のうき事を思はざるこそまざるなれまた逢坂の關守も一夜のゆるせとまるまし百夜とかこつかよひ路をとかむる聲の

深草の中にも是の狗子草はえ出しをころくとひとりかるも〔荊蓮〕の床とかやふしみの里に明わたるよめが君の心の内父こひしとの給ひて油地獄に着給ふ鼠にもやがてなまむ冬籠り「ほどとくす我や鼠にひかれけむ、この道行の文十二支をいへり

〔雲谷臥餘〕朱文公理學大儒不屑爲世俗文字然遊戯點染間亦不乏其作十二禽詩云夜開空窻鬪饑鼠、曉駕羸牛耕廢圃、時方虎圈聽豪夸、白業兔園嗟莽鹵、君看鸚鵡臥三冬、頭角不與蛇爭雄、毀車殺馬罷馳逐、烹羊酤酒聊從容、手種猴桃垂架綠、養得鷓鴣鳴角々、客來犬吠催煮茶、不用東家買豬肉、〔艸山集十五〕戲作十二辰詩、獨笑怪鼠叫唧々、神遊何勞疲牛力、時跨虎頭千里歸、偶舉兎角黃仍陟、君看臥龍睡常濃、群蛇巨窺九淵中、長途馳馬客自苦、瘠土牧羊人未窮、貪月彌猴能溺水、牝鷄抱卵知所止、狗吠便有敲門聲、不用燒猪待俗子、また〔廿七〕武州赤坂圓通寺鐘銘序あり略す銘曰、鼠山流光人未驚、牛王出世振梵聲、虎狼野干氣縱橫、兎角方便誘群情、龍宮高處擊華鯨、蛇室睡破覺心生、馬腹忽變聖胎成、羊鹿牛東休復蕪、猿啼霜降月色清、鷄人未鳴客先行、狗不夜吠王舍城、猪觸金山轉崢嶸

十二相屬

〔陽谷讀録〕十二相屬前輩具未、有明所以取義者、余竊日見家瓊公選云、子寅辰午申戌俱陽、故取相屬之奇數、以爲名、鼠五指、龍五指、馬單蹄、猴五指、丑卯巳未酉亥俱陰、故取相屬之偶數、以爲名、牛四爪、兎兩爪、蛇兩舌、羊四爪、鷄四爪、猪四爪、其說極有理、必有所據、惜不及詳聞之、〔小右記〕曰、長保元年九月十九日者、丙裡御猫産子女院、左大臣右大臣有産養事、復重椀飯納管之衣等云々、猫乳母馬命婦、時人咲之、奇怪事也云々、未聞禽獸用人乳、嗟乎、とみゆ衛懿

御猫産子  
左右大臣  
有産養事  
猫乳母

猫も杓子  
猫のちよ  
つがい

猫に袋

三毛猫

へげ猫

公が鶴を愛せしも同日の談なり〔筠廊偶筆〕前朝大内、猫犬皆有官名、食俸中貴、養者常呼猫爲老爺、また〔瓢腹〕にも合肥宗伯が夫人愛する猫斃たるに沈香にて棺を作りて瘞め僧十二人を延き三晝夜道場を建しことなども見ゆ〔枕草子〕うへにさふらふ御ねこのかうふり云はりて命婦のおもとといとおかしければかしばせ給ふ〔源氏若菜下〕ねう／＼といとらうたけになく〔花鳥〕に猫字の音めうなりねうの五音通ずるなり漢土にて猫と名づけしもさる心にや爰にてねこといふのそれと異なるべし猫も杓子もといふ諺の猫のちよつかい杓子に似たれば云なりちよつかいの一能搔なるべし〔洛陽集〕ちよつかいにたつ名ぞ惜き猫の夢友言これハ柏木と女三の宮の事をいふとみゆ

猫に袋蒙らする戯古き戯畫にみえたり〔安布良加須〕音にきく猫の耳といはるはやらん袋の貌をはじめてぞ見る袋の母のこゝなも予むかし畫の讀を人に乞はれて「着た笠の袋か田植女か猫背中して跡にささる」紙ぶくろきねと田植か猫背中ちよつかい早く跡ささるする

〔江戸著聞集〕に元祿年中三浦やの遊女薄雲ハ平生三毛の猫を愛し禿に抱かせて揚屋にも行ければ是を學べる遊女もありとそ其角か「京町の猫かよひけり揚や町といへるハ此ことなるよししへり

三毛猫ハ〔酉陽雜俎〕また〔月令廣義〕などに金華猫ハ人を妖するよし見えたりこれにや但し金華ハ地名にて猫の毛色をいふにあらねば此にもあらぬにやへげ猫〔今昔物語〕に灰毛斑なる猫といふ是なり

犬に名を  
付くると  
いと古し

犬けし  
くると  
犬ころ

犬の聲  
うぐ

べい犬

〔垂仁紀〕八十七年に、昔丹波國桑田村、有人名曰甕襲、甕襲家有犬、名曰足往、是犬昨山獸名牟士那而殺之、犬に名を付ることいと古し、貉も初めて是に見ゆ珍らしかりしなるべし、是後世の狗山といふことに用しか〔狗山の事〕〔枕の草子〕に翁まるといふ犬の事あり、犬ハよく路を走る物ゆゑ〔甲陽軍鑑〕に武州岩付太田源五郎幼少より犬ずきをする、松山の城に飼立たる犬を五十疋居城岩付に置き岩付にて飼立たるをば松山に置しに松山に一揆起りけるに文を竹筒にいれ犬の頭に結付け十疋放しければ片時に岩付へ持來しとぞ

けし／＼とて犬をかくるをけしかくるといふ古きこと、見えて〔筑波集〕西音「我心なたね計に成にけり人くひ犬をけしといはれて狗を犬ころといふ犬子等なりまた子等が犬を呼にころ／＼といふ子等來なり〔狂言記續集一〕むかひのゝゑのころいまだ目があかぬころくろく／＼といふ鳥聲「一休咄」にひるけの焼飯を取出し犬にみせてころ／＼と云ふ〔後撰夷曲集〕宗鑑が手向に「薄はとまだ目のあかであるのころの物にざれ句の手向草哉ト翠

犬の聲をべう／＼といふハ彼遠吠するをいふなるべし猿樂狂言にもみえたり又ト養が〔狂歌集〕にいぬまもちといふものを出しけるに「べう／＼と廣き庭にてくひつくり白黒またらいぬま餅かな〔望一千句〕古宮ハびやう／＼とあれ秋さびし狐を犬の追まはりぬる〔夷曲集〕に「犬櫻みてよむ歌ハ我ながらあかるべうともおもはる候土佐國人ハ今も犬の聲をべう／＼といふ又ハか犬といめかかうまたるやうの犬の面なればいふにや〔埋草〕寛文元年成安撰 堺云也〔獨吟千句〕半井ト養落「くれもせぬ花一枝を所望して、のぞいてみればへるか紅梅、垣の内に

日も永べえの犬ふせり〔因果物語〕にへか犬をつれて來れり又べいかともいへり是をおもへば吠狗の訛れるもあるべからず〔續山井〕珍花とてあいすへいかの犬ざくら〔重昌〕珍花〔赫狗〕を含めり〔中井〕竹山〔茅草〕危言〔に狗の子をへか〕

不角が付合の句に「無一もつ後生願ひの猫かふて逸物の馬にも犬にもいふ俗に犬猫などの一ツ生れたるをいふと心得るの非なり」

ちん

〔武野燭談〕に昔の鹿犬を飼るゝ事大名役の様にありしといへるの寛永中の事なるべし  
拂菻狗〔日本紀略〕に契丹大獨二口〔倭子二口〕と見えたり〔倭子〕是なり大獨の俗にいふ唐犬なるべしといへれと〔倭子〕一本に〔倭子〕ともありて定かならず〔近〕の頃わたりし〔續山井〕の發句のこれをいへり〔見ゆ〕安濶泊答、寒川儀太郎手簡〔さつまより〕出候犬の一種ちんと申候正字御尋にござ候すへてかやうのこと心に留不申一切覺不申候〔北齋書〕通鑑に有之候東魏孝靜帝高澄に逼られ朕の狗脚朕と申され候の近代の落しはなしに能合申候儀と日〔ご〕ろ戯言に申出候迄にござ候とありこれもとよりチンの名義に〔あら〕ずねかしきことなれば〔こ〕に録すさてチンの名義例の押あてながら犬に似て小きもの故ちいといし〔チン〕となりしにや近時チンも位を給はりしと云る物がたりあり〔耳袋〕に天明九年ある大名衆上京のことありしに常に寵愛のチンあどをたひて付隨ひしかばやむことを得ずして召つれしことさたありて天聽に入ぬれば畜類ながら主人の跡を慕ふ心あはれなりとて六位を賜はりしとかやこれを聞て何者か「喰ひ付犬とい兼て知ながらみな世の人のうやまわんく根な

白鼠

しことに有べけれと其節處々にて取はやしけるまゝあるすといへり

白鼠〔日本後紀〕大同四年三月辛酉山城國獻白鼠とあるの始て史に見えたるにや漢土にも昔の稀なるものとみゆされば〔筠廊偶筆〕にも白鼠〔精毛火眼〕其可愛、余數見之と珍らしげに載たり又〔剗菴瑣語〕崇禎年、市上有湖廣人、持白鼠數十來售、毛色如雪、眼赤如火、閃爍有光、識者曰、此碩鼠也、見則天下將亂、などいへるも見あらざる故なるべし〔居行子〕に白鼠といふもの、吾が幼年の頃までの世上に澤山に見る事ならずいかにも稀なる物にてその類を商ふすぢの者の手にもたましくならでなくもしもあれば價もいかにもむづかし今慰に畜ふ物とい人々かつてれもはず大黒天のつかはしめとのみ思ひ白狐〔稻荷〕のつかはしめといふ心もちにて町人の手代正直實貞にて金まうくるを何某所の白鼠なんぞいひてみれ福のあるやうに思ひしことなるに近頃より世上に白鼠澤山なること常の鼠に殊なることなしこれのみならず熊鼠と名付毛色眞黒にしてその上品の咽の下に月の輪白くあり又の白黒の斑なるありといへるの正徳頃のことを昔がたりするにや〔諸艶大鑑〕に水右衛門がまねして諸藝を仕入云々鼠の宮參前にそり橋かけてそれく〔に〕世を渡ると云し〔白〕斑〔ら〕か常の鼠に有へからず猫と一處に置こと杯〔いつ〕頃よりの事か白鼠を福有ものとす〔世〕説故事〔苑〕に、宋高僧傳二、善無畏傳云、長復至烏菴國、有白鼠馴遠、日獻金錢、〔太平廣記〕四十七、云、白鼠身如皎白、耳足紅色、眼眶亦赤者、乃金玉之精、伺其所出、掘之、當獲金玉、鼠五百歲即白、耳足不紅者乃常鼠也、〔抱朴子〕曰、鼠壽三百歲、滿百歲則色白、善憑人、而下名曰仲、能知一年

熊鼠

番頭の白鼠

中吉凶及千里外事、この事〔本草綱目〕又〔典籍便覽〕にもいへり然らば常鼠にはあらず本邦にいかゝるものある事をきかず番頭の白鼠と大黒の黒をもて北方の色とし北方子の位なれば鼠を使者とす番頭利にかしければ主人富む主人の大黒番頭の鼠のごとし白鼠といふの白色に瑞物多ければなり世にめづらかなるを貴むのならひなり

鼠の嫁入

又鼠のよめ入といふ事〔樂師通夜物語〕寛永廿年の繼いにしへの鼠のよめ入とて果報の物と世にいはれ云々白鼠野鼠小鼠廿日ぬすみこねらおねらおねの子産屋の内の赤鼠に至る迄皆是飢饉に及申云々こねらの子鼠ねらの子鼠か〔狂歌咄〕古き歌に「よめの子のこねらゝいかになりぬらんあなうつくしとねもほゆるかな〔物類稱呼〕に鼠關西にてよめ又嫁が君上野にて夜のもの又よめ又むすめなどいふ東國にもよめと呼所多し遠江國に年始にばかりよめとよぶ其角が發句に「明る夜もほのかに嬉しよめが君去來が云除夜より元朝かけて鼠のことを嫁が君といふにや本説のまらずとぞ今按に年の始に萬の事祝詞を述侍る物にしあれば寢起といへる詞を忌憚りていねつむいねあくるなど唱ふるたくひ數多あり鼠も寢のひいき侍れば嫁が君とよぶにてやあらんと云り此名あるより鼠の嫁入といふ諺の出きしなるべし又鼠を夜の物狐を夜ののといふ似たる名なりたもふに狐の嫁入の鼠の後なるべし鼠鳴の〔今物語〕ある殿上人かくれ居て局におるゝ女房をのぞきたる處此男何となくふしなからんもほいなくてねづなきをしていでたりけるさきなる女房もおそろしや螢にも聲のありけるよとてつやく、さはぎたるけしきなく〔望一千句〕唯ねづなきを身にまめにけん約

鼠鳴

鼠おとし

東のあまたの袖にわかれ人〔俳諧埋木〕ねづなきのいつれ格子にならひめて〔輕口咄〕に好色のわかいもの二三人日暮に門に立ゆきゝの女ばうにわろ口をいひねづみなきなどしける漢土にてもこれを淫姦不良の事にすどみゆ〔龍圖公案〕淑貞といふ女亡夫の追薦に道士華元といふ者夜中高閣のうへに藏れて其女を迷姦する處に、少俟人靜作鼠耗聲、淑貞秉燭視之、とあり鼠の鳴聲を〔笑林諷刺部〕に終夜咨々叫到天明といへり鼠ねとし〔犬子集四〕ぢぢくいよそか目前にある、かけおけば其儘に落る鼠と、何かならざる算用の上、ぢぢく落しより又鼠さんと付たり〔世話盡〕落てみよぢぢくの鬼のはかりこといり豆入ておく鼠と極樂おとしと云の後の名なるべし〔洞房語園〕乙酉が鼠亭記に鼠をかけてこれを取むかしの鼠わなど云ものあり竹の中より緒をとふしわなにまたるものなり〔夢溪筆談七〕有一術士、姓李、多巧思、嘗木刻一舞鐘、高二三尺、右手持鉄簡、以香餌置鐘、左手申鼠、鼠縁乎取食、則左手扼鼠、右手運簡、斃之、以獻荆王云々、人を鳥獸にたとふること〔龍耳草子〕に、咬人を鶴鶴といひ、小男を鶴鶴、人水を水、閑なる人を閑の牛、躁人をあつとりの火、獸人を牛盜といふとあり今いはぬ言も多し〔悔草〕にいたまる人をばねぢぢと云とあり童の戯に鼠こつこつとこつこつといふことすなり二人して手の甲をつみ下の手をはづしての上をつむ故果なきなり〔本草鼠附録〕に鼯鼯あり〔和名抄〕に玉簫を引て鼯鼯に作る和名豆良欄古と見えたり名義の連り行小鼠といふなるべし色黒き小鼠にて菜圃などに土を穿ちて居も

人と鳥獸に比す

鼠こつこつ

のなり七ツ八ツ計ツ、尾を含み連り行遠き所にも越ゆくとなむ肥前にて七郎鼠と呼ふ〔草木子〕に至正乙未年中、江淮間群鼠擁集如山、尾々相度衝江、過江東來、湖廣群鼠數十萬度、洞庭湖、望四川而去、夜行晝伏、路皆成蹊、不依人行正道、皆遵道側、其羸弱者走不及多道斃、とありその外諸書に鼠つらなりて河をわたりしことをあるし、のみな是なり、鼯鼠ラネズミの土の中を行こと鼯鼠のやうにて土を出て日光をみれば忽死すつらねこと、殊なり童戯、これを學びたるなり、鼯鼠つこの鼠につきていひ出たるにて意義なし〔耳袋〕に紀州黒打村と云處、加田と向合て島のやうなる處なり、此黒打より加田の海邊二日は、眞黒になりて渡るものあり、能々見れば黒打の鼠加田へわたりけるに、ぞ有ける其夜中津波にて黒打一村浪の爲に流されけるとぞ。

鼯源氏あつまや浮舟の母の詞、あやししく心おさなげなる人をまいらせおきてうしろやすくのたのみ聞えさせながらいたちの侍らんやうなる心ちのし侍れば〔細流〕にいたちの狐の性の類なり、狐の狐疑とて物をつよく疑ふ心あるものなり、その如くに鼯も疑ふ心あるものなり、鼯のまかげなどいふも疑心ある故也、又〔手習卷〕に尼君はふきねは、れてたきにたり云々、ほかげにかしらつきいといとるるきに黒きものをかつぎてこの君の手習ふし給へるをあやしかりていたちとかいふなるものがさるわさするひたひにてをわて、あやしこれ誰ぞと云々〔細流〕に鼯のまかげをさしたるなりといへりまかげの〔盛衰記〕に高き峰に上りまかげをさして見わたせばなといへり遠きをみるに、額に手をかざしてみる是なり〔細流〕に疑心

鼯のまかげ

鼯みめよ

とするも物を見定むる、即その心となる鼯もさる風情あり〔會我物語二〕泰山府君の條、今の世までもいたちなきさわけづつ、しみて水をそぎまじなふこのぎに依てなり又みめよしといふ、〔醒睡笑〕秀句の處、世話に鼯眉目よし、一度貌見う〔吾吟我集〕情まらぬ人をたくへばみそいたちのみめよしといふばかりなり〔鷹筑波集〕顔を洗へば猶もみめよきといふと呼れて出る水いたち〔犬子集〕籬よりみめよき貌をさし出していたちばかりや住る古宮など多くみえたり、今童部是をみる時の鼯みめよし、猫の貌杓子といへりあしきをよしといふ、反語なり見たくなき悪き物ゆゑに然いふなるべし、猫貌杓子の後に添たることなり、諺に猫も杓子といふことをとりてのこと、聞ゆれど杓子の彼が面をいふに非ず、足をいふなり、折敷の足に猫足といふにても杓子に似たるを心得べし、古き前句付に「賑やかになる、猫の飯入添て行花盛詠、用たりいたち火にたゝると云ことも、〔望一千句〕に「いたちばかりぞ月にちろめく、さよふけの心かけよの火の巡り」

鼯火にたゝる

狐の窓

わらべの戯に左右の手をうしろ前にして指を組合せ中に空あくやうにする是を狐の窓といひて其穴より覗き見る事す也〔浮世物語〕に篠田の狐の事をいひて、夫のツツドこのとしごろ相なれてそれとありながらさすがに名残をしく思はれつ、かくぞよみける「子をおもふやみの夜こととへかしなひる、篠田の杜にすむともと詠じてうちなきけるを妻の狐のたち聞て限りなくかなしと思ひつ、空を隔てかくそいひける「契りせし情の色のわすられて我の志のだの杜になくなり云々浮世坊心づきてこれいかさまにきつねのばかしてかやうにつ

狐の挑灯

れてありくかどれもひ日ごろ聞たることありと顔をふところさし入て袖ぐちよりのぞき  
てみればせなかのはげたるふる狐うしろ足にて立て先へ行と有り物の下よりのぞけば狐の  
化たるいあらはれて見ゆると古く云しと見えたり是又まかけさすなり「奇異雜談」鹽やにて  
鹽やく男狐をみたる物がたりに天文年間 窺の下火燄の中よりみれば狐ひとつ雁をもちて膝のう  
へにおきて撫さするなり不思議やおもひて起て窺のうへより見れば女が子をひざに置な  
り又かまの下よりみれば狐さきのごとしといへり狐の窓の戯は是其空より狐を覗くなり狐  
火を狐の挑灯ともいふ「洛陽集」朱雀野や狐の挑灯鹿の妻琴風

【狂歌咄】にいとけなき子の匂まはりてあしきことするをおどしておそくといふ詞のをそ  
と「獺の事なり此獸はじめたはるゝやうにて後に喰つくものなりこれに依ておもふに鼬も似  
しと見しにそのこまし又蝦蟇の居たるをそのうへを幾度も躍りこゆるに  
かへるゝ怒りて背高くして居しかいかいふつらんその果まで見たりき

彌二郎

【嘉多言】に獺をかばうと云ひ苦しがるまじき歎をそのたはれ尾とよめり此けた物尾をふ  
りて人をばかすといへり世俗に偽をうるといふ言葉も是より起れりと云り今うそつき彌二  
郎藪の中で尻をひつたと童のいふとも是よりなるべし「嘉多言」にをそのたはれ尾とよめり  
と「萬葉をいへるなんめれとそれの於曾の風流士とよみておそい癡鈍の義にてオヲとかな  
もたかひたりたはれをの風流士にて獺の尾にあらすされども今の諺の件の間違ひたる説  
を取べしとやばで見た彌二郎といふ事もあり彌二郎に義なし權兵衛八兵衛も同じをとい  
ふこといふそといふとなりといへるいよし「玉勝間」に萬葉四の巻に逢みてい月もへなく

藪の中で

うそ八百  
萬八  
千三  
禽獸の勢  
な去ると

にこふといひをそると我をおもほさむかも又「十四の巻」に「からすとふおほをそ鳥のま  
さてにも來まさぬきみをころくとをなく此歌の心のことくまさしく來もま給はぬ君な  
る物を鴈といふ大虚言鳥の此來此來と鳴ことよといへるなりころくのろの例のやすめ辭に  
てこは此にて此所へ來といふことなり子等來にあらす云々清輔朝臣の「奥義抄」に或人云  
ひむかしの國の者いそらことををそといふなり上伴萬葉卷之四なるい本人の歌にあら  
さればいにしへのをそといふこと京人もいひしなりかくてをそいすなはち今の世にうそと  
いふことこれなりをそとうといふ殊にあたしくいふ音なりといへり是もふのころの例をみてい  
い子等來のかた成へし  
藪の中で尻を放たといふい獺と鼬の混ひたるにやともれもへとさにいあらじ人のみぬ所な  
れば偽るよとの意と聞ゆ「安布良加須」尻の穴より烟たつなりくひあひて術なさうなるみぞ  
いたち、今うそ八百また萬八などいふを俗に千三といへり「櫻陰比事」に今の千いふこと三  
ツも眞のなし連千三といふ男あり云々是なり  
こへにいせぬことなるへけれと牛馬など其勢をとり去れば壯健なりとぞこれを名つくる獸  
によりて各異なり「尊郷贅筆」に人之淨身者曰奄宦「肘後經」曰、牛曰宦、猪曰奄、馬曰騙、羊  
曰羯、鶏曰讎、狗曰善猫曰淨とあり六の内雞などいかにするにか思ふに雄と雌と別ち置  
なるへし

鳥がうのまね 蝙蝠山椒くりよ 雁々 蝸牛角たせ 蠅の棒つかひ 蠅とり蛛  
虫繪 蜂拂 蛙の吊 蛙合戦 かへる目を借る 蛙を釣

鳥が鵜の  
まね

からすかん左衛門うぬが内いやる早くいつて水かけるといふ童こそ鵜のまねする鳥の水をのむといへる諺よりいへるものならん鵜のまねするなら早く行て水あびるなど云けむを内い焼ると誤りたる再按にからすの行水と云こより出たるなり鵜とべの火ばやしといへるを混ひしなるへし宗因獨吟鵜の飛はと油断せず京火ばやしとよその夕暮御用心また鵜のまね佐夜中山集に「水心もや波の河筋、鵜のまねを洲崎の鳥羽つくるひ

蝙蝠山椒  
くれよ

蝙蝠の飛を見てかうもりく山椒くりよ柳の下で水のましよと呼ことい彼よくむせる物とするによれりれもふに鳴聲のちうくといへるか便ぶさまに見ゆるをいふなり可笑記にぶをこのさたの限りかうもりのつにむせたるやうになきつらなる侍あり云々按するに唾にむせるとい後に訛りたるなり犬筑波集に活字「おぼろ月夜にわたるかうもり、照もせずくもりもやらすすにむせて古くのみな醋といへり咽いせむとて山椒くりよ水飲しよといふなるへし又醋を飲ましよともいへり同意なり守武千句に「山椒ようことむせわたらばや、かうふりのすものかたりのつれくにかうもりに醋山椒をいへること古し百物語」に山椒にむせていあかやねにかぶりつきてなをるなどみえたり和漢三才圖會云、蝙蝠性好山椒、包椒於紙拋之、則伏翼墮落、竟捕之、といへるの非なるへし紙につくむに山椒にかかざらす何にてもおなじ事なり醋も山椒も彼が好悪によるにあらず日光山御宮の邊に鵜二羽あり二王門前茶店をはなれず此茶店にて團子を賣るこれをもとめて一ツ宛串を抜て高く空中になければ彼鵜出來て宙にて團子はむ一ツも落すことなし按

鵜空中に  
はむ  
て投食な

るに鶴廊偶筆「楚江富池鎮、有吳王廟祠、甘將軍寧也云々、有鵜數百、飛集廟旁林木、往來迎舟數里、舞噪帆檣上下、舟人恒投肉空中、餒之、百不一墮、其送舟亦然、」と云り滇行紀程にも此事出つ不拘餅餌粒食撤空餒之、群鵜飛舞接食、百無一墜、云々あり上州藤岡邊にて童のいふの鳥々かんがらす足を洗てどこへ行麴山へまかるかうじを買てなに、する酒に造りまうす酒に造てなに、する西殿の犬と東殿の犬と甘いどつていひんなめる酢どつていひんなめるみんなひんなめまうすといへり江戸にて次郎とんの犬と太郎とんの犬とみんな、めてままつたといふの鳥のことにいふにあらねともおなじ童謠の移たるなり

雁のつら

棹になれ釣カキになれとて雁の連りて飛を興する小養狂歌「春の頃鷹の雁を多くさはにかけてとをるをみて歌よめとあれば」かんかりやうつかりかねとはしたかにとられて後も棹になれく犬子集「舟にのれ棹になりつ、かへる雁重次狂歌咄」棹になりて夜すがらわたるくらかりの空に云々松の落葉「近江八景ひらく」とむれある雲にさはになりてとをるわとながさきへさきながあとならかうがいとらしよ或人云筑後柳川にていがんく、まつちやうかんあつちやうあどのがんなさきになれさきのがんなあとなれ弓のなれた矢のなれたはやういたてみつかける早く行て水かける是弓矢の雁行に准へたるなりかうがいもそれなるへし仲實の歌に「とらいろによそへることのはしらをばつらなる鴈とれもひけるかな江戸の童いがんくみつくちといふみつ口とい琴柱の形になるをいひかうがい銀をもいふ是

蝸牛角出

も琴柱の形なる物故取出ていへるにや

蝸牛〔夫木集〕に土御門院「家を出ぬ心のおなじかたつふり立まふたくもあらぬ世なれど是が舞といふことも古くいへりとみゆ貞徳が〔與止賀波〕に「牛の子にふまるな庭のかたつふり角ありとても身をなたのみと天神の御歌となむといへり其角が、文七にふまるな庭のかたつふりの是によれり今小兒が角だせ棒たせといひて蝸牛をもてあそぶこともむかしより有とみえて宗鑑が〔犬筑波集〕に「まへや」と江口にぞいふ、世中を厭ふ迄こそかたつふり〔尤草子〕かきはにまふりかたつふり〔日次記事〕云、蝸牛見人則蝸縮、兒童相聚、謂出々出々、不出則打破釜云爾、此虫貝俗稱釜とあり今また江戸の小兒角だせ棒たせまひくつふりうらに喧嘩があるといへる、いまうら滑稽なり

まひくつふり

蝸の棒つ

棕櫚の蠅

蠅取り蛛

談門に、小官賣屁股といふ語に、青蠅引麻蠅、到酒席上、麻蠅恣意飲食、被小厮拿住、將竹簽々了、屁股把燈草、與他使棍、半日纔得脫身云々全くこの戯とおなじ又〔酉陽雜俎〕に指に蠅を起しめ其後脚を拈ふるに脱すことなき者をいへり物にとまりたる蠅の後脚を爪にて押ふることに、こゝにもする事なり棕櫚の葉を蠅うちに作るも古き事とみゆ〔童蒙先習〕慶長十七年刻本なり直なる物棕櫚云々葉の蠅うちに〔洛陽集〕藏主の蠅うたれて棕櫚に音をそなく有知又〔一代男四〕東國浪人のことをいふ處に、今江戸にはやるとて蠅とり蛛を仕入とありこれの先年にはやりし事ありきは取蛛の〔本艸〕に蠅虎と云り大小數品ありて其居る處に従て色もさまざまなり草に住もの緑色なりいづれも跳りて蠅を取食ふこれを戯に飼置て印籠などの小

虫繪

き器物に入れ持行てはいを捕らするとなり又虫繪とてさまざまの虫を畫たる手遊の一枚繪あり小兒これをきりぬき蠅の背に糊にて貼付てあゆまする戯ありいづよりありともいまだ見及はず

蜂拂

ウソフキ

蜂が刺たら子をどらうといふのも蜂ふき也〔源氏松風〕大井も宿もりが體をいふ處、はなと打わかめつ、はちふきいへば〔若菜の下〕にもはちふくと有り〔抄〕に蜂の面近く飛時恐れてうそふきするやうに物いふ也物を聞いれず一向にいひそくるを蜂拂といふに似たり〔守武獨吟〕辨慶や蜂のありともあらざらんうそをもふかすけなけるころ〔雄長老狂歌〕狩人のうそ吹山や鹿の角をさして飛行はち月の空〔油加須〕みつのさかひの道のせはしき蜂原の皆人ことらうそ吹て〔世話焼草〕いくらのうそも其身なくさみ、こはや蜂花見の庭に飛落て〔神代記〕に嘯字をウソフキと訓もウソを吹なりウソといふ虚き意にて簞などの器を用ひずして吹けはなりはとふくといふも同じとなるにや今いふ口笛なり〔狂言記拾遺〕の内に、あぶ柿をくひたる者うそをふくことならずとあり唐詩に獨座幽篁裡、彈琴復長嘯なといへるの希有のこととも思はれぬを鄭明選か〔稗言〕に嘯法不傳久矣、頃得嘯旨、嘯有十二法云々、善嘯者、可以感百靈、致風雨、按後漢書趙炳、嘗臨水求渡船、人不知之、炳乃張蓋座、其中長嘯呼風、亂流而濟、此其驗也、今江東舟人、每喉中作聲、俗謂之呼風、亦嘯之遺意、とあるに據れり是幻術に似たり爰にも蝦夷人のかゝるわざなすこれをこさふくといへり爲家卿の歌に「こさふかはくもろもそするみちのくのえそになみせを秋の夜の月ねはかた似たることなりされ



蛙の吊

と趙炳かこといへ非ず虎嘯谷風至るといへり巢居知雨穴居知風の故なりもし人の所爲ならんにいあやしむべし嘯旨の〔續百川學海集〕に収めたり、序に孫澄より阮籍に傳はりて後嘯法溼ひたりとあり其書作者を著さず唐人なるへし都穆と云もの、跋あり

蝦蟇を投て擲り殺し地に少坎をほり車前草を纏て死たるかへるをその上におきまた車前草を覆ひ小兒その周りに居てかへるとのお死にやつたおんばく殿の御とむらひと聲々にいひて祝ふに須臾ありてかへる 蘇ヨカる此こと古き事と見ゆ〔毛詩〕葦苳の郭璞か疏曰、今車前草大葉長穗、江東呼蝦蟇衣陸機〔草木疏〕にも車前草一名蝦蟇衣とあり〔本草啓蒙〕に車前カヘル南部、仙臺また漢名を擧たる内蝦蟇葉〔昔浦縣志〕か、れの陸奥にてカヘルハといふの彼兒戯より名つけて漢土の名に符合せしなり〔蜻蛉日記中〕山こもりの後のあまかへるといふ名をつけられたりけれいかくものしけりこなたさまならてい方もなけかしくておほはこの神のたすけやなかりけんちぎりし事をれもひかへるいおほはばこの神といかへるに奇功のあるをいふなり時珍にかゝる事をあらざるにや蝦蟇喜藏伏于下、故江東稱爲蝦蟇衣とのみいへり按るにかへるい戦ふとあり〔續日本紀〕神護景雲二年七月庚寅、大宰府言、肥後國八代郡正倉院北畔、蝦蟇陣列、廣可七丈、南向而去、及于日暮不知去處〔著聞集〕に寛喜三年夏の頃高陽院殿の南の大路に堀あり蝦蟇千集りて方ぎりてくひあひけりひとつかひくひあひて或はくひころし或はかたいきしてはらじろになりて有けり又もく多くあつまる事かぎりなしあるもの心みにくちなはを一つもとめて其中へなげ入たりけるにすこしもおそるいことなしくちなはも又のまんども

蛙の合戦

せずにげさりにけり京中の者市をなして見物まけりふるくも蝦の戦ありけるとかや〔紅梅千句〕のとやかにけふの軍をやめよかし政信何にかへるのなきちからわざ長頭〔寛永發句帳〕軍場へ面出してせてやひきかへる親重〔犬子集〕花いくさ今をさかりと見えけらし蛙はえぬる山吹のかけ、軍にや男うたせてあまかへる、あまたありて擧るにたえず蛙戦て死ぬるも多けれの兒童これを吊ひたるより後に打殺して吊らひし蛙の合戦常にあらぬなり〔結尾録〕にも記したりあまかへるとい蛙の雨を呼といへはなり〔百物語雙紙〕今に子供までがあまがへるとのいつ死に給ひたなどいひてとむらひける〔一代男雙子〕秋のなかはから竿の音のみ里のわらんべねぢかごあまがへるの家などとして

蛙が目を借る

又〔醒睡咲四〕唯有の條、大名の前にて座頭のひたものねふるを見給ひ何の仔細にそれほと眠るぞとあれば、昔より春の蛙が目をかりると申傳へて候それはよき目の事に申候むや我らのやうなるあしき目をかり候いよくく蛙のより合に目のはやる仔細御座候やと申けると有り按るに此諺の春苗代の頭より蛙出ればなり蛙の目摩ツマものなれい蛙を食ふ處ありてめすり論云〔廣東新語〕人の眠りたき風情に見ていひし俗諺と聞ゆ彼かさまをいひし宗鑑が「手をついて歌申上る蛙かなまた其角が〔附木屋の手なり足なり雨がへるといへるいよくくをかし又ゑのころ草をもてかへるを釣とあり〔和漢三才圖會〕狗尾草原野多有之、小兒用之釣蛙戯者、

蛙の釣

〔枕雙紙〕兵衛藏人を御供にて殿上に人さふらはざりけるはどたゝずませをはしますにすび

つの烟の立けれのかれの何の烟ぞみてこと仰られければみて歸りまゐりて「わたつみのねきにこがるゝ物みれのあまのつりしてかへるなりけりとそうしけるこそをかしかれかへるのとび入てこがるゝなりけりおもふに火のもゆるすびつの邊りにかへるのほらんことあるべきやうなしひそかに焼てくひなどせしことあるか知へからず

〔括異志〕陳宏泰家富於財、有人假貸錢一萬、宏泰徵之甚急、其人曰、請無慮、吾先養蝦蟇萬餘頭、鬻之足以奉償、泰聞之、惻然已、其償別與錢十千、令悉放之江中、

〔天祿識餘二〕韓退之答柳柳州食蝦蟇詩あり又按るに〔周禮〕蠃氏所掌蛙黿之屬〔漢書〕霍光擅滅宗廟蓋兎蛙古蓋以爲上食といへり

蛙と食

ひじや

かじか〔北窓瑣談〕かじかと云もの近きころ人の希々養ひ樂むものなり聲さやかにて駒鳥に似たり廣きざしきなどに伺おきてよきものなり北山矢せ小原邊の谷川の流清き處に住云々〔本艸〕中に錦襖子と見えたる是なりとぞ形ハ雨蛙より少し大に瘡て疥癩あり色黒し雨蛙に似て物に飛付て止る先年人のもとにてよくみて寫生を志たりしに其時籠より一ツ飛出て天井にとまれるやうあまがへるの如し指先まろくひらたし〔本艸啓蒙〕にその聲小にして清く抑揚多し七返反すものを上とす好事者生蟲を以て畜ふ別にその器ありといへり

螢狩 螢合戦 蟬を捉西 杏々法師 蜻蛉を捕 蜘蛛の灸 蜘蛛の腹切 あまのぢやくを釣

螢狩

螢がり〔異本四季物語〕石山寺の御卷數納めらるゝ事の廿日あまりになん有へしつとめてハ

治部のかみ圖書ころくわんの人をめしてそのかへりまうしに石山にまうてぬかへさハに螢いくそばくらすきぬのうつにつゝみ入て宮のうち奉ればこゝらの御すあるハ御つばのそこらにあまたはなされて晴る夜の星どものせしめいひまらす思ひたどりぬされど此虫も夜こそあれ晝の色ことやうに夜のひかりにけおされておとれる虫なりまいて手にふれ身にそへてハあしき香うつりきぬ手にハ蘭を握り身にハ百和の香をぬるわかうと君の前にてハ心あるべき虫のかならし薄きぬの器ハ紗など貼たる籠なるべし〔秋長夜物語〕ハの童さきに立てきよなふのちやうちんに螢を入れてもしたり其光かすかなるに云々魚腦ハ魚の骨なりこれを煮て琥珀の如くなるを燈籠に作るにたり〔荻原隨筆〕に青竹の筒に螢を入れて蓋をして見るに外に光あらハると云ふ

宇治の螢合戦

螢合戦ハ〔狂歌咄〕に卯月の末つかた宇治こゝの螢の集りえならぬ興を催せり餘所の螢よりハ一きの大にして光りことさらにみゆ世にいふ頼政入道が亡魂にて今も軍する有さまとて夜に入ぬれば數十萬のはたる川面にむらがり或ハ鞠の大さ或ハそれよりも猶大に丸かりて空にまひわがりとばかり有て水のうへにはたと落てはらくとどけてながれ行こと幾むらども限りなし〔正章千句〕に「纏網をもちかよふ夏川、螢こよといふ聲波に響きわたり〔續山井〕に「火廻しかせたから宇治に行はたる衆下〔和漢三才圖會〕に本文漢字なれど今ハなにつす石山の溪に螢多して常のよりの大なり此所を螢谷と呼北ハ勢多の橋南ハ供江ヶ瀬に至る其あはひを群がり飛こと高さ十丈ばかり火燄のことし又數百集りて塊るとあり大かた芒種の後五日より夏至

石山螢谷



あまのし  
やく

水馬を釣

又あまのしやくといふ虫あり春夏の頃地上に小き穴あり燈心に油を蘸して空に入る、事二三寸にして燈心の動くを見て引いだせば小く細長き虫の身白く首黒き吳公ムカデの形したるが燈心にくひ付出つ身を屈曲カクマれば背に高き所あり故に漢名鉤駱駄といへり  
小兒水馬を釣ることハ五雜俎にも見えたり水馬惟嗜蠅、以髮繫蠅餌之、則擒抱不脱、釣至案几而不知也、

虫撰 虫吹 促織 鈴虫 松虫 虫籠藤花虫屋 麥虫籠 虫を種法ツケル 蝨を飛すハツク 虫の油を髪にぬる戯 蟻虫 蟻の熊野參 あり合戦 蟻の塔 ありれ蚊 蚯蚓 小兒 陰廬 虫目鏡

虫撰

〔源氏野分〕わらへおろさせ給ひて虫のことも露かひせ給ふなりけり云々四五人ばかりつれてこゝかしこの草むらによりていろ／＼のこともをもてさまよひ虫を飼ふさまなり虫をえらみて奉つること堀河の御時などに起れるか〔著聞集〕嘉保二年八月十二日殿上のことをも嵯峨野に向て虫を取て奉るべきよしみことのりありてむらこの糸にてかけたる虫の籠を下されたりければ貫首已下みな左右馬寮の御馬に乗てむかひける藏人辨時範馬のうへにて題を奉りけり野徑尋虫とぞ侍ける野中に至りて僮僕をちらして虫をばとらせけり十餘町ばかりの馬より歩行せられけりゆふへにをよんで虫をとりにて籠に入れて内裏へかへり参り菰女郎花などを籠にかさりたりけり中宮の御方へまいらせて後殿上にて

虫吹

促織

蟋蟀  
蟬列

孟酌朗詠など有けり歌の宮の御方にて講せられける籠中よりも出されたりけるやさしかりける事なり又〔年中行事歌合〕注に撰虫といふのあながち式ある事になけれ共殿上人の逍遙として嵯峨野などへ向ひて虫籠にむしを撰み入て奉りけるなりとみゆ年中行事歌合のいふにさるもきてそ〔貞徳文集〕晚景虫吹可罷出候黒月闇無用心候へ共盆前の暮参仕る者繁候而路次賑取候行燈挑灯聚置候へ者促織松虫蝨幾等も寄聚候按るに虫吹といふ今も虫を取に竹筒のかた方に紗のきれを胃いこれをもて虫を覆へい虫の上のかたに飛のはるを籠また袋などに筒さきをむけて胃たる紗のうへより息して虫を吹こむ也〔開元天寶遺事〕云、每至秋時宮中妃妾輩皆捉蟋蟀閉養小金籠中置枕函畔聞其聲庶民家皆效之蟋蟀の促織にてつゝれさせと鳴むしにて晝夜ともになく物なり今京師にていとゞといひ諸州俗名甚多し一種形の大なるを京師にてこほろきといふ是の晝のみ鳴もの也〔促織志〕に油胡盧といへる是なり以上本草家の説なり今按に〔和名抄〕に促織和名波太於里米兼名苑云、絡緯一名促織、鳴聲如急織機、故以名之、とわれはいとゞにかなはず是今世にいふさゞ／＼すにや蟋蟀和名木里木里須兼名苑云蟋蟀一名曇と有いといゞなるべし蜻蛉和名古保呂木〔文字集略〕云蜻蛉とあるハ蟋蟀の形大なるおにこほろぎにて所謂油胡盧なるべしこハ〔和名抄〕に載る處に據て云のみされどいづくも名物の稱呼古今にてたがひぬればいづれを是とも定めがたし猶よく考べし〔萬葉〕ハハゆふつくよこゝるもまねに白露のおくこの庭に蟋蟀鳴毛きりくす漢土にて後世促織といふものと訓ハ集中あらへきこのひがたさが多し故に眞淵ハこれをこほろぎと訓り

鈴虫

松虫

勝負を争ふなり〔五雜俎〕に張廷方といふものが爲に家産を破たる物がたりあり明の崇禎の頃に此事すられたり〔帝京景物略〕に凡都人闘促織之俗不直閭巷小兒也貴遊至城厥事豪右以鎖其賞士荒其業今亦漸衰止惟嬌姘兒女闘嬉未休と云り〔陶説〕に宣德窯蟋蟀云村集有歌云々當時重促織之戲勝負至千百不惜〔懷子〕貞徳が句「鳴むし籠れのか住野やちがひ柵重直勝益故精巧如此匪獨陶器といへり思ふべし」

〔源氏鈴虫〕すゞむしのふり出たる程はなやかにをかし秋の虫の聲いづれとなき中に松虫のなむすぐれたるとて中宮のはるけき野べを分ていとわざとたづねとりつはなたせ給へるまゝくなきつたふるこそすくなかなれ云々鈴虫の心やすくいまめいたるこそらうたけれ

〔年山紀聞〕に賀茂の神官云々松むし鈴むしおのく聲によりて名づけたり色をもていひ黒きの松むしあめ色なるの鈴むし賀茂の神官撰して禁裡院中に奉るこふるよりまなり 關東にてのとりちがへておぼえたりといへりされど〔大和本草〕に松むし鈴むし江戸にておぼえたる如く記し、いかに宗鑑が〔犬筑波集〕はなの下にも松むしの聲口ひげをちんちりんとひねりたて〔猿樂の野宮〕に松むしの聲りんく唯りんく計りの松虫鈴虫いづれも云べし今も歌唄ふ聲よきなりんくといへり 又〔放下僧〕に誰をまつむしちんちりりん〔堀河百首題〕雄長老狂歌「なかくとまやつきとしたる罷をなとちんちりんとひねる松むし」〔懷子九〕虫の音や名にねふ松のちりちんちん致也〔同上〕春よ秋よといつの間にやら子日せし野べの松むしちんちりり空存〔續山井〕松虫のちんちりうせぬ聲もかな一六軒につる松虫籠やちんちり不尤此外鈴虫の發句もあまた見えたれも一ツもちんちりなといふいなし是にてちんちりんと鳴の松むしなる事證すべしかく後までも誤らざりしを京師

ちんちり

虫籠藤花

虫屋

麥稽籠

に〔年山紀聞〕のころよりふと誤りしこと、見ゆ〔和漢三才圖會〕松虫、褐色而長髭云々、鳴聲如言知呂林知呂林、鈴虫、眞黒鳴、聲如振鈴言里々林里々林、また〔世語燒草〕に鈴虫松虫の外にチンチロリ虫を出せるの稱呼の疑しき故なるか尤杜撰といふべし黒色なるの漢名金鐘兒是鈴むしなりあめ色なるの金琵琶といへるものは松むしなり〔幽遠隨筆〕に知呂林と鳴を松虫といはんこと據なきに似たりこれいつの頃よりか流俗虫の名を取ちがへ松虫を鈴虫といひならししたるを考へたゞさずしていへるなるべし松虫の音の松風の凜々と響あへるにたとへたればちんちりると鳴の鈴虫なり法師の鈴といふものをふる音によく似たればなり和歌にも松虫の音を松風にたくへてよめる多し爲顯百首「琴の音にかよふの峰の秋風をなほ松虫の聲やそふらん慈鎮和尚住吉の社百首に」住吉のいかきのもとの虫の音にねのが聲にも松風をふく云々いへれど和歌にの鳴聲などわかちよむものもなければいかほを引ても證とふがたし

〔雅筵醉狂集〕糸はきや虫籠にかけし藤の花注に鳴の社人の細工に虫籠を組て其上に白と紫の糸にて藤の花之籠、其式緘細列竹爲之、を結くるなり〔雍州府志〕に下賀茂社司婦人、造養松虫鈴虫以紫白糸作藤花云々、むし籠を虫屋ともいふにや〔續千載集〕從三位氏久虫屋を作り資季卿に贈りし歌「見てのみやちとせもあかず聞ふらむわか神山の松むしの聲また麥わらの籠の〔花鏡〕紡績娘條に、以小稽籠盛之、挂於簷下云々、以瓜瓠飼之などみゆ稽のむぎわらなり釋求光といふ者蟬をきく詞に、松むし鈴虫果の麥わら家に臂を屈め風鈴のかたはらに長夜をまもる

虫を商ふ者

虫を種る法

松虫の卵を取る

漢土にも松虫鈴虫などの琉璃瓶などに入る、と也。あかるをこゝにてそのかみの樽籠などを下さまに用ひたり質素なることなり。

むかし虫を商ふ者なごのなかりしなり〔貞享四年日記〕六月十三日きりくす商賣いたし候者相尋候町々覺、四谷麴町本郷湯島神田すだ町二丁分相尋候處一人も見え不申とありそのころさるものハあらんとおぼしき處を尋ねしなり。

秋の末に小瓶に土を入れて其内に鈴虫の雌を移し緘子はりの蓋をねはひ日なたに出し餌を飼日を経れば衰へ死するを其儘にして蓋をおほひ稻草にて包み雨露のあたらぬ土の上に置縁の下翌年五月初ころ包みをとき蓋上より日にあて置ばやかて土中の卵かへりて微細の虫數多生出て日を重ねて大になる時瓶の内狭き故他の器に分ち置べし虫小きうち瓶のふた紗の類を用ひてよしそだつに隨て籠に移すべし紗などを破るなり餌の茄子を用また細き葉の草に水を洒ぎて入置べし茄子なくなる頃にも虫も死するなりかくすれば年々絶ることなく多く出来るものなり松むしの此まかたにていかへらず〔帝京景物略〕に促織秋盡則盡、今都人能種之、留其鳴深冬、其法土于盆養之、蟲生子土中、入冬以其土置煖炕、日水灑綿覆之、伏五六日、土蠕々動、又伏七八日、子出白如蛆、然置子蔬菜仍灑覆之、足翅成漸以黑、匝月則鳴、々細于秋、入春反僵也、これも大かたの似たる法ながら水を灑ぎ煖むる故ことなるべし松虫の卵を取るとい寛政七年の比江戸にて何人か考て始むと云按るに〔備前老人物語〕に松永彈正忠松虫を飼けるにさまくゝに養ひければ三年まで生けり況や人間日用の養

蟲を飛す

虫の油を髪にぬる

蠶虫

により長命ならんこと疑へからずといわれしとなりとあり養生のさるとながら松虫の三年生たりというけられぬとなりこれ極て其卵をかへして養ひ年々其法の如くせしなるべし

兒戯に土蝨ツチシまた蟹シラカを糸につなぎて飛せて遊ぶ〔促織志〕に蝸蚘之種三俱不鳴、青翼而黃身、躍近而飛遠、飛則見其翼羽、或紅焉或黃焉云々、嬉者股緊而提之、使飛不止、以視其翼羽、といへり〔金瓶梅〕吳月娘、孟玉樓、潘金蓮、并西門大姐四個、在前廳天井内、月下跳馬索兒、とあり馬索の蝸蚘なるべし跳らせて翼羽を見るなり

〔埃囊抄〕に朝生暮死る 蝸ヒヤムシと云の童部の打殺してかしらにぬる虫なり童部のふようひとといふ萩の枝などに付く油虫といふ青き虫長く成て羽の生たるをふようひと名づけて頭にぬるあぶら虫なれば髪カミのきら有故か實の蝸をこれにあらざ〔淮南子〕曰、朝蝸不知晦朔、といへり許慎曰、朝生暮死蟲也、生水似蠶蛾、と云へり此の事今世に膏澤を用ひぬものなければ旧舎の兒女もかゝる嬉れをするものあらし朝蝸の蟬蛸なり〔和名抄〕にひをむしとあり形とんぼに似て小さく細き尾の二條ある雄三條ある雌なり水邊に多し人家の庭木などに居るの形小さしあぶら虫の豫州にてきら、阿州にてきららなごいふきら有故なり後羽化して飛その内一種白絮あるものをまろこといふ伊勢山田にてれたつこまよると云へり

〔清少納言〕虫の條に、れにのうみければおやに似てこれも恐しき心ちぞあらんとておやのあしき、ぬひき、せて今秋風ふかんおりにそこんするまでよといひてにげていにけるもまらず風の音き、まりて八月はかりになればちよくとはかなげになくいみじくあはれ

鬼子の諺

なりこれ古への童が諺なるべし、糞虫のきぬ穢けきあらくしきもの故おにのすて子など云しこと、見ゆこれによりてれやに似ぬ子のれに子と云ふ諺も古きを知らる〔續虛栗〕親の鬼子の口おしき糞虫よと云其角が付句あり

蟻の熊野参り

蟻の熊野参り〔長嘯子〕虫の歌合「なさけなき君が心みつの山くまのまいりをして祈らましそのかみ熊野に人多く参りしかかゝることわざあり古きこと、見えて〔家長日記〕元久三年京極殿うせ給ひ攝政殿夢のやうにて上下北面の人々馬車にてはせちかふさまありといふむしもの参りとかやするにこそやう似て侍りしが是に唯もの参りとあれど熊野参るべし〔似せ物語〕にもとより酒のことの飲ざりければすまひけれとあてのませければかくなん「酒かめのはたにならへる人おぼみありのくまのへまいるなりかも〔犬子集〕月にからすのねくる古みやありわうが熊野参りの冷しやなどみゆ蟻のむれをなして他のむれに入らず僅ばかり隔てし處の蟻もむれとなるをい必くひ殺すものなり戯に砂糖などの甘みある物を紙などの上に載せ蟻のとる處に置ば須臾の間に多く集るそれを取て他所の蟻のむれたる中に入るればくひあふに主客のきはひとなれば他より入る蟻の敗走すかくして闘のあめされどももとより集りて戦ふものなり〔五雜俎〕云、蟻有黄色者小而健、與黒者闘、黒必敗、僵屍蔽野、死者輒昇歸穴中、喪亂之世、戰骨如麻、人不及蟻多矣此二句、合戦のさまに似たり、群碎録に媽々北地、馬群每一牡、將十餘牝而行、牝皆隨、牡不入他群、故今稱、婦曰媽々、蟻亦不入他羣、故爲馬蟻、一名玄駒といふ説もあり〔廣東新語〕に潮州大馬蟻山、有蟻祖廟、歲五月群

蟻の合戦

蟻來朝

蟻また蟻の塔をくむ事〔五雜俎〕人有掘地得蟻城者、街市屋宇、樓堞門巷、井然有條、〔唐五行志〕開成元年、京城有蟻聚、長五六十步、濶五尺至一丈、厚五寸至一尺、可謂異矣、蜂亦有之、おもふに蟻の塔そのまゝにして置かば次年も又蟻集るものならむ〔帝京景物略〕南海子の條、海子西北隅、歲清明、蟻日億萬集、壘而成丘、中一丘高大、旁三四丘、高各數尺、竟日而散去、今土人每清明節、往郡觀之、曰媽蟻墳傳是遼將伐金、金軍沒此骨不歸矣、魂無主者、故化爲蟻、沙懸于節序、其有焉、こゝに時々觀場にある事ありそれの皆偽造なり其法土の中へ砂糖を糶へ塔を造りて蟻を集め居らしむるなり

蟻の塔

あはれ蚊

蚯蚓の鳴き聲

〔物類相感志〕九月蚊子嘴生花また〔代醉編〕に古諺有云霧滂而蟹螯枯、露下而蚊喙折、こゝにて八月あはれ蚊と云の喙の折る前なり花の如きもの出ての人を刺す  
蚯蚓の鳴ものにあらず土中にて鳴の蝮蛸なりといへれば是はおぼつかなし鳴く處を尋ねみしが蝮蛸の見えず猶みゝなるべしその鳴ことい古人もいへり〔虫の歌合〕此ころのつちの中なる住のして君かすかたもみゝず鳴なり〔吾吟我集〕目をもたぬむしのことくにねをぞなくみゝすあらざる人をこふとて

蚯蚓陰晴を知る

〔本草啓蒙〕に本草原始に雨則先出、晴則夜鳴、因知陰晴、故俗有地龍之稱、夏月晴夜地中にて鳴其聲長くひきて間斷なし〔大倉州志〕に先許事少作苦雨詩、有「蚓竅但鳴蝮之句、盖今謂曲蟻善鳴者非是、其鳴者乃蝮蛸也」と云へり然ども此詩句に據れば蝮蛸の鳴の雨ふる時にありて其聲短し蚯蚓の鳴の晴たる時にありて其聲長し自ら分別ありといへり蚓の聲を〔花鏡〕に

蛸笛

蛸笛と出たり

小兒陰腫

こゝにて小兒の陰はるゝ時ひみゝずを取て洗てはなつ呪あり〔鎮江府志〕今小兒陰腫、多以爲此物所吹以鹽湯浸洗則愈、こゝの呪の何のみゝずにても取て洗ふに功驗あるも奇ならずや

虫目鏡

虫めがね〔洛陽集〕虫めがね老の波こす螢かな嘉辰むさし野のむさしのなりけり虫めがね行正〔續山井〕よりてこそそれ蚊ともみめ虫目がね寛種水底の月やもにすむ虫めがね安信西洋鏡の顯微鏡の高價なるをこゝに學び作れるに小兒の玩具もあり

闘鶏 ちやむ 野郎遊女が鶏合 小鳥合 鴨合 かりの子 あひろ 鶯合 三光

鳥籠古製 請取渡し 鳥屋 鳥さし 江戸鳥屋の事 鶉會 あひ夫 放し飼 鶉

鳩の聲 梟の聲 白鳥 ちとゝ 瓢のねぐら 鳩の草莖 鴨れとし つく落 媒鳥

寒苦鳥 諸鳥飼

闘鶏

闘鶏の事〔雄略紀〕七年、吉備下道臣前津屋、以小雄鶏呼爲天皇鶏、拔毛剪翼、以大雄鶏呼爲己鶏、著鈴金距競令闘之とありこれ〔左傳〕に季郈が闘鶏の事をいふに季氏芥其羽、郈氏爲之金距、と有り此法を用ひしなるべし〔和名抄〕に玉燭寶典云、寒食節、城市多爲闘鶏之戲、闘鶏此闘云止利〔台記〕に天慶元年三月四日闘鶏十番有之これによりて後世專三月の節物たり殊に好みたるものいづと定りたる事のあらず唐にハ明皇本邦にハ相摸入道など尤これを好めり今禁中にハ毎歳三月行ハる〔日次紀事〕云、禁裡清凉殿南階前、有闘鶏、諸家中雲客被出之、仙

ちやむ

納彌市預此事決勝負、是亦稱行事〔御傘〕に云鶏合ハ夜分にあらず三月三日にある故に春に成といふ説ありたしかなる節會にあらず〔平家物語〕にも三月ならでせし事あり〔禮記〕にもこの事あり京童いづもする事なれば雑にして置べき歟ちやむといふ鶏ありわきてよく闘ふ故にこれを闘鶏と名づく〔秘傳花鏡〕云、一種闘鶏似家鶏、而高大勇悍異常、諸鶏見之而逃、其以冠平爪利者爲第一、每闘雖至死不休、好事者畜之、於深秋開場賭博、先將兩鶏形狀、審得大小相當、方放入闘場、聽其角闘、每以負而叫走者爲敗、養法闘後、須用長鷲翁一根挿入鶏口、絞出口内惡血、安養五七日、再闘則無損傷之患、雖全勝者、亦不可使之連朝狼闘、草鶏雖雄多望風而靡云々、草鶏ハ常の鶏をいふなるべし

野郎遊女  
の鶏合

ちやむといふと暹羅より渡りし鶏なり暹羅ハ南天竺の内にて唐山より西南の方に當れり莫臥爾の屬國といへりこれをシヤム又シヤモとも呼こゝにいつの頃わたりしか定かならず外國の鶏を常に食料とすれば船上に載來る故この鶏も早く渡りしにやされ古書にハ見えす〔大和本草〕に暹羅鶏紅毛鶏ハ外國より來れりとのみいへり西鶴が〔大鑑〕にむかしの芝居若衆坂田皆之丞ちやむの鶏合を好みたることを載たり若衆歌舞妓ハ明曆二年に停止せらるそれより以前の事なりこの戯男子のみにあらず〔五元集〕闘鶏句合、鳥原へはや人やりの鶏行事判云名高き君どもれなしくよき鳥をもとめてものしけり所々のあらそひに人やり合に合せ侍る芳野唐士などが鳥にハ翅に薰物し爪紅粉化粧して花美ことに人の心をなまめかし迷いせければ後法度になりて鳥どもみな放ちやりぬ云々いへるハ寛文延寶ころの事にや薰物爪紅粉ハ羽芥金距にことかハり風流に



小鳥合

鴨合

の聞ゆれを遊女の戯に似氣なし昔し世にはやりしこと是にても知らるる〔昔々物語〕に昔の三月に男子鶏合とて鶏を持出て合すとあり又貞享頃にもあかりと見えて〔日本歳時記〕の繪にかけり正徳元年卯五月廿一日近き頃町中にて鶏合の會を致し其黨の町人等數十人組合屋敷方へも徘徊いたし候由さた相聞之云々左様の儀仕間敷御觸あり

小鳥合の〔著聞集〕に寛治五年十月六日殿上人所衆瀧口小舎人左右をわかつて小鳥合の事ありけり公卿のまゐらず殿下三位中將ばかりぞさふらりける殿上人左方頭中將仲實朝臣右方中將宗通朝臣以下夏の袍ともに冬指貫をぞ着たりける左勝て殿上にと、まりて朗詠今様猿樂など有りけり右のみな逃ちりにけり小鳥の後に院へ參られにけり

鴨合の〔百練抄〕云、高倉院承安二年五月二日、於上皇御方有鴨合、近習月卿雲客及北面下臈等、分左右爲念人、絆起兼日之義、爲當時壯觀、有勝負舞、此時の事、著聞集、この鴨字を鶏字に作るの誤なり又〔尺素往來〕に五月五日、賀茂遊馬并深草祭、上下之見物、鶯鶯之闘鳥、可有此時歟、鴨合の五月二日〔和名抄〕に鶯名比衣土里とあり此鳥闘ふことを聞ざれば是鶯の鴨字を誤れるなり但し鶯鶯とあれバ鶯合の如く鶯も蹄聲を合せしにやとも云へれどさきにあらざ著聞を考れば聲を合するに非さればこれも然るべし又〔著聞〕に宮内卿家隆ひさうのひよどり〔鶯〕萩の葉といふを子息侍從隆祐にあづけてかはせけるをとりにやるとはやまといふ鳥をかばりにやりたる贈答の歌あり萩葉端山の鳥に名づけしなりこれにひよどりとかなにてかけるもあてぬ文字を鶯字に誤りてそれをかなに寫し、ものならん〔同書〕に後久我太政

あひるの子

大臣家におもながといふ鴨の有けるを家隆卿所望せられけることもみゆれば萩の葉といへるものにや

〔吳志〕に孫慮於堂前作闘鴨欄ことみゆ又闘鴨の詩賦など往々あり〔五雜俎〕云、古人有闘鴨之戲、今家鴨豈解闘耶、といへり家鴨のあひるなりおもふに野鴨の水中にあらざば闘ふことあるまじ今この鴨合とあるの家鴨なるべし〔著聞〕に鴨合の事を記したるにかりやの東の砌に第一間にあたりてかさしの花の臺をたて、といへりかり屋の假屋ならず鴨屋なりかりの今いふあひるのこと、みゆ卵をかりの子といふ是なりかりの子とりの子といひたれどもかもの子といふの聞えずからばこの鴨合のあひるなること知べし〔五雜俎〕に闘を知らぬよしいへぞあひるも互に見馴れぬ鳥の闘ふものなり〔蜻蛉日記〕にかりの子のみゆるをこれ十ツ、かさぬるわさをいかせてせんとてまさくりにす、しの糸を長らむすひてひとつむすひてひゆひくしてひきたてたればいとよわかさなりたり〔源氏物語〕かりの子のいとおほかなるを御らんしてかんしたち花なぞやうにまぎらひしてわさとならず奉り給ふ「おなしすにかへりしかひのみえぬ哉いかなる人か手ににぎるらむ〔伊勢物語〕〔古今六帖〕にのりの子といへりとりの子の何にまれ廣くいふべけれぞこれの鶏卵をいふかりの子のあひるの卵なるべし雞とあひるの常に人家に飼て卵の食料とする事古も異なる事あらし鳥にも今かりかも又かるともいふものあれどかりの子のそれらの卵にあらざ

鴨、家鴨の近きころまでも人の食のぬものなりしに今、夏月の珍味とし用る京師にても専



鳥と弄ぶ

鳥を弄ぶこと〔垂仁紀〕二十三年冬十月譽津別皇子鶉の鳴て大虚を渡るを見給ひて始て物言ひ給へるを天皇喜び給ひて天湯河板舉に勅して其鶉を捕へしむ譽津別の命此鶉を弄び遂に言語することを得給ふ是に由て湯河板舉に姓を賜て鳥取造と云ふ亦此時鳥取部鳥養部を定らる

鳥屋  
付子

鳥さし

鳥屋〔人倫訓蒙圖彙〕に小鳥屋諸の飼鳥を商ふ其外鶯鶉等の鳴鳥をもて諸方の鳥に音付をするなりといへれとよき鳥の音をうつす鶯は、玄ろ等なりこれを付子ともいふ鶉はうつらぬものなり頬じろの虫つけとて鈴むし松虫などに付るとあり小鳥屋といふもの古へい今とい異なりとみゆ〔職人盡〕に鳥さし有り其歌に「春の又どころも花の千本にみせおくらな」の鳥のいろく鳥さし即小鳥屋なり鷹の餌なごにも賣しなるべし〔懷子十〕見をめたりし菅笠の内花の木にさいとりさしのねち寄て〔同集八〕菅の根の長さ笠の緒引あめてさいとり棹にちりぬべき花〔後撰夷曲集〕ひからめをためつけよりてさす竹のやぶにらみといこれも申さん〔櫻陰比事〕に西の京なるゑさしの上手にさしける鳥さしむかしより西の京にあり後世の専鷹の餌を取る故に餌さしと呼り江戸の餌さしは餌鳥屋の鑑札をうけて出るとなり〔俳諧綾錦〕見送のかねも尾上も有明て茶の烟避く一ツひよどり尾上のかねにひよどり越を付たるなれと鳥さしの學びするはやしことなり

江戸鳥屋  
の事

江戸にて鳥屋の定め有し享保三戊年七月廿三日鳥問屋十人町中にて致吟味相極可申由月番藤左衛門方へより合せと物町安針町すた町新石町其外鳥屋有之候町々鳥や共名主呼

水陸鳥問  
屋のと

よせ瀬戸物町鳥問屋五人相定残り十人くじどり仕候内五人相究十人書付外五人別紙書付さし出す右之外餌鳥上候者七人外に八人都合十五人有之候處七人者共御餌指衆賄鳥共請負度旨御鷹匠頭へ相願候て七人相極十人の問屋方にて札請取餌鳥無遅滞出候筈之事その頃西村喜之助と云もの鳥餌さしを似せ在々所々百姓より金錢を取しがあらはれて刑せらる

享保十年巳正月水鳥問屋六人陸鳥問屋八人飼鳥や只今迄之通商賣不苦候段先達て申渡候へ共飼鳥も陸鳥の内に候間陸鳥問や八人の者計引受候事に候依て飼鳥や共上方并在々より直荷引受候儀不罷成候陸鳥問や共より買請商賣致候儀の勝手次第に候同二月廿七日飼鳥の内下り問屋と唱候その四人の只今までの通直引受いたし陸鳥問や共八人より改を請商賣致候様其外の直荷引受申間敷仰渡さる飼鳥も陸鳥なれば諸方より引受の陸鳥問屋のする事なから飼鳥屋の内下り問屋と唱るもの四人ありて是の鶯こま鳥小つはめみ山波、玄ろ等を京大坂奈良郡山等より直に引受をする事なり其他のみな陸鳥問屋より買請て商賣すべしとなり事繁けれハ略之其已前ハ鳥問屋小田原町のみにあらず所々にあり茅場町藥師堂の邊七八軒あり 貞享四年卯二月魚鳥の御觸ありせと物町安針町須田町連雀町湯島本郷彌左衛門町新右衛門町新肴町宇田川町芝井町麴町へまめ鳥の有數書出さすることあり〔胸算用〕せと物町麴町の雁かもさなから雲の黒きを地にはへたるが如し

貞享四年發句合〔續の原〕桃青か判跋に判士よたりに乞て我も其一にたがふまことや樂に

鷓の目を  
縫ふ

ゑらるゝもの笛を盗むに似たりといはむされども青鷓の目をぬひあふむの白を戸さゝむ事  
わたぬ云云今水鳥屋にて鷓の目を縫ふなり

麥うづら

鷓の歌に多くよめども飼鳥にする事古への聞えず後世慶長より寛永の頃鷓合大に行われし  
事其ころの草子どもに往々見えたり「犬子集」に「籠もちつれてかへるさの袖暮るより鷓合  
やみてぬらん又「發句帳」真徳詰籠てもまゝくはひとなく鷓かな詩歌會の心にや然らば  
志くわいさ書へし又鷓の啼  
聲に七ツさかりといふ事あり「籠耳」に大藏といふ能の狂言師鷓をすきて飼けるある時江戸  
へ下る道中はたごやの門に籠に入れて鷓の挂てあるをふと聞ければなく聲ふとく七ツ下かり  
の名鳥なり大藏聞といなや此鳥はしくなりぬ云々岩翁が「若葉合」第二介我やくそくも二處  
なり月二夜鷓合の金ほとの聲、麥うづらと稱するの麥秋の頃諸方より取て出す江戸に南  
部より多く來る近年明和安永の頃鷓合の事流行て大諸侯競ひて是を飼入れける鳥籠の金銀  
を鏤め唐木象牙螺鈿高時繪にて皆一雙ツ、に作らせ装束の足かけ天幕金襴猩々緋のたくひ  
用ひさるものなし其會日に江戸中鳥好のものに是また件のことく美を盡しよき鳥をえら  
ひ持出て勝負をなす鷓の朝をむねと啼ものなれに必朝早く會あり飼鳥屋の江戸中のみ  
な集りよしあしを聞わけ甲乙をさため角力番付の如くに東西を分ち一二を以てあるす大奉  
書を横につきて書付東西壁の上に貼付もし一となれば鳥屋共に祝儀として目録を遣す此費  
許多なり凡鷓のよき鳥ありても其音を移す付子などする事ならぬものにて鶯などのことく  
其類出來す其うへ何ぞ驚さわげバ忽胸をうちて死する事あり高價をもて買ふのははりたる

あひ夫

鷓闘

放ち飼

物ずきにて鶯飼をいやしむとかや近頃ハ鷓を子を生  
せてそだつるなり

鷓の雌をあひふといふ「懷子」草枯やあひ夫うづらも床離れ秋巴鷓を飼ふ者よく其聲をまね  
て口笛に吹ば是を聞て雄なく「同集」なければなく真似の入江のうづら哉宗治西土に闘鷓と  
て鷓のことく戦ひしむ「五雜俎」云、江北有闘鷓、其鳥小而馴、出入懷袖ナラフ、闘鷓又似近邇  
云々、鷓雖小而馴、然最勇健善闘、食粟者不過再闘、食稜者尤耿介、一闘而決、故詩言、鷓之奔々  
言其健也、また「花鏡」に凡鳥性畏人、惟鷓性喜近人、諸禽闘則尾竦、獨鷓其足而舒其翼、人多  
畜之使闘、有鷓之雄、頗足戲玩、また小き布袋に納れ身邊に近づけ放ちて養ふことなども記し  
たり此戲のこゝにてせざる事なり唯放し飼にすることもなし此外の鳥の放ち飼にする事古  
くもありしなるべし

「窓のすさみ」阿部豊後守忠秋朝臣執政なりし時鷓を好て多く集めおかれしに其頃富る人世  
上に第一と聞ゆる鷓を持しが朝臣の御許に進らせ度よし立入候列大夫に申置けるを或時折  
よかりしにや其事を申し出られる朝臣そのいらへなくて四方やまの物がたり時を移し  
て後近侍の者を召てあづけおける鷓の籠を持來て並べよと有しかば悉くかいつらねし時其  
戸をみなノ、開き候へと有てあけしほどに鷓の残らず飛去りぬそにて朝臣申されけるハ  
重職の人の物を好事大なるあやまりにて侍る今まで心つかで鷓をあまた集め置しに先の人  
のよき訓を承りて今より鷓を好事やめ侍る其方へ此禮詞を能つたへてたべと有しかり大夫  
もことばなくして出られける

鴿

傳書鴿

鴿〔菟玖波集〕よみ人不知「軒の下にて夜をわかすなり籠の内のねぐら尋ぬるはなち鳥〔新撰六帖〕入ぞうきすゝめのひなの手なれつゝまばしも身をばはなれざるらんよく馴てその家をわすれぬものゝ鴿なり和名にいへばといひ俗にせばといふ是なり鴿に書を傳ふる事〔本草釋名〕に張九齡が故事をいへりまた〔八閩通志〕に性甚馴善認主人之居、舶人籠以泛海、有故則繫書放之還家、故又曰船鴿、とあり鴿の鳩より形小なり鳩のきじばとまたつちくればといふ〔大和本草〕に斑鳩をつちくればととするの非なり斑鳩の數珠かけばと又としよりこいと呼ものなり京師にて鳩をもとしよりこいと呼り然れども鳴聲に異なる處あり土くればといひ聲濁りて未をかさねて鳴く九州にて是を與惣次こいといひと聞て與惣次ばといひ東國にてとつほうといひと聞斑鳩の聲高く清てとしよりこいとばかり鳴末をかさねず東國にてとつほうと聞く〔安布良加須〕よふかよはぬか心もとなさ年よれば氣にこそかゝれ鳩の聲契沖が〔餘材抄〕にとしよりこいと鳴てやがてまか名付たる鳩のげにもまか聞ゆればむかしよりかくよめり西行の歌「山はたのそびのたつ木にゐる鳩の友よぶ聲のすさき夕暮近きころみつね集の古本を見侍りしに」聲きけば老のみまさる人にくゝ來つゝのみ鳴よふことりかなと侍り此歌聲きけば老のみまさるといへるの全く彼年よりことなく聲をさして詠ると聞ゆ〔續山井〕鳩の峰みよや年よりこい紅葉未翁また〔埋草〕の内、卜養千句「ふくろうのりすれと鳴月の夜に〔嘉多言〕にうそ鳥のさへつるの琴の音に似たればとて琴ひくといひ鼻のから聲をのりすれとなくといひやさしきとさもしきと各別なれど生れ付たる聲なれば

はこの聲

鼻の聲

すべなしこれらも古くよりまかいへり〔鴉鷺合戦物語〕鼻の云えせけなれどもかといふんの能くす明日の雨を知ての糊すりをけとなく老者に死を告るそのをと丈を呼〔續五元集〕八重玉椿壺の口張おのが音の糊摺桶に雪解て〔輕口噺〕宿老いはるゝ此中ちちのみ木でふくろうかはゝまゆくらくとらおけくとなさました〔鴉鷺合戦〕に老者に死を告るといひしが是なるべし〔雅筵醉狂集〕鼻の繪に「寫し繪の墨のすみにき表具せむのりすりおけと鳴やふくろう

白鳥

〔古事談〕寛徳二年二月頃、有白鳥長四尺許、身長三尺、來往侍從池、伴鳥鳴詞、有飯無菜云々、白き鳥〔北窓瑣談〕といふものに、天明年間白き鳥出て京師の人もてはやし王侯貴人の御覽に入遂に御聞に達し禁裏に召れ上なき吉瑞なりとて公卿大夫各賀表を奉りいはひ祝し給ひける頃伏原故二位卿も時の明經博士にて考文を奉り王者の吉瑞と賢人君子を得るをいひて異獸奇禽をいふにあらざるとまめやかに申上給ふといへり〔金葉集〕後冷泉院の時近江國より白き鳥を奉りたりけるをかくして人にも見せさせ給はざりけれの女房たちゆかしかり申けれはおのゝ歌よみて奉れさてよくよみたらん人にみせんとねはせことありけれはつかうまつれる少將内侍「たぐひなくよにおもしろき鳥なればゆかしからすと誰かおもはん〔同集連歌部〕鳥を籠に入れて侍りけるがよこ雨にぬれけるをみて「雨ふればきしもまどゝになりけりかさゝぎならんかゝらましや

瓢をぬぐらすとす〔夫木集〕寂蓮歌「籠の内も猶うらやまし山からの身の程かくす夕がほの宿

瓢をぬぐ

まどゝ

鴟の草莖

〔鷹筑波集〕水うみの水をふくべに取こめて昔ながらの山がらやかふ〔佐夜中山集〕へうたんからこまどりもかな四十雀「へうたんの軽口たゝくひからかな〔狂歌〕山から面白く戻りを打日暮に籠の内にかけてる小き夕貌の中に入れてあかしけるをみて「山がらも源氏の君に習ひけん夜とにやとる夕顔のやと〔續山井〕山雀の籠て水汲名譽かな是も習はずれば目じろなごもよく戻り打ものなり鴟の草莖〔袖中抄〕に與義抄を引いていへる説の殊に附會なり〔八雲御抄〕にもずのくつていわかみかはりにかへるやうの物をものにさしておくなり是郭公のくつてをせむると云り是に説有れども不可過之とわれ共是又古き俗説なり〔淮南子〕高誘注云、伯勞應陰而殺蛇乃磔之樹上、而始鳴とあり然らば蛙やうの物を木枝などにさし置ておのれ隠るゝとするの非なり先さやうの物をして鳴出るなるべし思ふにわが食にせむとて取たる物の餘りしをさやうにまて置なりことなる義あるにあらざ〔五元集〕元祿丙子のとしむ月末つかたに淺茅かはら出山寺に遊び侍り畠中の梅のほづえに六分計なる蛙のからを見つけて鴟の草莖なるべしと折とり侍る「草莖を包む葉もなき雪間哉〔同集〕に小庭にうつしたる梅の小枝に鴟の草莖を見出て人々にありしにや

鴟おとし

鴟れとしの〔日次紀事〕云、山林間、鴟、縫目居於架頭、傍設粘竿、而執鴟鳥、是謂鴟落。〔呂覽五〕仲夏紀、鴟始鳴、反舌無聲、注、鴟、伯勞也、是月陰作於下、陽發於上、伯勞夏至後、應陰而殺蛇、磔之於棘、而鳴於上、今思ふにこの説によりて蛙を草の莖に刺といへるなりこれ蛇を棘にさすよし有をまひていひつけしものなり本の詞いたゞ鴟の草莖といふとにて久利

づく落とし

を約れの幾となる故久を清きを濁ていふべきを誤て異説につき上を濁り下を清て莖の意と心得し也〔萬葉集〕にも、鶯の木の間立くきと見えし、全く此意と同一、潜ることをいへるなり  
づくれとしの〔和漢三才圖會〕云、世俗合蒙、頭巾於鴟、或以テ氏チ牟皮、作囹而執諸鳥、といへり黃チ狢の皮を鴟に似せて作るなり〔菟玖波集〕霞よこさるかし、の森いぬふりのみ、つぐのみや覺ぬらん〔守武千句〕に「われもくゝのからす鶯のどかなる風ふくろうに山みえて、めもとすさまし月残るかけ〔尤草子〕わらふものみ、づくに小鳥〔吾吟我集〕み、づくでおはくとりぬる小鳥こそわらふ處へ福來るなれ〔温故集〕に雀子もわらへ旅出の投頭巾、蓮谷〔續山井〕四十からまどはされたるをとり哉、友靜囹の事古くも見えたり〔萬葉集十三〕上畧末枝爾毛知ホツ引懸、仲枝爾伊加流我懸、下枝爾柴乎懸、か母をとてをあらす、か父をとてをあらに、いそはひをるよいかるか鶯とまめ鶯と此の囹か母父をとらるゝをあらて遊ひをるをいへり〔潘岳射雉賦序〕云、余徙家于琅耶、其俗實善射、聊以講肆之餘暇、而習媒翳之事、遂樂而賦之、媒者少養雉子、長而狎人、能招引野雉、翳者所以隱射也、この媒鳥のをとりなり柱翳の古歌にまふしさすとよめる是なり鳥の人をみて驚かぬやうに目かくしするなり株を立そのうへに笠のごとく木葉を覆ふとみえたり

囹の事

寒苦鳥

童の諺に鳥の夜が明ば、柵を作らうと啼といへり、はうまくろうと鳴といへるにちかしされとまか啼といふ、他の鳥なり木満寺日重が〔和語雜々抄〕に「はかなしや雪のみ山の鳥だにも

寒號虫

世にふるといへばぬものを寒苦責我夜明造栖これハ雌鳥カ鳴聲ナリ今日不知死明日不知死何故造作栖安穩無常身雄の鳴聲なり世にふることをおもはぬよしなり按〔本草〕寒號虫ハ鶉鴒と名ク郭隣云夜鳴求旦之鳥夏月毛盛冬月裸體晝夜鳴叫故曰寒號時珍云夏月毛采五色自鳴若曰鳳皇不如我至冬毛落如鳥雛忍寒而號曰得過且過云々〔輟畊錄十五〕五臺山有鳥名寒號蟲四足有肉翅不能飛云々〔虛栗集〕寒苦鳥孤婦かねさめを鳴音かな幸下寐させぬ夜身を鳴鳥の寒苦僧才丸貧苦鳥明日餅つかうとぞ鳴ける其角

諸鳥

錦鶏孔雀紫鴛鴦雁鳥等の卵みな雞に抱かせてかへすに大かた鶏と同く三七日にてかへるものなりその内孔雀ハ一月を経ざればかへらず錦鶏ハ卵四ツばかりならでハ生ず孔雀ハ十四五も生む鳥ハよどりハ二ツ三ツに過ず凡鶏ほと卵多く産ものなし大かた一月の内に十二ばかりハ生べし飼ふに費多きものハ丹頂の鶴なり一日の料鰻鱺銀三匁泥鰌三匁五分玄米二升なり一年に積りて凡金二十二兩許り飼料にのみかゝる是も卵ハ二ツ産み伏する事四十四五日五十日にてかへるといふ

嬉遊笑覽卷十二下

漁獵

○漁獵○鷹狩 犬 鷓鴣つかひ 鹿狩 狗山 釣 六物 ミ、ズ ゴカイ テグス ヒ、 ドウウケ ヤナ 地獄網 大六人引 アグリ 佃鳥起立 御菜島 汐乾 突

鷹狩

ヒシ ヤス うなぎ釣 竹煙 鼠頭魚 はせ 根釣 川釣 田舟釣の始 岡釣 金魚 ビイドロノ壺 談義坊 杜父魚 水瓶に魚を入へしと云こと

〔日本書紀〕仁徳天皇四十二年九月庚子朔、依網屯倉阿弭古浦、異鳥獻於天皇、臣每張網捕鳥、未曾得是鳥之類、故奇而獻之、天皇召酒君、示鳥曰、是何鳥矣、酒君對言、此鳥類多在百濟、得馴而能從人、亦捷飛之掠、諸鳥、百濟俗號、此鳥曰俱知、是今時乃授酒君、令養馴、未幾時而得馴、酒君則以韋縉著其足、以小鈴著其尾、居腕上、獻于天皇、是日幸百舌野、而遊獵、時雌雉多起、乃放鷹令捕獲數十雉、是月甫定、鷹甘部、酒君、百濟王之孫なり同五十年春三月壬辰朔丙申、河内人奏言、於茨田堤鷹產子、即日遣使令視、曰實也、天皇於是歌、以問武內宿禰、曰云々、阿耆豆辭莽椰莽等能區珥々箇利古武、產等雛、波企箇輸、不聽椰とあるか始なり、茨田堤に子産たる鳥ハ天皇御製にカリとわれハ鷹ハ雁字を誤れるにや〔嵯峨野物語〕に仁徳天皇の御時に高麗より奉つるとあるハ記憶のあやまりなるべし〔養鷹記〕漢字の記、朝倉教景ハ鷹二雛を育する事を記せり其中に仁徳の御時百濟國より鷹と犬とを獻すその舶越前敦賀に至る鷹を養ふ者を米光といひ犬を養ふ者を袖光といふ政頼奉勅赴敦賀迎使などいふ事を記せり仁徳の事ハ〔嵯峨野物語〕の誤をうけしならむその他の事ハそのかみの俗説なるべし凡を鷹ハ雌のカタ形雄より大にして性貪る故に能鳥を捉るこれを大といふ〔養鷹記〕云、國俗訓、大雄を兄といふに習ひて弟とも書るにや大といハ〔和名抄〕に不論青白、大者皆名於保太加、小者皆名勢字、とあり大鷹ハ二とや三歳をいふ、已上をいふ、〔萬葉〕十七、矢形尾乃安我大、〔源氏夕霧〕か

大





鵜の鳥と  
つふふ  
鹿狩  
漁獵のと

鵜舟十二艘あり今七艘となる長良川の鮎を漁す鵜十二羽を一人にてつかふ川に入らざる鵜をい船はたをたきて追入又魚を吞たるの吐せ篝火を焼立かたくせのしき業なりと有り鵜の古人の説に胎生にて口より吐といふの誤なり口より吐もの鵜なりと「本草」に辨ず鵜もまたおぼつかなし「五雜俎」に鵜似雁而善高飛昔人謂其吐而生子未必然也「典籍便覽」云鵜鵝性善捕魚卵生漁家畜而抱之須人送守不相離視其少動即呵止否則自毀其卵矣「爾雅翼」并「稗雅」俱云不卵生而吐雛未詳この故にや「東雅」にウといふこと詳ならず浮むの義なるに似たりといへりいかゝ有るべきやおもふに胎生の説のさし置て其羽にて産屋をふくと「神代紀」にあるも産の義あるにや「金葉集」連歌類聚「あらうとみれと黒きとりかなふみ人さもこそりすみの江ならめよとも洗ふをあらうといへり」「菟玖波集」に「かり人の乗るこれのくろ駒開白前左大臣夜川にや水のからすをつかふらんと有り貞徳が雛を卵の親と云けんやうなり又「著聞集」に文覺上人高雄興隆のころ猿の鳥を捉へて長きかつらを足にゆひつけ川水に投入一疋のかつらの先をとり今二匹の川上より魚をかりける人の鵜つかひけるを見て魚をとらせむとすれ益なくて鳥死ければ猿共の打捨て山へ入にけるといふ事を載たりこれらも鵜つかひし事のおぼかりければなるべしこのまれする鳥の諺もこれらより出し」

狗山

えい狩

釣

らひ狩りともし火串なぞする夏山の狩なり「和名抄」續搜神記を引て云々今按俗云照射止毛蹤血利波加とあり「河社」に今も血をどめて求るを肥前國人のはかりといへるよし見えたり「遼史」に七月中旬自納涼處起牙帳入山射鹿令獵人吹角効鹿鳴既集而射之謂之胝鹿又名呼鹿四時各有と見えたり獵人の山かせぎといふもむねと鹿を取る事よりいひしにや「日本紀」の訓に鹿をカセキと付たり鹿をカセキといふの古への名にあらす又宋といふの肉をほめていふなりさればえい狩といふも専ら鹿をいふなるべし狗山といふ「舊本今昔物語廿六」第七語、此人犬山といふ事をして數の犬を飼て山に入て猪鹿を犬に令敵殺て取事を業としける此外狗山の犬大蛇を昨殺して主を濟ひし物語などもあり狗山といふ地名などのあるの此事によりたるも有べし「西京雜記」に馳駿狗逐狡獸とは是なり昔鎌倉將軍のはじめ頃武士の遊興えい狩をことす伊豆國おくの狩くら其後右大將家あさまのみかりみはらの下つけなすの狩それより富士の狩くらあり狩くらといふ諸人きをひて狩りて獲ものを争ふなれば狩獵なるべし「八雲御抄」にあまのふねにていさりするをもゆふかりといふとある「無名抄」朝かり夕かりの説とおなしいさりすなとりの「冠辭考」に勇魚取を略きていふなるべしと有に從ふべし釣をチと訓るのツリの反なり「和名抄」に聲類云釣和名都利設釣取魚也とありて釣を載せず恐らく下の釣字釣字を誤れるなるべし「續日本後紀」承和八年四月庚申從四位下百濟王慶仲卒云々世人謂爲有詹公之術衆人漁者與慶仲臨川沈緝魚之噉嚼專吞慶仲之釣瞬

六物

息間引得百餘云々これ又水に幸を得たる人なり釣具をすべて六物といふ〔漁樵對問〕宋維漁者曰六物者竿也、綸也、浮也、沉也、釣也、餌也、一不具則魚不可得云々然れども浮の海水のさらなり江湖にて流れ急きには用ひられず止水緩流の具なれば廣くいひがたし又其内にびくなきいかによや

ふり

〔雞肋編〕宋莊釣絲之半、繫以荻梗、謂之浮子、視其沒則知魚之中、鈎、韓退之釣魚詩云、羽沈知食、則唐世蓋浮以羽也といへり羽の今もはねうさといふなり又鶴の羽を浮子とし繩を引網を張るはと鶴繩といへり今鶴繩といふハ網に長き繩を付それにふりさいひて飾に作るべき片木の輪を二ツに切たるを多くあまた處につけたり漁人云この木日かげにうつりて魚の目に鶴のむれて追くるさまに見ゆる故是をうなばさいふ空の陰りたる日ハふり光らればその時ハふり繩をさでふり付る處に鳥の羽を多く付たるハ用さいへり思ふにこの名のまっひたるにや鳥の羽を用るハ鶴の羽にかへたるなりあからば是ぞまここの鶴繩なるべき

荻梗  
蚊かしら

荻梗の今も田舎にて蜀黍稗（シロコ）また葭莖など用ゐて鯽などをつるなり又山川にハ香魚などを釣るに蚊かしらといふものを用ゐ海にて牛角鶏毛を角に作りたるものにて釣魚を入る籠を江戸にてビクといふハ近きころの俗名鱧をつる大小ハ異なれども蚊かしらの製なり東國にてメカイ或フゴビクと云りむかしハ餌番といへりもと鷹の具を用ゐしにや〔新竹齋物語〕申の刻はかり宇治につく夕こそ魚つるによけれ竿よ餌ふこよと取出す云々びくハふこの轉したるにや〔續虛粟〕臺に菌の生る水鉢其角取りかへる沙魚ハ餌番をかたにして介我

餌番

餌番をアマと訓もと胥にハ樵者もありとみゆ〔嶺南雜記〕に胥有三種魚胥蠔蛋木蛋なり木蛋ハ伐山取木といへり

あま

家の指圖に釣殿といふあり〔拾芥抄〕に釣殿院ともあり池中の亭なれば納涼のためにも設くつりとい上より下へ物を下すことながら糸をもつりと訓れば横に亘るをいふされと此釣

釣殿

殿ハ魚を釣へき殿に作りたるなり〔源氏常夏〕に釣殿に出てすゝみ給ふ又〔宇都保物語祭使〕大將殿つり殿に出給ひて君達など涼み給ひて網おろしなとして鯉ふなとらせ給ふ

は尻笠

後世は尻といふ笠あり今ハ用ゐされともと釣の爲に作りたる笠なり釣竿の笠の縁に障らぬやう壺めて作れり〔我衣〕に元文より流行るといへり竹の皮笠なり

蚯蚓

蚯蚓を餌に用るも古きことなり〔唐書〕選舉志寶應二年進士科樞密等議曰今取士試之小道而不以遠大是猶以蝸蚓之餌垂海而望吞舟之魚不亦難乎〔同書〕卅五〔五行〕貞元十年四月

こい

江西溪湖魚頭戴蚯蚓とあるハ魚の口に含みて端の出たるなるべし

又魚を釣る餌に江戸にてゴカイと呼もの潮の入る川の土中にある虫なり沙土の處にあるハ肥すこれ漢名禾蟲なり〔事物紺珠〕虫食品類に、禾虫秋成時、隨海潮浮田上、如蛋味甘といへり彼處にて専食料として魚の餌とすることをあらざこゝにてハ食ふことをせず又〔嶺南雜記〕に禾虫形如百脚、又如馬蝗、身軟如蠶、細如箸、長二寸餘、青黃色相間、中有白漿、狀甚可

惡、產海濱、田中禾根長數尺、或至丈許、縷々如血絲、隨海水而出、漲至海濱、寸々自斷、即爲此虫、土人網而取之、午前擔負而賣、午後即敗不可食、取虫置器中、滴鹽醋一小盃、其漿自吐

漉、以蒸雞子最鮮、藩逆時禾虫亦稅至數千金〔按〕青黒色ハ赤黃の誤なるべし下文に如血絲とあるにいなて出るさき多く集りて水面をこゝにても河岸の潮水満干する處の草根に居れども禾田に生するこ

覆ふ故長きものと見たるにやこゝにても河岸の潮水満干する處の草根に居れども禾田に生することいなし夏秋ハ掘て取又浮て出るも秋にハあらず毎歲大かた十一月の三四日の夜新月に映

し水面ハ紅ぬになり浮みて流るそれより後日を経て又浮出都て三度ばかりぬけ出る是をぬ

ぬけぬ

けるさといふその膏を伺ひて漁者船に乗り四ツ手網又白魚わみにてすくひて是を取り貯へて冬月釣の餌に賣る然せされば冬月此物なしおもふにみな浮出て翌年のみな新たに生ずるにもあるべからずいと大なるも有は残りて有しなるべしこれをすくひ取る處の大橋の下三ツまた濱町の小川の入口とうか堀の邊其出口にてとる其外處々なれ共此邊ことに多し〔廣東新語〕に禾蟲狀如蠶、長二三寸、無種類、夏秋間蚤、晚稻將熟、禾虫自稻根出、潮長浸田、因乘潮入海、日浮夜沈、浮則水面皆紫、采者以巨口狹尾之網、繫於杙、逆流迎網、尻有囊、々重則傾瀉於舟、杙之所在江兩岸、其名曰阜、阜有主爭者、輒訟、與督門白蠅塘、皆土豪所私以為利者也、これに種類なしとあれどもイトメとて一種似たるものあり、色赤けれども尾のかた白し、冬月も浮み出る事なし、是又魚を釣に用按るにミ、ズを陸餌と云ゴカイを川餌と云し其ヲカエをまかへてゴカイとなりたるなり今ハエとのみいハエと云飼とい餌のことなり漁夫かつをなとつるにあちを用ればあち飼と云いわしを用ればいわし飼と云ふ〔廣東新語〕に節斷して浮出と云り又云、得醋則白漿自出、以白米泔濾過、蒸為膏、甘美益人、蓋得稻之精華者也、其醃為肺作醃醬、則貧者之食也。

又釣糸に用るテグスの弓弦のくすねにたとへて手くすねの意のるべし〔嶺外代答〕宋周 蟲絲 廣西楓葉初生、上多食葉之蟲、似蠶而赤黑色、四月五月、蟲腹明如蠶之熟、橫州人取之以釀醋、浸而饜、取其絲、就醋中引之、一蟲可得絲長六七尺、光明如黃成、弓琴之絃、以之繫、弓刀純扇、且佳、又天蠶糸といふ〔廣東新語〕に天蠶出陽江、其食必樟楓葉、歲三月熟、醋浸之抽絲、長

てくす

釜

ひ

いけす

やなす

網代

七八尺色如金、堅韌異常、以作蒲葵扇緣、名天蠶絲、亦有成繭者、大於家蠶數倍、禹貢厥篚絜絲、或即此類、然不可繅為絲、入貢者齊魯之山繭也、また釣具に用る事も見えたり〔漳州府志〕樟蟲如指大、長數寸、綠色、用醋洗之去肉、其中有絲、抽出許長、名曰蠶絲、用以釣釣、こゝにても今の薩州また信州などにも製すといふ、此虫樟楓の木にのみ出来るにあらず松などに多くまた他木にもありと聞き巢ハ網の如き袋なり俗にすかしたからといふ

栗またの宇落樹などに生ずる毛虫色青く毛の白し大サ二寸或ハ三寸四五月の頃腹中透とをりて見ゆるとき糸を製すべし其法之の油を火に暖めぬるみたる時明礬を少し入其中へ虫を漬し酢を少し加へて板の上に釘を打たるに虫の首を破り糸を引出して板上の釘にかけて虫を指にてつまみながらをろく引け糸長く出つ虫大なる糸長し糸の板上に着く故糸平みたれと乾くに隨て丸くなるぞ

〔和名抄〕釜捕魚竹筍也和名字倍うけのうへの誤なり  
ひの製のこゝにいへる如くなれば漢土に魚箔と云るものはなり楊萬里か過臨平、蓮蕩詩に、蓮蕩層々鏡樣方、春來嫩玉斬新光、角頭一々張、蘆箔、不遣魚蝦過別塘、〔和名抄〕籬とあるものに似たれども是ハ魚を養ふ處なりヤナズ〔倭名抄〕に籬をよめり取魚箔なりと注せり梁簣の義なりやなし〔和訓栞〕に梁をよめり屋魚の義木をよせて魚を捕るものなりやなうつともくたりやなどもよめり年魚の時美濃の藤川のやなくだし観つへきものなりあじろの〔延喜式〕に網代とかけり冬川に氷魚をとらんとて百千の杭を網引形にうち其木にたてぬきを

入て其はてに簀をあて、置なりといへり〔源氏橋姫〕十月になりて五六日の程に宇治へまうて給ふよしあしろをこそこのころの御らんせめと聞ゆる人々有と〔抄〕に網代をいむかしの都よりも見に出したり

ひゞのひゞの略なるべし魚聚れば竹木の枝動くもの故ひゞと云歟今品川鮫洲の邊にて海苔をとるひゞのも魚を取しものなり〔事跡合考〕ひゞや町の事をいふ處ひゞといふものひゞ網など唱ふ正字の無之漁人詞歟その製海中に枝付の竹或のきり竹をならべて置て風雨大浪に破れぬやうにまつらひ口を一所あけおく魚どもれのづから入る然れども出る事ならぬやうにこしらへたるものなり凡ドウヤナ杯いふ此類の製その法同じ意なり品川表深川浦等此ひゞ其數幾千に及ぶ上總三浦本牧等の漁獵少くかの浦々の者愁訴年を経たりしに一とせ大水にてひゞ悉く浪にとられ打つゝきまつらひしも悉く浪にとられ再興なり難く斷絶せしとなり今も品川浦磯邊に葉付の生竹を水中にゆりこめて春の苔を取をひゞ竹といふ然してそのむかしひゞかせぎあたる獵師とも居候ひゞやといひしもの此處にやよすか、在て終に移し出されしが今芝口のひゞや町なり寶永七年寅九月廿一日今度新御門芝口御門を唱可申候并橋ハ芝口丁目芝口御門享保九年正月廿九日大火にやけて後なし候以上芝口御門享保九年正月廿九日大火にやけて後なし

ひゞ竹

あぐり網  
大綱六人  
御菜白魚  
網役

享保十七年子七月あぐり網被仰付金六十五兩鯨舟二艘被下置あぐり舟に相用同十九年寅八月あぐり舟を大六人引あみ二組に相直し候様仰付らる

〔享保四年己亥日記〕五月十五日御菜白魚網役小綱町十二人願祇地の事右網役慶長年中より二十一人にて御役勤來候處仲間人數段々減少の上困窮仕候に付二十四年以前御役御免の願申上候得共難被仰付御評定所迄も被召出御役相續の勝手に成候儀可奉願旨被仰渡十年以前寅八月十二人の者共屋敷被下候間場所見立奉願候様久世大和守様被仰渡の旨於御酒部屋被仰渡其後所々見立候へ共故障の場所故不相濟依之京橋内外ニヶ所新廣小路藏地に被仰付被下候様當二月越前守様御番所へ右十二人の内十人の者共奉願候に付此方へ吟味被仰付藏地助勢を以京橋請負の儀并藏建様藏前疊みの小屋等は又十二人の内二人願に洩後に和談致し一統に成候迄吟味濟戸田山城守様へ越前守様より繪圖評狀等を以被仰上同四月晦日右十二人の者共召連罷出越前守様出雲守様御列座にて願の通藏地御免の旨十二人の者へ被仰付候事

どらうけ  
やな

ドウをドフヤナともいひしにやドウとヤナと二物にのゐるべからず其製ことなり〔物類稱呼〕にたつべい魚をとる具なり近江にてたつめ河内にてちんどう四國にてうゑ武州にてさうといふ江戸の北いなかにてさうと少し異なる物をこしらうけと云其形椀をふせたるに似たりハッソウ盒子魚器の詞ちみみて呼なりと云り

〔孔雀樓筆記〕に世に梁といひ傳ふる魚を養ひおくいけすぞ北地にて梁と云い魚を捕るの

鯉魚やな  
にす

具にて彼いけすどの形全くかはれり是を作るに多く巨材を用その費用甚多し夏秋これを大河に設け雨の都合よければ只一日に鮎を得ること馬數十駄に至る雨の都合よからず梁をやぶらるれば是をかけたるもの大に財を損ず鮎の外にさけなども取梁のどう木といふにはせかゝればいかなる魚にても梁へ落さるはなし梁へ落て死たる人もこれまで多し先年馬な  
がれ落て死せることも有しとかやさはおそろしき勢なれども鯉魚ばかりの終に梁へ落ず  
水勢に随てどう木までいせかるれども撥かへりて落すと云ふ化龍の説故なきに非ずさほど  
神俊なるものなれど水中にて是を捕る人ありその仕方兒戯に同じ又五月頃霖雨の時河より  
稻田へのぼるに村民の爲に打殺さる才に長短ある人のみに非ずといへり  
又云のふをはへると云の百丈餘の麻索に十數莖の枝をつけその枝につりばりをつけ諸雜魚  
を餌とし本索の兩端に笠をつけ海にはり置く大なるえものあれども走舟の爲にたぐられ鳥  
有となるともありと云り是播州漁人の詞をその儘に書るにやノフをはへるといふ繩を延るな  
り是長なはのことなり

江戸近國  
漁獵の壇

ふしつけ

江戸近國に漁獵の壇場の安房の長挾郡天津浦なり〔房總志料〕に下總銚子浦の漁場その右に  
出る地なしといへども彼土の専ら海鱈を漁するの處厨膳の鮮物の天津浦の饒なるにいふか  
ず  
柴漬の〔和名抄〕椀また涇慘とも見えたり〔新撰字鏡〕ふしつけの木と訓り〔天祿識餘〕説文、  
拵以柴壅水也〔江賦〕拵搬爲涇爽衆羅笠皆取魚之具蜀中有魚拵之名冬の内に柴を水中

蛙を一尺  
二尺と云  
ふこと

地獄網

に東ね入れれば魚寒を避てその中に集り居を春に至りて柴をわけ網をもて魚を捕る俗にふ  
しづけを切込といふ  
契沖が〔雜々記〕に今昔物語を引てさけを一尺二尺とあり常の事なりこの魚にかぎりて一尺  
二尺といふいかなる故かとあり〔結眸録〕に古蛙を幾尺といふの隻字の音を借りて書たる  
なりと

地獄網の今いふ六人ひきなるべし〔北條五代記〕見し今相摸安房上總下總武藏此五ヶ國の  
中に大なる入海あり諸國の海を廻る大魚とも此入海をよき住處として集るといへども關東  
の海士取事をまらず磯邊の魚を小網鉤を垂て取計なり然る處に今江戸繁昌故西國の海士悉  
く關東へ來り此魚をみて地獄網といふ大網を作り網の兩端に二人して持はどの石を二ツく  
りり付是を千貫石と名く二筋網をつけ長さ三尺ほどは、二三寸の木をぶりと名付大網の處  
々に千も二千も付る此槓といふ木魚の目にひかるといふ早舟一艘に水手六人ツ、七艘に取  
乗大海へ出て網をかけ兩方へ三艘つゝ引分て大網を引一艘のこと舟と名付網本に在て左  
右の網のさし引する此網の内にある大魚小魚一ツも外へもることなし悉く引上る物又砂  
底にある貝をとらんとて網のもとに石を二ツおも荷につけそれにかな熊手を作り付網を海  
へたろし大網を引はへて舟の内にまき車を仕付碇を打て網を引ぬれ砂三尺底にある諸  
の貝どもを熊手にかけて引起す天地開闢より關東にて見も聞もせぬ海の大魚砂底の貝を取  
あぐる去程に四時を待て波の上洲のうへに出る貝魚とも今の時をまらず常に漁しぬれば江

佃島由緒

戸にて初魚初貝の沙汰なしは廿四五年このかた此地ごくのみにて取盡しぬれば今の十の物一ツもなし「淮南子」に流を絶てすなるとる時の明年に魚なしといへるも思ひ出てうたてさよこのかた此漁網あり「佃島由緒の書付」を見るに津の國西成郡佃村の獵師江戸に來たりしなり佃島築立しの寛永年中願出正保元年申二月普請出來たり白魚いむかし江戸にいなかりし物といふの非なり件の書付にも始めより御用にて取しなり行徳領利根川葛西領中川御菜川

白魚を取

御菜島

として白魚を取事定りし按るに佃島出來る前ハ此獵師共いつこに居しか「元禄十六年日持參さ書付たる其文字知れぬ南茅場町にて吟味致候處會て不存候由依て藥師別當知泉院に承り候處此邊御さい島と申候由承傳候併文字ハ不存書留の樣なる物も無御座古へ此處より御用の御菜上候様申候然らば御菜島と書申へく歟と申候とあり此處に獵師ありて御用の白魚獻備せしこゝ見ゆ

大まき

沙乾

砂底の貝をとること今のこれを大まきといふ件の網を車にてまく故大卷の意なるべし

「萬葉集」鹽干乃今按に方字のミツノア、メノク、ツク、モ、マ、モ、カ、ラ、ン、イ、サ、ユ、キ、ア、ミ、ン三津之海女乃久具都持玉藻將苅率行見ナニハ、カ、メ、シ、ホ、ヒ、ニ「同集九」難波方鹽干爾出而玉藻苅海未通女等汝名告左禰イ、サ、ノ、メ、カ、ラ、メ、ナ、メ、ト、モ、ナ、カ、ナ、ノ、サ、ネ「和長記」延徳四年二月二日壬午晴今朝藤中入道室家依誘引詣住吉社爲見物鹽干也云々ハ、日、次、紀、事、云、三、月、三、日、海、潮、大、乾、泉、州、堺、浦、特、甚、故諸人競來拾蛤執、小、魚、浴、人、亦、赴、當、日、住、吉、沙、干、祭、也「滑稽雜談」に云住吉浦沙干凡三月三日より七日までなり沙干見物の輩泥中の蛤をとるを方言ににじるといふ足にて踏或ハ棒の先にて突て蛤刺のある處を知をにじるといふ「洛陽集」前の魚あはれ出し沙干かな順也「類柑子」親にらむひらめを踏むはひ哉音子「惣鹿子」三月三日芝浦沙干「名所鑑」繪本「繪本」ころりやよひ三日いさや鹽干を見物せんと友とちより合さゝなをもたせて芝の高繩手へ行海

突魚

ひし

やす

立ちみ

かなわら

てをみれば人あまた集り居て沙の干かたの蛤など取て遊ぶ云々かうなの家ひかた遊びやけふのるすつうとはすじやかたらまや沙のけふけふと沙干いづのみさきにせきもなしけふぞ沙干くむやせけんいとのうみ江戸にハ今ハ此月此日はかりにあらす魚を突に出るものいつにても出るなり

魚を突ことハ「山家集」に宇治川をくだりける舟のかなつきと申ものをもて鯉のくだるをつきつけるをみて「宇治河のはやせおちまふれう舟のかつきにちかふこひのむらまけ云々見えたり「和名抄」魚釣具に纂要云、籠「漢語抄」以鉄施棹頭、因以取魚也、とある比之といふものハ形姿に似鯨などを突もりといふ物とみゆ「山家集」にかなつきといへるも是なるか今やすといふものもどハ二股の器なりやすハ東國の名なるべし蝦夷にてやすと云「續山井」淵に臨み鮭をつくことをやす大事南瀬もどより漁人の用ひたるものなれと今の如く突魚に多く出ることハねもふに鼠頭魚釣に立ちみとて高き履をはき杖を突て水中に入て釣ことありその杖に用る竹の先の鍔の二股のやす也砂に立る爲にまたるものなり是にておもはずも魚を突得たる事有しより廣く行はれて魚突ためにやすの股を多くし三股に作り形も大にして終に六股七股に及べり二股なるをもやすとて共に用るハ大魚突たる時やす一本にてハならぬ故なり又かすかひにて作りたるかなわらぢといふものをはくハ是にも魚を踏取ことあり冬月の水に入らず舟のうへより突これを流を突といふ地に伏す魚牛尾魚コウチ魚エイカレイ等を取なり是ハ見突に非ず見突ハ魚の有を見付て突なり是ハ空ツツつきにして突中るなり赤魚ハ尾の針にて足



洲崎有て鹽みちぬれば船道を見うしなひ舟を洲へのりわけ波風に損ず瀬戸物町に野地豊前と云人ありて他に施す心さし身の爲にあらざるとて天正十九卯年のことなりしに洲崎にみざるしを立る是を俗にポンギと云今のはや野地も死ぼん木も朽て跡なし然れども名の朽やらで此洲を野地ぼん木と名付云々いへりしつづくにかあらん今の佃島の處などにや今海上に伯父棒といふあり野地ぼん木に語のひき近けれどもこれの中川の沖にあれば異なるべし江戸海上東西釣場の名(江戸砂子)に載たる内今と名のかはりたるもあるにや事繁ければ此に略す近ごろ江戸前にて珍らしかりし文化三年夏より秋かけて鯖のつれたること又同十一年六月より七月中雨ふらず水かれて深川清澄町の前俗に佃といふより高輪前まで小鱈多くつれたりいづれも中ばりにて手釣なり餌のつれども餌を用ひぬ

川釣  
田船釣の始

又川釣の利根川中川などに出て鱸鯉めなださいまるたなどを釣中川にての黒鯛せいこ秋のはせをも釣中川の魚のそだち利根より遅きにやすべて少し五月より八九月までなり今田船の如き小舟を多く設て釣人に借す處多し其始の鴻臺の麓を根本といふこゝに百姓權次といふ者常にかの小舟に乗りて網を打算をふせ魚を取て業とす又其小舟を釣人に借す此者語りける市川の宿に市立日ありその市に江戸より行ものに衣類の古手を商ふ佐右衛門と云しもの魚釣ことを好けるが市川の宿に泊り市の初るまで此河端に繋ける船を借て試みに釣しかば思の外魚を得て後のその市に行度ことに釣するに舟の物を運ぶにさし合て釣を止るこの本意なさに此わたりて賃を取て船かさん者やあると問ければさる處もなければももし

釣宿の始

彼こにて頼みなば借すこともあらんとて我らが家を教へこしたりひたすらたのみし故舟を借やとらせもしつ其ころは魚よく釣れてもて歸る途にて人も問尋ね聞傳へてそれより釣人多く來りぬかくて處々河はたに小舟かす家の多く出來たり釣宿といふもの此權次を始なりける今に健なる老父なりその始天明の末より寛政の初ころの事なり其ころの釣のまかけ糸ふとく沈も重く針も大きく今よりみればふつゝかなるやうなるに大魚多く釣れたりといへり今の巧者多けれども釣人多くなりて取盡せば得ものおのづから少し

殺生禁制

〔窓のすざみ〕寶永の末にや殺生禁制の頃御歩行の組頭愛久保彌太夫と云もの同僚の何がしと打つれて釣を好み常に樂しみけるが聞えて推問有けり出る時彌太夫同僚にいふやうをこにいいか答へんとありしかばいづくまでも釣せざるよし申開くべしといふ彌太夫の初より釣したる由申へしといひて出けるにいよく釣したるやと問はれし時彌太夫申の御禁制との存ながら若年より好けることにて先後止がたく公務の間は是に打かゝり樂み暮候と申此禁制の世に針などいづくより求め出せしと問はれければ某の若年より此事に熟し人の制したるの心に叶はず初よりみづから作て世にも愛久保流と申て手本にいたすことに候と答へけり一人申やう某の釣の好み申さず人の申の虚言にて候と云ひてあらがひければ然らば證據を見すべしとて人の許へ手づから釣得たる魚を送るとある書狀を見せらるゝを冷笑ていかにも某が筆跡にて候各の御方よりも送り物ある時唯にていめづらしからぬ故あるひい釣得たる魚と云又倒來と云野菜の手作など申ことよの常に候とさはやかに申ければ重



はやつり  
たなごつ  
髪毛を糸  
に代て用

て尋ねべしとて先あかりやに入置れけるさある中に御代かはり其禁制止しかば免されてけり彌大夫のいよく釣を好みしが一人の一生釣を手にふれず二人共柔弱ならざることにこそ  
冬にはや釣あり江戸にてはやさいふはま王子川赤はね河深川干鰯場などにて釣神田川にては八月ごろなり又鰯魚釣あり是の多くつれて興あるものなり寒中材木の河に積たる處本所深川に多し同所にてはや鰯なごも釣鰯魚の釣具いかにも軽く少きかよしおのれ一とせ戯に髪毛を糸に代て用ひしかば其時のまねする者もすくなかりしが翌年の冬より大かたみな是を用たり何者が巧みてりて浮に貴具を付て水に沈む釣鰯魚愚作あり、巨材無數繫河濱、僅有間空即下綸、綠木求魚何足やうにあたりしが今ハ用ぬす、釣鰯魚愚作あり、巨材無數繫河濱、僅有間空即下綸、綠木求魚何足怪、松杉堆裏引鮮鱗、また、袖中釣具耐相親、鯨骨爲竿人髮綸、餌投米虫何如麪、小釣不敢羨、巨鱗鯨鯨をもて竿に作り米の中の虫を餌とす魚好みて食ふはやなども是にて釣なり鰯を釣も浮を水にまもらせて釣こと昔しはなかりし是に用る竿のそのかみの鰯竿とい異なり利右衛門と云者其竿の作りやうに妙を得たり今ハかしらるして名を其儘に竿利といひて釣具作るものおかしこれが作かまさにならひて續竿の風一變したり釣道具屋東作これを好みて賣はやらかす東作偶釣魚不獲、戲賦示之、汝家六物稱精良、術學詹何餌更香、獨奈魚兒潛不食、風寒水冷到斜陽、又一友人むすめの髪の毛なりとていと長きを十筋ばかりたなご釣に用よとてくれしかば「たらちねの撫にしかひやありとらみのみるより長き髪のみさやか」末なかくたけにあまれる黒かみの結ばむ人の契もそしる又狂歌「大象もつながむは

續き竿

岡釣

堀釣

金魚

色の黒かみをたなご釣にのあたたら物ずき  
昔の續きをいまくり竿などとしてすげ口厚くふとやかにつよきものなりし今ハまくり竿などの名だにあらぬもの多しまくりとい水の灣頭なるべし河邊にまくりと呼ぶところ處々に有り扱つぎ竿のいくつ續く數有ても入子にして二本に收まるがもとの造りやうなり彼わらびや利右衛門竿をやわらかにほそく作るに二本にの收りがたく始めて三本收りに製り出せり〔五元集〕岡釣のうしろ姿や秋の暮〔艶道通鑑〕筏に乗て川狩をうれしかり饅頭に飽て西瓜すきする僻者といへれど風波の難なく安泰なるハ岡釣なり鰯釣ハ東西葛西その場處多し三月より八月迄なり  
また堀釣といふハ池中に諸魚を放ち置て價を定めて釣人につらしむ釣に中らぬ鰯また鰯魚などの尾緒の糸にさるるを見て急に引てひきかくるをひきかけといふ釣にのわらず興もなきわぎなれども此堀本所深川處々にありて好みてゆくものあり〔帝京景物略〕西堤條、萬曆十六年、上謁陵還、幸湖御龍舟、先期水術于下流開水水平、堤内潛繫巨魚、水中處々識之、則奏舉網、紫鱗銀刀澄刺水面、上顏喜、いづくにも猶稚き事あり  
有金魚〔本草綱目〕時珍曰、前古罕知惟、博物志云、出功婆塞江、腦中有金、蓋亦訛傳、〔述異記〕載、晋桓冲遊盧山、見湖中有赤鱗魚、即此也、自宋始有畜者、今則處々人家養玩矣、こゝに渡りさぬる事〔大倭本草〕に昔ハ日本にこれなし元和年中異域より來る今世に飼もの多しといへり金魚に鰯たち鰯たちあり〔綱目〕に金魚有鰯鰯數種、鰯鰯尤難得、獨金鰯耐久、

ぼりふり  
漢土の金魚屋

びいごる  
の壺

鯉たちの金鯉なり〔花鏡〕にみゆ、黄赤色なるひこひに非ず、鯉の〔群芳譜〕に鯉に作れり金鯉のらんちう又丸子など呼ぶもの也〔花鏡〕に魚三尾五尾脊無鱗、而有金管銀管者爲貴、是也〔帝京景物略〕に管者鬣下、而尾上周其身者也、鬣者不及鬣、周其尾者也、おなじものなから聊か異なり又〔廣東新語〕に錦鱗魚、大可二指長寸許、身有横理十二道、鱗如錯錦、具五色、尾長於身如帶、金彩縷々、以盤盂畜之云々、是今りうきんと呼ぶものなるべし凡金魚の尾の形に好悪あり〔同書〕云、以鬣小三尾五尾者爲貴、謂之蝦尾、蝦子、又名跌子、當跌子時、以大蝦蓋之、則多蝦尾、尾又以撒關、象木芙蓉葉者爲貴、謂之芙蓉尾、〔花鏡〕にも此さることも有なるにや金魚の子いでくる時もし鯉をその内に置ば金魚鯉尾に類すといへり養ひかた〔群芳譜〕〔花鏡〕杯に見えたり〔傳家寶〕に近來揚城人、家喜養金魚、遂以文魚、蛋魚等名、固屬雅事、仍日取猛虫幾千萬、以供數魚之食云々、予得友人妙方、只用猪血或鷄鴨血、和麵蒸熟、晒乾研碎、用時浸爛、撒喂魚、使肥壯、屢會試驗、以此代虫、則當活千萬生命、而魚仍可玩、〔花鏡〕に所生小紅蟲飼さいへるも、のにて赤ぼりふりなり

漢土の金魚やの〔帝京景物略〕金魚池金代の魚藻池の舊跡なり池泓然也、居人界、而塘之、柳垂覆之、歲種金魚、以爲業云々、歲穀雨後魚則市、大者歸池也、若沼小者歸盆、若盎若琉璃瓶〔同書〕春場條、琉璃瓶、朱魚、樽側其影小大俄忽、可得旦夕游活耳、歲盛夏游人携餅飲、此投餅餌、暖呷有聲、其大者銜餌、竟去、按金魚古未聞、鼠璞曰、惟杭六和寺池有之、故杜工部詩、沿橋待金鯉、竟日爲遲留、蘇子瞻曰、我識南屏金鯉魚、今亦貴鯉不售鯉、びいごる壺に金魚をいゝ事もこれを倣へるなりまた金鯉に菓

江戸の金魚屋

闘魚

子など投て興する事いつくもおなし

江戸にそのかみ金魚屋もすくなかりしなるべし〔江戸鹿子〕に上野池の端、らんちうやどあるのみなり西鶴が〔置土産〕江戸下黒門より池の端をわゆむにらんちうや市右衛門とてかくれもなき金魚銀魚を賣ものあり生舟七八十も並へて溜水清く云々中にも尺にあまりて鱗のてりたるを金子五兩七兩に買求めてゆく田夫なる男ちいさき手玉のすくひ網に小桶を持へ来るを何ぞとみれば棒ふりむし金魚の餌はみに一日仕事取あつめてやうく錢二十五文に賣〔五元集〕藻の花や金魚にかゝるいやすたれ不角が撰に「ちよろけれと覗きの地こくまのわたり硝子の中金魚肺肝今金魚や處々にあれども本所にわけて多し冬月の池沼に養ひ四月の頃よりたゞき土の池舟にうつして子を産しむ松藻の長きを少しつゝ池舟の内處々置根小石などにてとめおく卵をうみつくれば其藻を他の器にうつし日あたりに出しあたゝむ志からざれば魚ども卵を食ふ魚苗のそり毛の如し雞卵をゆで、黄みをときて與ふや、育ちたるにのみじん子とてぼりふりの子糠の如く細なる虫溝中にあるを采て飼其後常の紅虫を與ふ魚の諸品どもに始のみな黒しやうく色變りて黄になり赤くなる金色の黒き時よりあり闘魚漢土に闘魚の戯あり〔五雜俎九〕吾國の蒲中に好みて魚を闘しむ其色爛爛にしてよく闘ふ纏繞終日尾盡齧み断てどもやます俗に錢片魚と名く盆中に入るに他の諸魚これに認まれざるいなし故にみな人これを悪む而るに蒲人の珍重して戯とすといへりと云もの是なり白の元より形長扁なり處々青黒色にて腹に赤緑の間道あり水上に浮きてかたみに尾を追

辨慶に

て闘ふ〔大倭本草〕にもみえたれどもこのことをいはず  
又小兒小蟹の色赤きを辨慶がにと呼て弄ふ〔閩小紀〕に虎蟻、殷紅班駁、北人異之、俗呼爲關  
公蟹

談義坊

杜父魚

たんぎぼう〔安布良加須〕水の中にも智者の有りよの魚に教化をするや談義坊〔洛陽集〕談  
義房氷の天井張られけり春澄〔人倫訓蒙圖彙〕に談義坊賣あり注云こまかなるを桶に入  
になひあるきたんぎぼうと云なり是を都の幼少なる子供もとめ水鉢又の泉水にはなちなぐ  
さみとする也〔大倭本草〕杜父魚の條に、京師の方言にたんぎ坊主といふ魚あり杜父魚に似  
て其形背高く是亦杜父魚の類なり〔本草啓蒙〕杜父魚京にていしもち彦根にては仙臺にて  
かじか勢州にてたんぎぼう〔物類稱呼〕に諸方の方名を多く載せあり江戶にて土鱒魚といふ物な  
り小野蘭山晩年の説にこの石もちといふ魚の尾圓し杜父魚の〔本草〕に其尾岐とあるにかな  
らず〔寧波府志〕に出たる泥魚これなりといへり今按るに處によりて異同あり其名も杜父魚  
土鱒魚みな一名の轉じたるを聞ゆこの名もまた然なりトウマン江州チンコ石部トチンコ同ドボ  
根ドウボウ備前トホウズ作州など一名の轉じたるなりさればダボハゼダンギボウもおな  
じ名と聞ゆカシイ州カコブツ越前トングウ後トコツ勢州などいふも又おなじ但しかクブツの  
仙カハラコゼ見ゴツボ州といふ名を略しそれに物といふことをそへしにもあるべしダンギ  
ボウもタボトボといふをやがて談義坊主と云たるの謠名なり〔啓蒙〕に此名を勢州方言他國  
の名にいひたるの今の京師に石もちとのみいひてたんぎ坊の名のいはざるにや按に京に

捕魚打鳥  
日の歌

水瓶に魚  
と入れ置  
くこと

草木

草合

てだんぎ坊と云の凡僧經論もみずには咄すを水に放すと云秀句にて談義坊と云ふとぞ  
〔七部集〕拙候かくふつや腹をならへて降霞杜父魚の河豚の大きにて水上に浮ぶ越の川にの  
みある魚也

〔雜字通考〕捕魚打鳥吉日歌、雨水以還收執危、日々網罟有贏餘、戊庚二辰魚會聚、己丁兩巳宜  
西瀝、己亥壬子禽斂翼、戊子庚辛鴻雁垂、日逢轉殺船載滿、九空荒蕪徒羨吁、また開池塘養魚  
吉日歌、春兎夏馬良、秋雞冬鼠藏、有人會得此、糶耗不來塘、  
水瓶の内に魚を入置の、水脚出來ずといへり〔物類相感志〕に水缸内養魚三兩個則活不生脚  
と見えたり

- 草木 ○草合 すまひ草 馬唐穂 おがら 松葉 かづら草 欵冬皮 草葉の籬 茅
- 花 山茶花くらべ 白つばき 草木のはやりもの 菊 きせ綿 菊合 ヨガ子目貫
- 萩寺 並頭蓮 橋下の菖蒲 稗まき 花の塔事始 齋を灯檠に懸 桃木 八重つ
- ひじ ひよんの木 なんぞやもんぞや 正月松かざり 松葉の兵 藤原吉野 桃栗
- 三年

- 花を瓶にさす 活花 池坊 廻り花 投入 菜籠 薄ばた うけ筒 竹筒 ウス板
- 立花 後世生花師

宗懐〔荆楚歲時記〕曰、籠探百藥、謂百草以蠲除毒氣、故世有鬪草之戲、といへり〔和名抄〕雜藝  
部また此記を引て五月五日、有鬪百草之戲、鬪草此鬪云と出たり〔七修類稿〕に風俗鬪百草之

戲、獨盛於吳、故荆楚記、有端午四民鬪百草之言、未知其始也、昨讀劉禹錫詩曰、若共吳王鬪百草、不如應是欠西施、則知起于吳王與西施也、おもふに禹錫が詩、唯その國の風俗をもて作れるまでにて必しも吳王西施が故事あるにあらじ、世諺問答に五月五日をば藥日といひて一切の藥をば此日取なり云々鬪草の戲も藥獵より起るにやとある、荆楚歲時記の意なり、帝京景物略、水盡頭條、雜花水藻、山僧園叟、不能名之草至、不可族客、乃鬪以花采々百步耳、互出半不同者云々、かやうに草花多き處にまたおのづからこの戲あり、天祿識餘、唐人孩兒詩、鬪草當春徑、爭球出晚田、兒輩の草合するさま(やすら花の畫卷)に見えたり、醒睡笑、兒の遊ひに草合あり一方より藜藿とて出さる、侍従わきからせうしなる顔にていや是のは草となほしたり兒のは聞にくからず侍従どの、へめづらし過たどありかく一種ツ、名をいひて出すこと、見ゆ、琵琶記、牛府の仕女院子等が園中に遊ぶ條、老母云、鬪草到好、院子云、不好、香徑、裡攀殘柳、眼離關畔、折損花容、又無巧藝、動王公柱費工夫、何用驚起嬌鶯語、燕打開浪蝶狂峰云々

すまひ草

又すまふ取草にて童ども勝負を争ふ戲あり、金葉集、連歌にすまひ草のおほかりけるをひきすてさせけるをみて、不知「ひくにのよわきすまひ草哉」とる手にいはかなくうつる花なれと、菴玖波集に「蘆もてかへる難波つのみみだれ藻のすまひ草にぞにたりける源頼朝」守武千句に「ちからをいだすはしあひのかけ、すまふをば草の露より猶とりて、まづ一ばんに秋風ぞふく、これら莖をいふなるべし又、續山井、相撲草も野みのすくねのたぐひかな不老すま

馬唐穂相撲

撲かから相

ひ草ほりとする手もやまは返し友靜吹風に芝居かへしやすまひ草直昌、雅筵醉狂集に「すまひ草野みとむかしに聞名をもおちてわらはや庭の内と注に莖を俗にすまひ草と云」物類稱呼に莖の畿内及び近江加賀能登又東海道節總てすまふ取草と云ふ江戸にてすみれといふ西國にてどの、馬と云莖のかたはらに鉤の形あり兩花交へひきて小兒の戲とす又東武にてすまふと草と云別種あり江戸の鄙にてはぐさと呼草の穂に出たるを云尾州にてやつまたと云是也貞砂が足を空なるすまふ取草といひし附句合もむかし語となりぬといへり、本草啓蒙「スミレのカギヒキグサ仙アゴカキバナ後越カキバナ伊豫」本草、温草類なる紫花地丁なり花の春早く開く紫も白もあり葉も處によりて形異なる長さも圓きも有り、莖菜の類なりといへり江戸にて相撲と草と呼もの、詩經名物辨解に小雅鹿鳴朱註、本草名、莖如、釵股、葉如、竹葉、生、鄉名ヒシハ云々此物野外間ありヲヒジハ、メヒジハの二種ありといへり此説誤れり朱傳、陸璣が「草木疏」の文に隨ふこれの地まばらといふものなりその根節ありて葉も竹に似て蔓延するものなりさて其ヒシハといふもの雄雌あり叢生するものにて荊れ共く生する故肥後にて小ざらころしといふ漢名の馬唐なりその穂四ツ五ツ又になるをのみとりて倒に席上に置二ツよせて席を敲けば自ら跳りてすまふ取さまあり組合せて席をうてば一ツの倒るゝなりヒジハの名義おほつかなければ早芝早地に生て枯れざるなりにや、又、和漢三才圖會に角觥草、秋起莖頂作、穗云々、小兒取莖、穂結如繩、而用二箇、一挿其、兩人持莖相引、而切方爲輸、以戲名、力草、もといかやうにまたるなり又稻草或の燈草など束ね括り三寸ばかりに截て立れば下廣がりて立

松葉きり

つら草

ひな草

なり是も前の如く二ツよせて相撲とらすことなほ又松の葉の股を互に引かけて切たるを負とするを松葉きりといふ此等のわざの異なるれども鬪草の類なり又松葉の兵あり後に出つ  
 「萬葉集十一」振別之髪乎短彌青草髪爾多久濫妹乎師曾於母布「略解」に十歳計りにもなりて  
 漸髪を長からまむる頃にも猶ふりわけがみと云べしさてわか草の髪のごときを其髪にた  
 ぐりそへつかぬるなりなかの女兒のかつら草と名つけてなよかに細く長き草の叢に生  
 るを採てさるわざするなり云々いへり今女兒のもてあそぶひなくさとしてあるを人のかし  
 らのやうに括りて其末を髪をやうに結ぶ事いすれどおのが髪にそへてかつらとすること  
 なし「萬葉」の歌もわか草をもてあそびて髪たがぬる學びするのおのが髪いまだ短かくて  
 つかねぬる故ならんとの意なるべし今ひなくさといふ龍常草なりタツノヒゲ又ノスツキ  
 ともいふ路傍に多く生ず葉の長さ四五寸一根數百葉叢生す他の草中に雜り生する葉長く  
 して尺許に至る鸞觀草をカモジ草といへばもと是を用ひしなるべし「伊呂志居」今の世のさ  
 かしく友達としか遊ひにもかつら草つみ揃へ當世の島田のかうゆふものじや妾風のさうし  
 たものこちや茶や風もいやらしい云々「六玉川二篇」雖かたに最う手のきれる枯野原また小  
 兒商陸また羊蹄の葉を取莖を心とし葉を衣として幾枚も重ね着すれば莖の出たる處人の頭  
 のごとし細き竹串を腰のあたりにさしてとむれば葉はくれず離人形となるその竹串を長く  
 すれば太刀帯の形に似たり又款冬などの葉もよし款冬莖の皮をかもじに學ぶことひな草の  
 如し「類柑子」寐ぬいならぬかお袋の側其角かもじぞと揃へあげたる露の皮專吟と是なり

款冬皮の  
かもし

芽花なはなはな  
へが肥る  
と云ふと

草結

芽花をぬなかの童部のつみて食ふ古への是をくへば肥とて大人もくひたり「萬葉八」紀の  
 女郎が家持と贈答に「わけがためわかてもすまに春のくにぬけるつばなをめして肥ませ」我  
 きみにわけのこふらし賜ひたるつばなをくへといやせにやす「本草」にも益小兒といへり  
 餘い兒こ戲あそ條じょう  
 に出たり「五元集」やせたらうてつばなも食はぬ花盛と付句あり又草結クサムス「同集十二」妹門去過  
 不得而草結風吹解勿又將願カネテこは逢ふまでのあるしに結び置なりをりのことし今も山野  
 を過るにすることなり

松崎堯臣が「窓のすさみ」篠山侯松平紀伊守京の司たりし時仙洞のことにめでさせ給ふ桐壺とい  
 ふ牡丹を年々切て賜しに或時守護の人來て申さるゝの今年の桐壺を根として下し賜はるべ  
 きよし御内意なり近日傳奏の公卿來て院宣をつたへらるべし先内意を申よし有ければ侯の  
 云いともかしこきみことのに候さるながらあらはれて仰下されての申かたし幸に各の内  
 意の間申すべし桐壺の只一本御園に咲ゆるに天下の名物なりそれを分ち賜りての種類あつ  
 て名を滅し侍り且某かつて牡丹を好み侍らす苑に少々植おきたるも皆なみくの花にて名  
 花の持侍らす候かたく此由申入あれかし下し賜らさるやうに深く頼入よし有しかば官使も  
 感じて歸られしとぞ

元和寛永のころ山茶の花を翫ぶと大にはやり花をくらべて奇を争へり「安布良加須」に「秘  
 藏の花の枝をこそをれくらべんとあらそふ友のたま椿また「發句帳」に「年號をかうけん元  
 和つばさかな意林庵か「清水物語」寛永十五年此頃つばさの花のはやるやうに付ても聞も及ばぬ

山茶花さんぢあな  
くらべ

白つばき

見事なる花あまたあなたこなたより出たり人好むもの有てはやり候へ、おもしろきものありなんかし「櫻草」つばき鳥「見るにさへ其名いひも盡されず」ト養狂歌集「ある人椿の花を垣に作りいろくあつめうる其中の椿の名を題にして歌よめと有ければ十種の名を入れて「せんよまんよ待し志もくになりひらかすげなさくらんにくの開山」色音論に當時の流行ものをいふ處いろくはやる其中に當代人のすかれし鶉を集めかけならべつばきをあまたうゑならべどりのなく聲はなの色こゑと色との争ひに心をよせぬ人もなし此草子「色音論」鶉により「花壇地錦抄」元祿七年江戸染井の花戸か著はせる書なり椿の種類も多く擧て二百餘種あれどこの狂歌によめる名い見えす古今名も多くかはれるにや「尤草子」に大切なる物白茶ふぞう酒早咲の椿云々「大倭本草」に日本紀天武天皇三年三月吉野人字閑直弓貢 白海石榴むかしの本邦に紅の草花のみありて白つばきも稀なり寛永の初より漸つばきの數多く出來しにや鳥丸光廣卿の「百椿の圖序」に此ころ世にもてはやし品多くいできたる事を書りど有り白つばき今い多くわれ共漢土にも稀なりしものと見えて「汝南圃史」に曾南豊以白山茶、寄吳仲庶 詩云々、瓊花散漫情終蕩、玉蘂蕭條跡更塵、注云、初唯此花與楊州后土廟瓊花、天下一枝、近年瓊花可接、遂散漫而此花爲獨出也、今人家園圃所植多單葉深紅、花中有黃心、樹高丈餘、結子可復出、即寶珠茶已自難得、所云白色者未見也、といへり貴重知べしすべて物の人の好むによりて種々珍らしき品出來るものなり寛政の末のころまんりやう山たちばな一時にもてはやしたるに實の赤きものなるに白も黄もでき葉の縹子鳥頭斑入な

草木ばや

朝がほ

植木鉢

菊

綿のきせ

ささましく高價にてありき其ころ何によらず草木いさ葉なるものはやり其後文化中江戸より牽牛花はやりて京難波に及べり 安永七八年さくら草形のめづらしきがはやりて權家の贈りものさす數百種花を植作る事好み櫻草を多く植作り其花を入たるものとみしに小介を集め入る箱のやうにこまかにあきりたる箱を多く重て内外とも黒く漆をぬり其内にかんてんをさきて流し入たる格子の間に櫻草の花一ツ、かんてんにさし各名を書たる札あり是を見物に行ものありつてをさめて其箱をかり見るものもありしがさまで行かれずこ亭和のころなり其後朝がほを多く作りさましくの花出來しかばこの度ハ六枚折の小屏風を覆篋にて作り細き背竹處々節ある處にて竹の花生のやうに目を切て節毎に水を貯へ朝がほの莖の先葉一寸ちぎりたるさ花一りんささ花生の口こまに挿みこれを件の屏風にかけならべて屏風ハたいまるいやうに縁を厚く作るなり是も人に借して見せたりこの屏風ハあまた有き文化五六年の事なりし一させ谷氏大坂に在番したる頃ハ彼地へ多く牽牛子を送りたり

文政に至りてハ石菖びろう正何葉紫色なるをむるものあり殊に近ごろハ植木鉢美を盡し尾張燒もさましく手をこめたるあり 松葉らんにも種々形狀の變りたるあり高價なるハ鉢白金に至れり

菊の歌「萬葉集」にハ一首も見えずそれより後桓武天皇御製を「類聚國史七十五卷」に載られて云、延暦十六年十月癸亥、曲安酒酣、皇帝歌曰、己乃己呂乃志具禮乃阿米爾菊乃波奈知利會之奴倍岐阿多良蘇乃香乎、賜五位已上衣被、是其始なるべし菊のきせ綿も香をめぐるより起れり「源氏物語」九月になりて九日わたおほひたるさくを御覽じて「後撰集」に九月八日伊勢が家の菊にわたをきせに遣したりければ又のあしたとどてかへすとて伊勢「數まらぬ君がよはひをのはひつゝ名たゝるやとの露とならむ返し藤原雅正「露だにも名たゝる宿の菊ならば花のあるじや幾よなるらむ」伊勢の家集「新勅撰集」に九月九日從一位倫子菊のわた

をたまひて老のこひ捨よと侍ければ〔紫式部〕さく露わかゆはかりに袖ふれて花のあるし  
 にもちよゆつらん〔紫式部日記〕九日きくのわたを兵衛のおもきもてきてこれ殿のうへのさこれの寛弘五年  
 の事なり〔枕雙紙〕に九月九日のあかつきより雨すこしふりて菊の露もこちたくそほちねは  
 ひたる綿なぞもいたくぬれうつしの香ももてはやされたるつとめていやみたれど猶くもり  
 てやもすればふりおちぬべく云々〔忠見集〕九月九日きくに綿をかつけたる所「萬代も人  
 のわかゆる菊のうへにまゆをひろげて露をまつかな〔散木集〕九月九日菊してかはなでよと  
 人の申ければ「ちるごとくまほめるかは花なればなづとも菊のゑるしあらめや〔按るにこの歌  
 よめり〔漢書〕に職玉を引て杜若を良吉花とも云い〔堀川後度百首〕忠房「いくへともいざあらさくを  
 へり良さうらうかしきといふにや何にもいふなるべし」

き盛の花咲にけり「時過てたれか」今もさせわたのそれかと匂ふ露のあら菊〔此の殘菊句とい  
 鳥餘情〕に本朝に猶黒月とさる事になれり九月九日の宴も延喜の御黒月にあたるに  
 よりて十月に是を行はれて殘菊宴と名付られたり後江相公其文を撰たり文粹にみゆ〔世諺問答〕に綿を着する  
 事い一つの頃よりとも見え侍らずたゞ菊をもてあそぶの餘りに寒霜を防がむとの志と覺え  
 侍る〔異本四季物語〕菊綿つくる事にくら司ゆうとくまれる事なれどさやらの事今のまれる  
 人もなければかた計有べし〔御湯殿記〕云九日夜に入て御殿の南階に菊花多く植その菊に赤  
 白黄の染綿を丸菊花に作りて枝々に付るなり今日葵を菊にとり替らるゝとも云り〔日次紀  
 事〕曰、菊綿傳言、今日唱門師會大黒、參禁裏種菊花於常御殿之前庭、明朝官女等、取綿使蒙  
 階下菊花、是謂菊綿、又稱衣綿也、傳言、菊綿掃小兒衣領之内、無疾病云、故節後頒賜之〔綿きせ  
 給ふ時

うちはらふにも千世いへぬ〔隣女語言〕に溪雲問答に通茂公の歌を出して「咲さくひまたむらゝ  
 べし歌を唱へ給ふさいへり」

の籬をも花につくろふけふのさせ綿とあそばせる花とみせむとてのことにやといへりこ  
 れ〔新撰六帖〕に信實〔垣根なるさく〕とあるより花の咲ざる程綿を花とみせむとてのこのや  
 うに思ひ給ふなるべし通茂公〔定基卿の尊父にて有職の人におはしませば猶古昔などに見  
 きたりめ給ふことあるべし今按るに信實の歌も花とみせむとて綿を着るにあらざ香を移  
 す爲なれば半開の花にもするなるべし通茂公の歌も亦さかり何の不審かあらむ〔世諺問答〕  
 に霜をさくる爲ならむとあるいにかもし霜をよけんとならば花のうへのみにていかな  
 ふまし又古人老をわかゆる撫ものともてあつかひしも戯れごとなりこれ〔風俗通〕に南陽郡  
 鄧縣に有甘谷、水甘美、云、其山上有大菊落水、從山下流得其滋液、谷中有三千餘家、不復  
 穿井飲此水、上壽百二三十、其中年亦七八十、ゆゑ長壽を得といひ又魏文帝興鐘繇書に九月  
 九日、九爲陽數、而日月並應、俗宜其名、以爲宜於長久、故以燕享高會云々、屈平悲再々之將  
 老、思食秋菊之落英、輔體延年莫斯之貴、なぞあるによる事にて重九を長久の義にとりこれ  
 らのわざもあるべけれど〔散木集〕のごとく菊花を用ひばよかるべきを綿にうつむひ迂遠な  
 るべしこれによりてさせ綿いもと香をもてはやせしより起れりと思ひるゝ後世染わたを  
 用るゝ唯華飾のみなり又年の氣候によりて菊の花いまださかざる時などに綿を置いて花にか  
 へ此日の節物をとゝのふゝ後世の義なり秋菊落英の説〔菊譜後序〕又あまた論じて以落訓  
 始をよしとす南陽菊潭の事い古人の論なけれども菊落水とあるこの落字いかにぞや〔楚辭〕

の疑いしけれども猶據あり此故事の何をもて證とせむ妄誕の事の永世に傳へ行ひるゝ是のみにあらず

大菊

白石が洞巖に答る書、大菊はやり候由當所亦同事に候去々年歟加賀の小瀬復庵の二十韻古風を兩度和し候詩候べく候北地も同風と見え候水戸安積よりも此程菊の作り覺え候など自讃めされ候て御申越候などありか、れば當時國中ゆすりて此菊を翫びしなり

金目貫

金目貫といふ菊を今省きてきんめといふ〔續山井〕こがねさくハ霜の劔の目貫かな倫加〔後撰夷曲集〕淨華院にて御方葉までよく咲みだれたる作りやう金目貫の菊一文字とあれば前の發句も金目貫の字をわけて作れる句とみゆこがねとばかりハ黄菊をすべていふなり

菊合

享保のころ菊合の會はやりたり〔雅筵醉狂集〕に近世この花はやりて新花を作り出し菊合の會をしける其會はほくの丸山にて催すなり「我やどの東の籬菊とりてはるかにみやる露の丸山〔艶道通鑑〕に入重九重のさく合もよりにまかせ好類につれて東山北野につとひて輪をきそひ花をあらそふ鼻元きて席に尻のつかぬハ今日の花車の魁け人と見え頭をかたふけて縁にたはこのむハ跡扁の一の筆と推せらるかの舞姫が管咲に針咲つけて裳まで忍び通ひ路わけほのやこれら菊の名なり云々さくら牡丹つばき菊色々の手入して枝をため根をゆがめて狂ひ咲をたのしむハ古人のかたのものをとのそしりに落入べしわけて菊をろへの席をみるに一本々々枝たをやかにもせず葩一ツ切生にしたるハ美女の獄門みる心地し侍るとあれば近時の朝貌會などのことし〔東京夢華錄〕九月重陽都下賞菊有數云々酒家皆以菊花縛成洞戸云

作り菊

々どありこれハ大菊にて作るなるべし江戸巢鴨の花戸年毎に菊を作る花壇七八間ばかりにして家ことに作る中菊にてありしが文化の初大作りとして一本の菊にて鳥獸山水種々物を作り後にハ百姓商人までも作りて文化十年の頃の處々に是を學びて作れり遊觀の人羣集したりしが其後漸く衰へて止たり今ハもこの花壇作りのみなり彼種々の作り物ハ費ハる程利分なしなり

梅やしき

梅やしき〔草廬雜談下〕梅譜云、去都城二十里、有臥梅、偃蹇十餘丈、相傳唐物也、謂之梅龍、好事者載酒遊之、いまの梅やしきとすこしもちがはずたましく異方とひとしきハあやしきことなり〔簪雲樓雜說〕故蜀別苑、在成都西南十五六里、梅至多有兩大樹、天嬌若龍、相傳謂之梅龍、陸放翁在蜀時歲嘗訪之、曾爲賦詩云、兩龍臥穩不飛去、鱗爪脫落生莓苔、蓋狀其偃蹇如此、

萩寺

萩花〔撈海一得〕明和八年撰なり近ごろ押上村の龍源寺龍泉寺町の正燈寺などに萩を多く種花さかりにハ士女群遊すといへりこれによりて龍源寺ハその名をいはず萩寺と呼で今に至れり是も見物の多けれども花を作る費用の助けにもならねば衰へて人にみすること止しが此頃のまた人を入れて見せしむ

千葉蓮

春花落瓣、秋花落葉、蓋氣候使然也と〔筠廊偶筆〕などにいへれどもさもあらず春も落葉の花ハつばきなどあり秋も落花するものハはぎの花などあり  
千葉蓮〔輜軒小錄〕江州益須郡田中村の土豪田中氏園中に池ありめづらしき蓮をうゑ傳ふ大白蓮にてわたり四五寸もあり一莖の上に九の花房あり小きものハ七ツ或ハ三あり花落るこ





林檎に摸

花の塔

こゝにてせぬことなれど林檎に摸様をつくる戯あり〔汝南圃史〕云、蘇州志云、好事者以枝頭  
 向陽未熟時、剪紙爲花鳥貼其上、待紅熟乃去紙、則花紋燿燿入盤、釘可愛と見えたり、  
 花の塔〔江戸總鹿子〕に貞享四年二月八日事、初江府中にて籠つる也十二月八日〔惣鹿子新増大全〕寛延四年  
 江戸中町々の家毎に籠を竿にかけて高く屋上に建置いかなる故とも知がたし、或書に九字の  
 形を表して魔除なりといふ附會の説なるべし、殊更今日を事始と云ひ彌心得がたし、十二月八  
 日を始として今日を納といひ、可ならんか曆にも十二月に正月事始よしと記せし日多し、然  
 ればこの日を事納とせむ事勿論なるべきにや、〔日次紀事〕に十二月十三日、正月萬事之經營始修  
 之俗是謂事始日、正月所用之物亦多買之とありて、事納といふのなし、〔誰身の上〕四季短歌  
 上畧綱引わこの太郎月二郎もよれる寶引のせちふるまひに事始正月にいへり〔誰袖海〕江戸の月  
 次をいふ處、二月八日事始師走八日事納といふ此日、棹先イカキに籍をつけて出す京の卯月八日のこ  
 とし、十三日の〔惣鹿子〕にす、〔拂古札納む〕〔日次紀事〕に、此日を事始と有り、煤はらひの事始  
 とも事納ともいひ、いはなむさればいづれにてもよかるべし、八日をいふの誤なり、籠を出す  
 事京師の四月江戸の二月なるも疑ひしより、按るに四月八日十二月八日ともに此日の浴佛  
 の日にして十二月の薦八とて禪家に法事あり、籠を出す事の灌佛會によりて也、〔鹽尻〕云、四月  
 八日熱田社灌佛會をなす花の塔と稱す、京師の俗四月八日つゝ及び新花を竿の先に結付て  
 九輪のことくし、家々に立て花の塔といふ、熱田の花の塔、剪綵花を多く造る昔の生花を以て塔  
 なんぞ作りしよりの名とみえたりといへり、この九輪のことく造るに、籠などを用ひ、それに

花の塔の  
事始

齋と行燈  
に吊す

日蔭の桃  
木

八重躑躅

花をさしゝなるべし、いつの程にか其かたばかりに籠のみ出すことゝなれりしが、されば二月  
 八日の誤なること知べし、これの二月十五日涅槃會あるによりてまかひたる事と見ゆ、又四月  
 の花あれども十二月の花少き時なれば籠のみ出し、歎されど十二月八日の事の京師にいな  
 かりしにや知らず、〔油加須〕秘藏の花の枝をこそ折れ、我一と卯月八日の手向して、西河祐信  
 が繪に四月八日竿に花を結付て出したる圖あり、今誕生の佛像に左右に躑躅花を九輪のこと  
 く立るゝ花の塔の遺風なり、  
 又此日なづなの穂を取て行燈に吊し、燈火に虫の入りぬ爲とかや、〔物類相感志〕齋花置燈繁  
 上飛蛾不投と有り、然れども是の三月三日にして月日異なり、又〔物理小識卷六〕高灘齋品、正  
 月有窩螺齋、即地英菜取齋、菜花莖、作挑燈杖、可辟虫蛾、謂之護生草、清明日、日未出時取之、  
 齋有、小大、其莖有毛者、蘇冥皆以冬至生苗、とも見え、たれば四月八日に取るゝ誤なり、  
 〔枕雙紙〕るせものゝ家のうしろあらばたけなぞいふものゝ土もうるはしうなほからぬにも  
 ゝの木わかだちていとしもとかちにさしいでかたつかたの青くいまた枝のこくつやゝか  
 にすはらのやうに見えたる桃木なぞいむかしより此やうの處に植たるにや、されば日蔭の桃  
 木といふ諺なともあり、  
 古へハ草木なぞにハ殊に珍花もすくなかりしなるべし、奈良の八重櫻の世にめづらかなりし  
 類多かり、〔沙石集〕に尾州に山田次郎といひし、人所領内の山寺に八重つゝ有けるをほしく  
 思ひてありしに、彼僧大なるとがありてまどふべきこと有けるに、藤兵衛尉といふ檢斷に仰付

ひよんの木

なんじやいんじや

て此科料に七匹四丈の絹をや參らす八重つゝしを進ると下知しけるその僧七匹四丈をこ  
 を參らせめ此つゝしをもて心をも慰め候へばと申けるを主の心を知る故それにてハ猶御不  
 審殘るべし唯つゝしをまいらせ給へといひければちからなくてはりて參らす檢斷の職ハ半  
 分の得分也その處にねろし枝一ツとるべしといふに絹を參らすべしとをしみけれ共れして  
 取てけり共にやさしくこそ此山田の某ハ承久の亂に打死せしコトと有り「大和本艸」躑躅の條に、昔しハ品類少なか  
 りしが近ごろあまた出來れりといへり八重躑躅ハ淀川つゝしなるべし「花林抄」と云雙子  
 染井の花戸が書たる物五冊ありつゝしハの類を多く寫生したる中八重なるものあまた見え  
 り今めづらかならぬ物このたぐひ多かるべし正三道人が「因果物語」無住和尚の住し尾州  
 長母寺にハ八重つゝしありしを或人一もとぬすみたる物語りあり此ころもいまだめづらし  
 かりしにや  
 蚊ヒツシキ子樹この木に虫の巢あり「大和本艸」に俗に猿瓢といふとあり童これを探て穴をあけて吹  
 は笛のごとくひやうくと鳴る此木をひよんと呼もこれ故なりひよんハ瓢なり「續山井」夕  
 貌に見とるゝや身もうかりひよん宗房芭蕉桃青か若き時の句なりうかりひよんといふ今も云  
 ふことなからひよんの字ふとしていたもひよらず此句夕がはハ瓢なれば其花を詠る身ハ瓢  
 のことしとなり瓢ハ輕きものにてよく水に浮ゆるにうかりひよんハ浮瓢なり浮れものを  
 瓢ヒヤウケン輕といふも同じ  
 ナンジャモンジャ「俳諧葛藤」下總かう崎の岸に舟をよせなんじやもんじやの木を尋ねて

松捕の歌

正月の松  
かさり

松竹梅

「何若葉自問自答の郭公秀徳なんじやもんじやと云ものに二種あり此にいふハ樟木なり又同  
 國に太一餘糧ある處ありこれをもんじやもんじやと云ふとなり  
 松「紫一本」斑女塚の條、不忍池の端榊原式部大輔下やしきの内斑女が衣掛松と云しハ近頃  
 まで此所に有しなりと聞く一とせ江戸にて踊はやりし折松揃の小歌に目黒不動の腰かけ松  
 三田に渡邊源五松さてハ斑女が衣かけ松道灌殿の頭巾松一本松や六本松白銀町に八町つゝ  
 く松原越などハ諷しなり源吾が松ハ保科筑前守三田のやしきに有し一とせ大火事にて焼し  
 とさく

正月の松かさりむかしハ久しく立置たり寛文二年寅正月六日町觸に松かさり明七日朝取可  
 申事其後もなほやまざりしと見えて寛文十年戌正月又おなじ法度の觸ありて來年よりの  
 相觸申間敷候間毎年左様相心得可申候と見えたり昔日の人情今より見れば雅なきやうな  
 れど久習一旦にハうせがたきこと多し武家にハ久しく立おくもあれど大かたハ門飾を取て  
 其跡に松の木梢を折て挿ねくこの故なり明暦元年乙未十二月廿二日正月の松かさり十五日  
 前ハ此方より一左右次第取可申事と見ゆ上總姊かささきの俗正月門戸に榊椎などを立て松  
 を用ひず又三日松をたき木とせず姊かささき明神雄神遠遊して歸らずまついつらきを怨み給  
 ひしより松を神の忌せ給ふとてなむ  
 ことぶきいはふめでたき器物などに松竹梅をもやうとす漢土にハかゝる事大かた奇數を用  
 ることなければ是ハ本邦の俗と見えたり朝鮮の役に彼地より取來れる書とて「日本考略」ど

云ものあり明人薛俊が撰なるを朝鮮にても刊行せしなり其内日本人の文詞略に四友亭の詩あり四友亭名萬古香、清風會遞到還方、我來不見亭中主、松竹青青梅自黃、此詩おのづから松竹梅をいへり

松葉の兵

〔類柑子〕に童の時の遊戯を思ひ出られて松の葉して人をつくり松の葉の弓同じ鎗長刀それぞとみゆるをとりもたせて左右にわけ息を吹かけて争ひするに人間の動靜起臥おのづからにして勝負決然たりこれ無心の松葉ながら人の息してはたらかすれば有心有情のものとみるに折ふし庭の松風吹落て松の葉の兵さんくく打たふれて忽風前の塵となるを浦風なりけり高松の朝嵐とそうたひ侍るといへり松の葉の人形今の疊のぬをもて作るやうとおなじとみゆ松毬を口口といふ是をむかしの手遊の鳥また人形なごに作れり松葉のくさりの翫物の處にいへり

藤原吉野

〔續日本後紀〕承和十三年八月庚午朔辛巳、散位正三位藤原期臣吉野薨、云々、寄住之處、好常種樹、昔王徽之寄居空宅、便令種竹、人問其故、徽之指竹曰、何可一日無君邪、可謂千古猶有隣矣、傳文約にして委しくいあられす唯樹木を好れし諸木なるべし竹を愛し、を似たりともいへがたし

花を瓶にさす事

花を瓶にさす事佛事のみにもあらず〔古今集〕に染殿の後の御前に花がめに櫻の花をさし給へるをみて云々〔枕雙紙〕おもしろくさきたるさくらをながく折ておほきなる花がめにさしたるこそおかしけれ又家といふ條、かうらんのもとにあをきかめの大なるすゑてさく

活花

らのいみしくねもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば云々〔後撰集〕貫之「久しかれわたになるなど櫻花かめにさせれとうつろひにけり佛に供するいもとよりなり〔同集〕折つればたぶさにけがるたてながら三世のはどけに花たてまつる〔和訓栞〕にされば花立さの念佛の立花と見えたり今立花と音に呼ばるべし

削り花

又削り花とて作り花をさす事有り〔古今集物名〕めとにけつりばな云々〔六卷〕に〔榮華物語〕石御まへのなでしこを人のをりてもて參たるを宮の御まへの御すゝりかめにさし給へるを〔大貳三位集〕すりかめにさふの根をきりていれたりしにおひ出たりしまいらすとて「誰かみん世にすみのえのもろ人のすゞりのかめにさすあやめをば返し門の君「住のえのすゞりのかめのあやめぐさ千代のためしにきてこそい見ぬ〔源氏繪卷〕源氏より藤壺の方へ紅葉を贈りたる處、かめにさしてひさしの柱のもとにおしやらせ給ひつ其外家つとに花の枝を手折ことなど多く有り花の必水に活しなるべし〔明月記〕元仁二年乙酉三月十二日夕暮下被參安喜門院云々花瓶立色々花〔麗玖波集廿〕平貞時朝臣前の瓶子に花一枝を立たりけるを發句すべきよし申侍ければ六條内大臣「手折てい水こそ花のいのちなれ

立花の法

古の花を立るに法式いなりしなり大かた東山殿の頭前後より種々のことをば云出けむ〔京二羽重織留〕に珠光の南都稱名寺の僧なりしが茶道俊逸にして曾て義政公にまみえ奉り還俗して京師六條に茶亭を構へ住居す義政公時々入御し給ふ珠光後に瓶花の事を相阿彌に學べりと云り洛陽六角堂の池坊專順の此伎をよくし連歌を好みて〔新撰筑波集〕にも入たり

池坊

打つゝきて其法を傳へ今に立花を業とす（山州名勝志）に六角堂昔の寺僧あり僧正などにも任せられけるにや今其義絶て執行池坊守之云々（二水記）云、大永五年三月六日、參青蓮院門跡、今日花御會也、池坊六角堂執行花之上手也祇候了、十瓶有之とみゆ此池坊の專順が後にて專慈なるべし花會といふこと其頃より專行のれたり（日次紀事）洛六角堂頂法寺云々、近世僧專光得數品花枝、於一瓶中而摸山水之景象、倭俗謂之立花、至今代々玩之、僧俗爲此徒弟者多、例年七月七日、有立花數瓶砂物等、人爭見之、謂之池坊立花、是亦供二星之意也、また云ふ昨六日晚、東西本願寺末派并家禮、以花數種作册狀、又造槽形、中建草花數品獻門主、並置於堂上、今日諸人窺見之、其かみより此を專業とするの池坊の外に聞えたるもなし（仙傳抄）の立花の古法を去るし、物にて□□に谷川流といふが有り然らば古くも異流ありとみゆそれらも池坊につたへて集成したるにや

〔備前老人物語〕ある人の云しに常にいらざる物も久しくたしなみ持ぬれば不思議に用に立て名譽となること侍りいかなる時にかありけん池の坊に花を所望する人折節花なかりければ薪の中より苔生たる木を見出し花瓶に取をへて出したりけり池の坊みて珍しき作分やと云て其木を有りの儘に花瓶に立て鼻紙の中より蕙紅葉を取出し面白く引まどひて立退ければ一座の人々目を驚し暫く堪さりけり池坊いひけるの三十年ばかり心かけたしなみしに此時に當りて本意を達しけりと悦びしとぞ

廻りはな（童蒙先習第二）おもしろき物すきたる道まゝり花云々（應筑波集）廻りはなにさす

廻り花

投入

菜籠

薄はた

や名に負うずさくら定ま貞徳（獨吟百韻）ものつけてならぬ座敷の床疊まゝり花をは小勢にてさせ

今俗に投入といふの茶席の花をいふとのみおもふの非也（仙傳抄）になげ入といふの船などにいけたる花のとなりとあり船の花いけり釣ものなれば壁にかけたるもなすらへて投入といふなるべし又今人投入花をみてよく入たりとほむる是も（同書）に花をいふといふのさいらうのやうなるものに花をいけたるをいふ野山にある体にいる、なりと有りさいらふの菜籠なるべし籠花生なり漢土にて古への銅器のみ花いけに用ゐたりとみえて張謙徳（餅花譜）云、古無瓷瓶皆以銅爲之、至唐始尙窯器又云、貯花先須擇餅、春冬用銅、夏秋用瓷、因于時也、こゝにこれらのわいためなしむかし多くうすはたを用る是かの立花也（應筑波集）付合句「うすはたにもる春の谷水一罍（獨吟百韻）寛文元々」元々さりとて舟かきらひてねか□□花いけいたゞ筒ようすはた（續山井）〔後撰曲集〕目にいみてくはれぬものうすはたにつきたてゝある餅つゝじかな昔のうすはたの今もある佛具の花瓶なり花の大小多少の居所によるへきなり（花鏡）に、大抵書齋清供、宜矮小爲佳、喜銅瓶、必花觚銅罍云々、愛窯器、必紙槌鷄頭云々之類、方不與家堂香火前五事、件内瓶同至若廳堂大夏所、用大瓶不在此例也、云々いへるが如し又これをみれば漢土に佛具のうすはたなどを用ぬこと知べしさもあるべきなり又云、吁寒士處此名花、猶可假乞古器從何而致、若有宣徳成化或龍泉窯者、二便可脫俗矣、といへるの恐らくの偽款のもの多ければそれをいふにや宣徳成化の陶器のかしこに

竹筒うけ筒

てもいと貴重のものなり〔考槃餘事〕に堂供、須高瓶大枝、方快、人意、若山齋充玩、瓶宜短小、花宜瘦巧、最忌繁雜如縛、又忌花瘦于瓶云々、又云、養蘭蕙須用瓢、牡丹則用蒲槌瓶、方稱瓶内須打錫套管、収口作一小孔、以管束花枝、不令斜倒云々、冬天貯水插花、則不凍損瓶質、これうけ筒の法なり、竹筒も花を入るとい、墓處などに用ゆ〔北窓瑣談〕二重切の花生、今世に何方にも用ゐれども無風流なる物にていと見苦し利休の頃の勝手ものにて花のいけために用ゐし物のよし床へ出し人に見すべき物といみえず世に傳へいふ小田原陣の時利休が伊豆の韭山の竹をきりて用ゐたるを後に園城寺と名付てことくしき名物となれりとぞ〔指月集〕に宗易園城寺の筒に花を入れて床にかけたるをある人筒のわれめより水のたたりて疊のぬれけるを見ていかと申されたれば易この水のより候が命なりと云此筒韭山竹小田原歸陣の時少庵へ土産なり筒の裏に園城寺少庵と書付あり判なし又同竹にて先ツ尺八を剪て太閤へ獻ず其次音曲已上三本なり音曲に利休狂歌あり云々〔同書〕又云古織籠の花入を薄板なしに置れたるを利休稱美して古人うす板にのせ來れ共おもはしからず是の御弟子にまかり成とてそれより直に置れたるといへり古式古實といふもの大かた物忌ひするを宗とす其内床に本尊脇繪をかくる時三具足に花をさすこと右長く左短などさまくありて殊に大事とするよしながら人のむかひてみる處を形よく飾りうしろの方を佛に向るいかにぞや但し此事のいけ花のみにあらずされば〔玉勝間〕にも此筋のことをいへり〔寶倉〕に立花とかやの見處すくならぬにもあらずらめれとこゝをためかして作れる事のいとむつかし

薄板

水仙の早咲

きわざなどいへる人もありけむかしたゞさやかなる一枝二枝なげ入たるこそたれこめても猶春の行へたる心地すなれ〔錦繡綴〕世間の景になりし我山針かねに花を殺す花ならず〔風流徒然草〕花の手つたひする人の細きわら木はりね杯たしなむこ故實なり

〔好色盛衰記〕貞享五年河州倉橋といへる里に、水仙の早咲毎年後の名月に花始て白し都の高家がたへあげての跡民家の口切に出しぬ花一輪を金子一步に定ッて是を求め茶の湯に合せて花屋より方々へ一日ッ、賃銀取て借ぬいかにしても數寄者の心入にいさもしといへば云々紀逸〔江戸枝折五篇〕寶曆十一年池の坊の投入の花を見侍りて「江戸へ出て都の花をいけの坊みる人舌をふるふ獅子口紀逸投入もはえた如くにいけの坊あらぬ目からも花のうゑ人齋齋漢土にいけ花の事を記したるもの袁中郎か〔瓶史〕張謙徳か〔瓶花譜〕などあれどもこれ鉢植をもいへり〔秘傳花鏡〕いけ花の方委しくいへり花によりて莖を焼又泥をつめ鹽を入又花いけの水もさまくゝゑかたあることともいへり今こゝにも大方いけ花師等が秘傳とすることども見えたり其大略凡花の雨露に滋生するものなれば瓶養も天水を用へし毎日添換てよし若三四日換ざればかならず零落す毎夜風なく露ある處に置べし梅花水仙の鹽水に養ふ梅の殊さら醜猪肉汁を用ゆべし

生花の書

後世生花師

江戸に近でる専ら行はるゝの遠州流石州流宏道流などて何くれといへども大かた遠州流といふものと異ならず遠州といふ小堀宗甫の名を假たるにてもとよりあらぬことなり石州も同じ又宏道の袁中郎か〔瓶史〕より思ひよれる名なるべしますくひかことをきわめたりされど

鉢植木

もこれら行はれてさるべき人の好もあれど多く下輩の慰となり神祭りの宵みやに假閣の観物に立るをはれとす枝を撓め奇状を作り出す見るめもいとほしけれども其わざいひかしより巧みになりしにや〔徒然草〕に爲兼大納言東寺の門前にてかたは者共をみて曲折あるをめで、植られたる鉢の木どもみなほり捨られしと有りその鉢木ども、自然の形狀にあらぬなるべし然らば盆種など作れる事むかしよりありしなり袁宏道〔瓶史〕云、石公之養花、聊以破閑居孤寂之苦、非真能好之也、夫使其真好之、已爲桃花洞口人矣、尙復爲人間塵土之官哉、

〔香祖筆記〕曰、上元數日瓶中插雜花、如桃梅桂花佛桑之屬、とあり又〔同書〕に云、徐渭墨芍藥一軸甚奇姿、上有自題云、花是楊州種、瓶是汝州蜜、注以東吳水、春風鎖二喬、これ瓶中の芍藥なり

ならうか  
なるまいか

嫁樹

世俗除夜に果樹の實ならぬに一人杖を持て木のもとに行ならうかななるまいかとて打むとするを又一人その樹に代りてならうと申ますといふなり〔寶倉〕に或時婦にはかりて云君みずや柿木などいへるもの、年きりせるに、節分の夕に一人斧をとりて此木をさらんといらなめば今一人其木に代りて明年より年きりせましゆるし給へなど口かためする時の必明年より年きりする事なし云々〔汝南圃史〕に正月元旦辰刻、將斧班駁樹、則結子不落、名曰嫁樹、とはなり又〔文昌雜錄〕云、楊州李冠卿所居堂前杏一株、極大多花而不實、一老嫗曰、來春爲嫁、此杏、冬深忽携尊酒、云、是婚嫁撞門、酒索處子、裙繫樹上、已尊酒辭祝再三、家人晒之、

江戸の木  
草學の始

明年結子無數とありこれ嫁樹の義なり

御藥園  
採使藥記

江戸にて本草學問する者出來し、松岡怨庵召れてよりなり其頃の日記享保六年辛丑二月松岡玄達を京師より呼下され旅宿小傳馬町三丁目糠屋七兵衛七月三日御暇にて罷登路金十兩相渡潤七月九日京都儒醫松岡玄達大坂儒醫古林見宜大坂藥種屋伏見屋市左衛門平野屋九兵衛堺藥種屋小西彌左衛門是ハ二月以來御當地逗留中旅籠代并普請入用本國へ罷歸候路金野呂立次夏井松玄本賀徳運是ハ御當地逗留の内普請代并藥草見分に被遣候雜用金都合金高百七拾七兩二分拾一匁七分五厘同九月廿二日當六月十二日の記有之勢州松坂院堂と申仁紀州豆州へ藥草見分に罷越候様被仰付無恙相勤此度在所松坂へ歸度奉願昨廿一日林良喜老へ被召呼勝手に罷歸候様被仰候白銀三枚頂戴旅宿本石町四丁目仁兵衛店六郎次郎屆來る同七年壬寅四月廿五日桐山太右衛門下總國千葉郡小金の内瀧臺野にて爲御藥園十五萬坪拜借被仰付桐山の藥店なり同年八月廿八日今度芝新網町に罷在候浪人安部友之進相州大山より八王子邊藥草御用に被遣候爲路金五兩町欠所金の内より下置れ出雲守様より年番此方へ仰下らる

〔採使藥記〕の享保五年庚子駒場御藥園御用屋敷の預り植村左平治政勝採藥の台命を承り其時より寶曆三年癸酉に至るまで間斷なく三十餘年採藥の爲に諸國巡行し人の行ざる處も巡見し藥物のさらなり奇事に至まで書記し九卷の書として寶曆五年丙子に献上しぬされども藥物搜索ハ其學問廣く鑒定精細ならざれば益なきことなり

いたつらにふみのすみかやまうくらん塵うちほろふ人しなけれり  
嬉遊笑覽卷十二下大尾

嬉遊笑覽或問附録

和歌三神

世にいふ和歌三神人丸、はのくくと「古今」住吉、夜や寒き「新古今」玉津島立歸り又も此世に此立歸りの歌「二十一代集」に「見わたらず何の集に出候哉」

玉津島の神の衣通媛にて允恭天皇の妃いまだ佛法渡來らざる時のことなるに此世に跡垂むなど本地垂跡の義いふべくもあらず此歌後人の妄作なるよし安齋先生の説なり又三神と云ことも阿彌陀の三尊に倣ひたるものなるべしと云り

和歌三神の事異説あり「橘窓自語」に和歌三神住吉社、天満宮、玉津島媛社の三社たること「後奈良院宸記」にありと云り

あど垂るといふこと「源氏明石巻」にもありと覺ゆ中古より云たること也

「本朝廿四孝淨瑠璃二段目」しづをかけたる雪の笠「妹背山淨るり」武家の行義のみつゆひなとまた「忠臣藏」に、みさき躑がまゆんたるほどにと申事

しづな  
けたる雪  
の笠  
武家の  
みさき  
躑

俗に麻苧のことをシツともいへり是は倭文手纏と「萬葉集」に讀たるがもとにて倭文を賤に借たるなり倭文の「冠字考」に論じたりシツノヲダマキと云より麻苧を今シツと云なり

今世に云どころに隨てわけもなくシツを苧の事と見て麻苧の紐つけたる笠をいふにや又思ふにシツの沈の義にて機をシツと云類にて雪の重たき笠にや又思ふにシツの雪と云の軒端などより積雪の落るを云といへば此義とすべし二説に勝るべし○みつゆひのと「昨日の今日の物語下」に今も老人のみつ指つき合とあり大指より中指までの三指をいかめしく手をつくことにや山崎久卿二書を抄出してこれせたり「京童跡追」元日發句に「つく指も三ツの初めの禮義かな」草堂雜錄抄門元謙作享保十四印行東都を詠ずる詩に「江城繁華能移人、朱赤墨黑誰守志、莫學賓主相見初、卷舌三指大張臂、これにて明らかなり○みさき踊りシユンタルはどに俳諧の季寄其外にも何躍といふ名目多けれ共みさき誦の覺え申さず候何れ是は山崎邊在郷のをどりなるべしシユンタルとシユンハ句字なるべし「字書」に十日曰句といへりおもふに物のチャウとよき盛りの處を云なり又按るに一段色濃きを一入と云如く染ことの深きに喩へ云歟染をシムとも云りシユンタルのまみたるの偽言にや今阿州の俗七月の踊の合拍子にシユンテキタシユンテキタハ染シテ來るなり

高野六十奈智八十 紙などの燃にキナ臭イ 内儀をカミサマと申事

高野の諺何ことより言初たるにか覺束なく候或説に高野の紙屋谷と云處より漉出る紙の帖六十枚なり今浪華に専ら傘を張る紙なり又熊野牟婁郡小塚村より漉出せる紙の帖八十枚なり依てかくいへりとあり思ふに此諺四十またの類に○キナ臭イ此語いまだ思ひ得ずもし衣焦る臭氣と云へるを其焦ると云ことを略きて云たるもの歟キヌ「竹取物語」にハケ

高野六十  
奈智八十  
きな臭い  
内儀をカ  
ミサマ



又と見えたり○内儀をかみさま カミサマのもと天子の稱なるを源氏其外物語類の文に  
攝關の内子をうへと云り今も箔だみの内裡羽子板と云もの、繪を殿様カミサマサンシヨ  
サマと云を思ふべし殿様ハ男カミサマハ女にて井ベリサン 土人の妻を志か稱するも亂世よりの借  
上なり

堀川百首春雨歌 冬くさどみえし青野の櫻はな彌生の雨にふかみどりなり仲實木をも草  
と申候哉

畫法を用  
ゐて假山  
を作

草木禽獸みな通稱すること多し其上此歌たしかに木を草と云たり共聞えず木を草と云こ  
との「荀子」に南方有木曰射干と見え又霜土樹のサボテン莽草のシキミ也本邦に甘草  
をアマキと云類なり猶あるべけれ共今記憶せず又竹樹と申とき竹をも木に屬し申候  
明末に松陵の計無否といへるもの關全荆浩が筆意を好みて畫を善くせり後に畫法を用ゐて  
假山を作りそれより園亭を作る巧ならずといふことなし是に依ていと名高く求むる人多く  
して名苑ともあまた作れりとなむ遂に其式を著して一書となし「園冶」と名く崇禎辛未の  
歳の自叙あり表題「名園巧式奪天工」とあるの後人の書買などの所爲なるべし扱この計無否  
といへるの恐らくの故ありて名を隠せるもの歟この伎をもて名を著さんことを惜めるに  
や又の故あり名を隠せるもの歟か思はるゝの「齋曝雜記五」古來構園林者多疊石爲嵌空  
險峭之勢自崇禎時有張南垣創意爲假山以營邱北苑大痴黃鶴畫法爲之峰壑湍瀨曲折平  
遠巧奪化工南垣死其子然號陶庵者繼之今京師瀛臺玉泉暢春苑皆其所布置也楊惠之變

庭

鞠歌のオ  
ケンシヨ  
サマと云  
鳥丸光廣  
和歌  
十二支

畫爲製此更變爲平遠山水尤奇矣といへり計無否といひ此張南苑なるべし

庭 「和名抄」考聲切韻云、庭屋前也、和名爾波とあり又「玉篇」に庭堂階前也といへる是なり  
門に入て堂に至るまでの間を庭といへるの本義ながらこゝにてにはと云り家の四圍いづこ  
までもにはと云ふ塲の字をばとよむにはの略なり是にはと云ことこの廣きを思ふべし「萬  
葉」に爾波奈加能阿須波乃可美などよめるの人家の庭なり「古事記」に大年神の御子に庭津  
日神次に阿須波神云々あり古へ人家の庭に此神を祭りし事みゆ是によりて思ふに今神事舞  
太夫頭田村八太夫が江戸町中へ配る所の籠神青襖の札と云もの字の如くアラブスマと讀ハ  
ひがことにてこれ阿須波の神にて青襖ハアスハと訓べきにや

小兒立まりとて立て地上にまりつくにオケンシヨサマヨオヨチヤトウヨといひつゝまり  
をつくり田家の兒女が戯をまなべる也そのとなへこと意得がたし是ハ御免除さまの御朱印  
じやとよと云る程にや

鳥丸光廣卿十二支和歌 穴田律師風雲「よもすがら秋のみそらを詠れば月の鼠と身のなり  
にけり 大角黒丸」村まくれ晴間の月のみる雲の空のはたれをうしとことみれ 野邊興風  
「よもすがら虎ふすのべに秋風の月にうそふくかげぞほのめく 萩本月澄」あけかたの月の  
詠の白うさぎ耳にそ高き松風の音 主水正龍能「わが方にうきたつ雲のあつまれと月にか  
けしとみゆる秋かな 已濃内侍」つきみればうさぎも忘るゝ秋の夜をながきものとい誰かい  
ひけん 右馬權佐長連「あふ坂の山立いでゝさやかなる月をへだてのきりはらの駒 庚國

瓶羊」と、まらぬひつしの歩みめぐりきて幾秋月のかけになれけん 猿丸入道「つき更にみ山おろしのみにあみて秋の思ひをましらなきつゝ、關戸時經「つれなくもゆふつけ鳥のなくなへにかけをほのめく有明の月 犬太郎守家「はなには八月にハハハ詠をもほしまもるとや人のみるらん 猪手冠者鼻堅「まなかどり伏猪の床の秋風に雲もさいらぬ月をみるかな

蛇の怖る歌

〔萩原隨筆〕に蛇の怖る、歌とて「あくまたち我たつみちによこたへばやまなしひめにありとつたへんと云を載たりこい北澤村の北見伊右衛門が傳への歌なるべし其歌ハ「此路に錦まだらの虫あらば山立姫に告てとらせん〔四神地名録〕多摩郡喜多見村條下に、此村に蛇除伊右衛門とて毒蛇に喰れし時に呪ひをする百姓あり此邊土人のいへるにハ蛇多き草中に入るにハ伊右衛門くくと唱へて入ば毒蛇に喰れずと云守りも出す蛇多き所の三里も五里も守りを受に来るとのことなり奇といふべしと云りさて彼歌ハ其守りなるべしあくまだらハ赤まだらなるべく山なし姫ハ山立ひめなるべし野猪をいふとなん野猪ハ蛇を好で食ふ殊にまむしを好むよしなり

江口君畫賛

江口君畫賛 京遊女佐渡「河竹のよゝにふりにしも今おもひ出のあだまくら寤亂れかみもえにしにひかれていまことのみちをわすれ引舟もろ共身ぬけて西の方へゆき玉ひしそのむかし戀侘ぬ 「我袖の泪のそこにうつれたゝむかしをまたふれもかけの雲

〔金葉集雜上〕をとこのなかりける夜こと人をつほねにいれたりけるにもとの男まうできあ

猿の繪の事ハタコ云ふ語の事

ひたりければさわざてかたいらの局の壁の崩れよりくゝりてにがしやうて又の日そのにかしたるつばねのぬしのかりよへのかへこそうれしかりしかなといひにつかりたりければよめる讀人不知「ぬぬる夜のかへさはかしく見えしかと我ががふれの事なかりけり是によて思ふに彼夢ちがひとといふ猿の繪の志き寝も悪夢を我がちがふるなり

鎌子を南方名くる事

へタハたなり海邊をうみべたなといふハ雅語なり又上手に對してへたと云も淺き意にて同義なれども是ハ後世の俗言なり宗祇〔新菟玖波集〕を撰みしハ櫻井基輔が連歌入らさりしかば落書を立つ遙見筑波錢便入、不<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>上手與<sub>レ</sub>下手云々いへり又賤き者を下衆と云ハ上スに對して云り〔源氏桐壺〕にればえいとやんことなく上ずめかしけれと〔取かへハヤ〕人を人ともせずもの遠く上ずめき玉へるなど云へり盲人の階級に上衆引といへる事もこれにや 鎌子を南方と名づけたるハ不毛と云こゝろにて出師表よりいふとぞ昔關東へ下りける勅使のかのけぬき求めてさる名をば付けるとぞ又一説に尾張國名古屋に南方といへる鍛冶あり彼を南方といへるハ源敬卿かれが作りし毛抜にて御髭をぬき給へばよくぬけて少しも残らず南方不毛之地といふことのおれば常にかれを南方と仰られしより名となるなり二説いづれかはなるを知らず

三方荒神の事

〔夏山雜談〕往古内膳司平野庭火忌火として三の釜あり各神靈を祀らる三所の皇神と云是也民家も荒神を祭るハ此餘風なり俗に荒神と云ふハ皇神なるにや〔文德實錄〕云天安元年四月、有勅内膳司忌火庭火皇神、授從五位下云々

よほるの  
事  
庖丁の事

すはる星

垣下座

椽の下の  
舞

美婦と凸  
と云ふ

常陸祭文

丁のヨホロと訓す下部の者の事也使丁仕丁の類也火丁と云ハ一隊の飯をかしくもの也俗に  
 云食焼なり又庖丁部を庖丁と云是が魚類を切る刀を庖丁刀と云て俗にハ庖丁とのみ云へり  
 又魚鳥料理することをも古より庖丁といふ古き物語の書に見えたり  
 昂星をスハル星と云ハ統る星なり一所に統あつたりたる故にかくいふ也統字をスハルと訓  
 すスマルと云も同韻にて通ずる也〔神代卷〕に八坂瓊之五百箇御統とあるなり  
 垣下座との舞樂等の時舞人樂人など着座する所なり此外公事の時もあることなり地下の座  
 にて饗などにつく所なり此處にて舞などある時の堂上へのみえず此故に俗に晴たぬこと  
 を垣下舞といひけるにや後世の俗談に椽の下の舞と云ふハ垣下の舞をわやまりたるなるべ  
 しと或人いへり  
 婦人のかはなり善きを凸といふ此故に昔より白粉の看板に箱を凸の形に造れり漢土にも  
 〔元曲西樓記〕に淨扮醜妓上云々眼大眉粗面又凹とあり  
 常陸祭文とて淨るり一種あり其始結城重太夫と云もの天明の頃その唄ふ處の正本を江戸本  
 芝三丁目なる清水屋治兵衛といへる草子屋にて刻し初めて多くこれを版行す説經上るり其  
 外の八百屋お七が事の如き歌祭文大かた刻せざるハなし此重太夫と云へる者江戸に出て弘  
 めたることハなく其正本なごハ田舎へ賣れしなりそれが正本を見るに元祖結城石見掾とあ  
 るハこれよりさきにそれが師ハ有しこと知べし思ふにこれハ下總結城出生の者にて有し  
 かされど廣行ハれたるハ重太夫よりはじまる結城ハ操狂言座元の稱號にあれば重太郎が後

日本祭文

チヨボク  
レ

常陸祭文  
の一種

貧家の籠

百日紅

番字の意  
義

ハ是等よりさハる事など有しと見えて其次ハ天満某太夫と名乗り只近時俗説の夜泣石ま  
 た鬼女おまつなど其他種々の敵討等を専ら語りて説經の上るり共ハ語らず其曲節ハ歌祭文  
 チヨボクレ上ルリさまハ混雜野卑極りて聞に堪えざるもの也此類常陸にのみ有る故常陸  
 祭文とい名くれれとそれ水戸などにはなく筑波山下邊鄙の地處にのみありて今に存す又お  
 かしきは是を日本祭文とも稱するハ濱島庄兵衛などが事を語りて其綽號日本左衛門と云は  
 やらせたることにもやと思ハれしにさにはならず日本一流の祭文と自稱せし也また今江戸  
 にも山伏やらの者來りて語る歌祭文ハ上州祭文と呼ぶ皆上州より來る故なりこれ又他處に  
 ハ少し又今チヨボクレと云もの已前の曲節とハかはりて文句を唄ふことハ少く詞のみ多し  
 芝居咄しをするが如しこれを難波ぶしと稱するハ彼地より始めたるにや  
 常陸祭文これ又一種のものにて歌祭文より起る説經をも語れども彼米千が類にもあらず又  
 古き説經の流にもあらず三絃も本調子にて只何となく鳴し時々文句に合する迄なり  
 雜劇の〔爛柯山抄〕化の條、青蛙鑽窠冷水々といへるハ貧にして烟を絶せるかまどを云り○  
 〔水滸傳〕石秀楊雄が家にある處に自古道人無千日好、花無百日紅といへる詞あり紫微花  
 を百日紅と稱し又〔癸辛雜識〕にハ瀬桐を百日紅とすいづれも花のさかり久しきものなれば  
 なり又千日紅ハ〔花鏡〕に見えたり思ふに是らの花の名ハ後にて諺ハふるかるべし  
 曲本に〔釵釧記〕講書の段、今朝可畏因循易、明日無聞悔後遲、○躍鯉看穀條に、看守不免番、  
 晒童兒竿、持て穀をさらす處に居鳥を追ふ番の字こハにいふ番をする意に叶へり替る人あ

茶博士  
松竹梅

頭巾を燈  
心入れ  
なす  
鼠さり樂

書物と糸  
針入させ  
んさす  
指甲紅

四景題情

るにあらず 俗語に一番といふ番の字の意 ○教子茶肆の條に、茶坊器皿精奇、鋪排洒落云々、  
 我茶博士是也、○〔玉環記〕謁見齣に、老爺貴誕、夫人與小姐、綉成松竹梅、與老爺上壽云々、こ  
 れの其意松の松柏同庚竹の青節堅剛梅の爲國調羹に取る又〔還帶記〕入貢院齣舉子交卷の  
 處、第二場分松竹梅三號云々は、松竹梅を詠ずる也本邦にて畫家此三つを圖し又衣服調度  
 の紋となすも唐様によれる也 ○〔還帶記〕別頭巾の齣、房下説等我拿個釘々在壁上、放燈  
 草發焔也、好的不想個件物、事亦有用處、これいふりたる 頭巾を脱てすてたるを妻の才覺に  
 て壁に打つけてとうすみつけ木の人物にせしと也 ○〔題塔記〕舊題の條、爾本是泥鱸侶、強要  
 做燒尾魚笑、爾老而不死還躡蹠、○〔金銷記〕賣過狸猫老鼠藥、大的吃了跳三跳、小的吃了就死  
 哩、有錢不買耗、鼠藥、敲々打々睡不着、賣過狸猫老鼠藥、ねづみとり藥賣ありく處 ○〔蕉帕  
 記〕開幃の條、不知誰向錦標中、奪得鰲頭一丈紅、○〔紅梅記〕曹悅調婢條、賞爾這本書罷、朝霞  
 頭也、好做針線帖とあるの書物を糸針入る物にせんと也 ○〔同記〕に鳳仙花已搗在金盆内、  
 了、請姐々染指、〔癸辛雜識〕續集鳳仙花、紅者用葉搗碎、入明礬少許、在同先洗淨指甲、然後  
 以此付指甲、用片帛纏、定過夜初染色淡、連染三五次、其色若胭脂、洗滌不去、可經旬直至  
 退甲方漸去之云々、今老婦七八旬者亦染甲、○〔填詞〕に四景題情とあるの春夏秋冬を四季  
 といへり四時の景物に感ずる閨風の詞なりこゝにて今人これを四季とか四時とかいふべし  
 又願重父明人小西湖十二景を咏する詞あり小西湖の幽燕城北にあり ○〔琵琶記〕清閨女誠の  
 口院子云、白打從來逞藝官場、自小馳名如今、年老脚躑躅圓社無心馳騁、云々、樂遊頌人、標注

圓社  
牧童畫軸  
の詩  
古き筆さ  
りくす

折櫃  
樽代肴代

笑話

に、兩人對踢爲白打、三人角踢爲官場、毬會謂之圓社、○〔同記〕館内悲逢と云處、  
 軸の題詩を讀、石上敲針閑作釣、水邊窄簾學行船、風清吹笠花前立、日暖鋪簑草上眠、  
 〔隣女晤言〕に草庵集連歌に「ふるき筆さりくす」とや成ぬらん頼阿付句壁の中にそふみりをさめ  
 し〔草庵諺解難注〕に晉于寶が〔搜神記〕を引て曰、朽筆爲筆也云々、前句の作者筆字筆字に  
 似たるを誤り見てせしと見え侍る云々いへり今按るにさにあらず往古より既に古筆のさり  
 くすとなることいひ來れりと見ゆ〔秘藏抄〕に「筆津虫秋も今いと淺ちふにかたおろしな  
 る聲よわるなり筆津虫の蓋をいふ也古筆のなるなりとあり此説もいかゝあらん〔秘藏抄〕の  
 説も古筆のなりしなるべしそのともあれ禿たる筆の形をいふさりくすと云へり自らされ  
 たるさまにも聞ゆれば也この瞿麥のすゝきになりたるといへると同じ波どの言なるべし  
 〔同書〕に折櫃のもろこしの書に折乾といふことのあるより折字器の名となし來れるにやと  
 云へり折乾の説の〔柳巷談死〕にも出てこのくに俗にいふ樽代肴代の事なり折ひつの折をこ  
 れによれりと云へるの笑ふべし折ひつとの片木を折曲て作れるもの故か呼にて深き義あ  
 るにあらず  
 笑話の明萬曆中楊茂謙と云もの多く古今の事林を輯録して毎條に評語を加へ〔笑林評〕と名  
 く又續篇ありそれより退かに後乾隆のころ〔笑林廣記〕出づこれの古書に出たる事を載せず  
 後世の笑話のみを志したるが〔笑林評〕に出たる話も多く見えたり又〔四書〕中の語をとり  
 たる笑話を集めて〔四書笑〕などいへるものもあり〔笑林評〕に吳中一老、初以弄蛇爲生、其

以髮易糖

三子相隨行乞〔笑林廣記〕にも出たり○有以髮易糖者云々また別條に此身是件々有**用的**、**髮可換糖皮可冒鼓**云々、

落咄

〔醒睡笑〕なごにねとしのはなしといへる今いこれを落し咄と云ふ又唐山人俗語に落得一番嘲弄などいへる落字似つかりし

鬼に疣をさらる

〔著聞集〕に鬼に疣をとられたる物語あり〔笑林評〕に一人頂有懸疣因取涼夜宿廟中神問此何人左右答云蹴氣毬者神命取其毬來其人失疣不勝踴躍而出次晚復有疣者來宿于廟神如前問之左右仍以蹴毬者對神曰可將昨毬還他其人至旦竟負兩疣而去評云

險蚌

患失之患得之是求無益于得也これと全く同し  
兩人相遇問所生子女幾人一日五女一日一子生女者曰一子是險子生子者怒曰我是險子猶勝爾家許多蚌これ險の危なり一子なれば然いふ又險观音通ず彼故に女子を罵て蚌といへり

蔡京毎に香を焚く

蔡京毎に香を焚戸牖を閉て數十の香爐にこれを燒その烟室に滿て即一簾を捲香の烟氣如霧庭を繞る京客に語て云ふ香須如此燒方有氣勢漢土にて妓館のあるじ皆女なり是を鴛と云ふ妓女も多く養ひずあるじこれを假女とす故に親生の殊に賞せらるゝことと見えたり〔笑林〕に妓者携客輒言我乃媽所親生云々など云へり

妓館の婦を鴛と云

七尺の夫に二尺の婦

長安有侏儒女長僅二尺正若冬瓜中插手足坐繩床内披胸乳兒其夫長七尺餘形狀甚偉

書を讀て睡る足癩に柴を鼻に付る

有士人讀書把卷即睡梁人因呼爲黃爛言怡神養性也評云好個睡方士人將書作枕亦是此意○〔笑林評續集〕俗言足癩將柴芒貼于鼻端即止一人偏貼額上人問爲何曰我膝都是癩的今この方にて俗間になす處この詛れる方に同じければ譬の癩を呪ふにやいとをかし

燈籠の白きを尙ふ

蔡寧詔嘗言燈籠原欲取明故須尙白反大書某宅以掩其光云々○陳子有好畜畫眉作籠爲官船樣船上列牌棍錫漏榜其船曰鴻臚寺人間之答曰鴻臚故是鳥官といふさかしらことを笑へり

治第の燕に賓客を下し諸工と上さす

郭進有才略治第方成聚族人賓客落之下至土木之工皆與燕設諸工之席于東廡咸曰諸子安可與工徒齒進指諸工曰此造宅者指諸子曰此賣宅者固宜坐造宅者下評云探得百花成蜜後不知辛苦爲誰甜これもをかしき部類にやかうやうのこと第宅のみならず

乞兒の詩

〔酉陽雜俎〕に長安乞兒縷臂文云昔日已前家未貧若將錢帛結交親如今失路無知己行盡天涯不見人觀其此乞自是聰明男子然而悔之晚矣元祿の頃みやこの非人の詠けるさなむまこ元のれごも淨世にかへす曉のわれさむしろにおく露の身はきえやらてよはの風の吹ひもなし

大蘿蔔芋くらへ

衢州蘿蔔最大味甘冬月最美其魁如六斗斛所生之家不敢遯食親戚競以鼓樂導迎設酒相慶謂之菜王以占年豐之兆江州日野近邑山中例年八月十日野神の祭あり東西の村より芋を出して長短をぞり

聖をなす者の誠め

痴婿

對食

大言

好酒不食

薇花  
百日紅

椿

盆景

一醫生好作歪詩、人有嘲之者曰、蜘蛛壁蟻相結爲社、蟻見蛛吐絲成網、遂棄壁衣而強效之、旋繞推敲、終日不成、一暈、蛛乃謂曰、壁哥爾也、做什麼絲、不如仍守這不罷、

〔笑林廣記〕痴婿の條に、妻曰云々我家土庫前、寫此處不許撒尿、六字、爾可牢記、○〔卷七世諱部〕兩童以後庭相易、俗云免車是也云々、按るに〔漢書〕趙皇后傳に對食とあるの女としかたらふを云甚相妬忌するよし也、免車の今男童のことといへば訛言なるべし

ふるき落し咄に大言をなすもの相逢て語る一人云ふ我在所の寺に太鼓あり周り十圍といふ又一人いふわが古里に牛あり大さ山の如し傍人これを笑ふ語るもの云もしこの如き牛なくばいかでか彼大鼓を慢得べきといへり此物語のこゝにて作れるにあらぬにや〔笑林廣記〕にも出たり

〔四節記〕といふ曲本嫖院齣、自家喚、做買志誠、云々、一生好酒不食、貧混堂裡是我安身之處、云々、只得挑水營生、前日挑一擔水到人家去賣云々、

〔汝南圃史〕薇花五月中花開、直至六七月爛熳可愛、又百日紅〔癸辛雜識〕云、百日紅、顏桐、云々、自初夏至秋蓋草也、紫薇乃木、本不應、冒顏桐之名、

寛永の頃つばきの花をもて遊ぶこと行ひれて種類も多くなれり其名後世にの喚かへて傳へらざ傳へる名もあれといと少し〔花檀地錦抄〕の元祿七年江戸染井の花戸が著したる書なり椿の名も多く擧て二百餘種あれと〔卜養狂歌〕などによめる名の大かた見えず、今この方の俗人盆景と云ふ盆石とて盆に石を排置き白砂を盛たるをいへるの非なり盆景と

箱庭

花を括る

蛭蚓

幫間の扨

獄舎と禁中と云ふ

馬頭

笑館

いふ鉢うるのことにてもどの草木を植たるなり其風情幽趣あらしむるを植盆取景などいへり石など立添たるの後のことなるべし扱こゝにて石をもつらにして木にてつくれる箱の花のみを植てもこれを石臺と呼ぶもいま人物鳥獸までもつくりて立るものを箱庭といふ〔風俗文選〕番椒序野坡、石臺を終に根こぎやたうからし

〔花鏡〕に花を括ることを云て毎採一枝、須擇枝柯奇古、若二枝須高下合宜、亦上可一二種、過多便如酒肆招牌矣、

蛭蚓の鳴を蛭笛といへり〔花鏡〕自來音と云條下に見ゆ、又小兒の陰腫ることあるの〔鎮江府志〕に今小兒陰腫、多以爲此物所吹、以鹽湯浸洗則愈とあり又〔笑林〕に幫間を曲蟻にたとへて云る内に會唱曲又會呵唇また燕子泥を嘲で窠を作るに泥中に蛭蚓ありて憤りければ燕子云我專怪爾呵人家卵唇といへり卵の陽物なりこれの呵卵唇と云ていばりふくろを吹といふ俗語にて幫間等が扨從するを然いへり

世間の稱呼なども俗に隨て妄りに云べからずいともかしこき事必あるべきなりみかどを禁裡禁中なども常にいへりさればかしこきことなるべし獄舎を禁中といふ也朝廷を禁中といふこといなし

〔龍圖後案三〕殺假僧條に、東京城馬站頭店字、招接四處往來客商とありこれ馬頭なり站字書に貽に作る獨立不動貌などあり馬のたてばなり

人を欺くことを館を甜らすと云俗語の〔龍圖後案三〕孫完といふもの大罪ありながら肯て招人を欺くことを館を甜らすと云俗語の〔龍圖後案三〕孫完といふもの大罪ありながら肯て招

魚開

杵子

許願

幫傘

脚力  
妾未有室

福生帳布

御身

江戸に猪  
狩の

認せざるを人をして欺きすかざしむる處に笑飽せしむとあり

〔同書三〕死酒實死色と云條に、住魚開去と云下文に魚池中云々あれば魚開の池に臨める閣にて是こゝに云ふ釣殿なり又この下に張英と云もの妻の莫氏を殺す處に莫氏以杵子觀脚、向棹中取酒、即從後提起隻脚、推入酒棹中去、とあり按るに杵子の踏だい也棹の字書に載ざれども楯字の俗字省文なるべし酒楯にてさかだると聞ゆ○〔同條〕に爾自幹事、人豈能知、但天知地知、爾知鬼知云々、

許願と許下良願なともいへり神佛に願がけするなり願はどきを還願とも賽還ともいふ○應有家財各分一半と云の俗にいふ有たけの財寶なり

〔龍圖後案六〕幫傘と云ことあり相合かさなり求幫傘といへば傘下に入ってもらふなり○脚力との飛脚などのことにはあらず脚力などいふ時の威勢をかりたのみとすととなり妾未有室といへばいまだ不許嫁といふことなり

〔龍圖後案一〕咬舌扣喉條、主母家雖富足、又出自宦門、平生只愛淡薄福生帳布被箱籠云々、人をさして御身と云ひ自らおのれを身とも云ふ漢人俗語も亦然り身女身家など〔龍圖後案〕などに多し下輩の女などをさして我身と呼ことも古きことなり〔源平盛衰記三〕後徳大寺實定嚴島の内侍といふもの、内に有子といへる女に物いふ處に有子唯一人御前に候けるを我身の此國の者かと御尋ありけれ共云々あり

江戸に猪狩の事享保七年壬寅五月十五日麻布領の内芝金杉町本芝町芝田町三田町右の町々

はたこ

堺の眞言  
僧

てぐる坊

放出

紙裏より  
見れば數  
字に見ゆ  
る假名

三十三間  
堂の起立

より今度上目黒猪御狩人足五十八餘出申候組頭一兩人宛名主附添相詰申候右之段伊奈半左衛門殿より被申渡候云々思ふに是の順て小金御狩の調練なるべし同十年乙巳下總國小金にて御狩あり又十一年丙午小金御狩去年の如し

昔料理茶屋と云ものなし食事の旅店にてすることなり故に店屋にて物食ふをいはたごと云り山崎宗鑑尼崎に閑居し常に油筒を嚮きて世をわたる業とし室にやくわん一つより外に蓄るものなく朝げ夕げに鳥目十錢つゝはたごに持行しとなり

〔新著聞集〕泉州堺の眞言僧常に酒を嗜み只戯言のみいひて世をおくられしかども泊然として潔く祈禱あるし有ければ人々崇へける此僧身まかりて後遺囑の書に寺と書籍の甥の僧におくる金三百兩の草履取に得さす出家の財寶の禍の基なり衣服のそれゝに與へよ辭世の「あやのゝ衣つゝてんゝてぐる坊主に殘る松風とありてぐる坊の傀儡なりあやのゝ衣い今まやなゝといふことにはや

家作り放出といふの離れ座敷なり〔新著聞集〕に津國東成郡放出村出田寺云々あり是またはなれたる孤村なるべし

今落書など大小等發句狂歌を假字を紙のうらより見れば一二三等の數字みゆるもの往々ありこれの小野篁歌字盡など云もの、附録に出づ其体ちゝめたぬ三川り一是一より九に至るなほ七、八、九等をも作るべし

〔官鑰秘鑑〕に享保中卅三間堂起立の書付あり詳なり

突上窓の事

突上窓として今人のよの常の窓の戸を内より突出すやうに作るをいへ共元來さにあらず〔遺老物語〕に永祿已來出來初し物の内にツキ上窓出來初りし天正の初泉州堺の津に北向道珍といひしわびすき屋敷せまくして窓を取べき處なき故にすき屋の屋根を切破り明りを取りしなり

破窓を以て隔又ハ門ミナす

傀儡

撮弄之戲

撮搏之術

冬學

ベソ

こゝにいせざる事ながら漢土にハ甕の破れたるをもて隔とし又門にもするよし也故に〔甕隔間評〕と云書なともあり尤も寒家の作事と見ゆ乞馬などの破甕に住するもみえたり茶室などの幽雅なるにハ甕を隔とし又門とせばいまだ人のせざる處にて珍らかに趣あるべし〔聯珠詩格六〕梁鍾傀備詩曰、刻木牽絲作老翁、雞皮鶴髮與真同、須臾弄罷寂無事、還似人生一夢中、これを〔咏物詩選〕に唐の玄宗の作とす又〔十六〕廢獄、今撮弄之戲是也、夏疎舞袖跳珠復吐丸、遮藏巧便百千端、主人端座無由見、曾被旁人冷眼看、

〔龍圖后案〕青錠記穀條、撮搏之術をもて穀物を盜める事みの此術いと奇しき邪法なり

陸遊が秋日郊居詩、兒童冬學開比隣、據案愚儒却自珍、授罷村書閉門睡、終年不著面看人、自注農家十月、乃遣子入學謂冬學、時讀雜字百家姓之類、謂之村書、

ベソ〔源平盛衰記〕に澄憲をわまくたりと拍せる條に、小松内大臣當座に候いれけり始よりべし口してえも咲ず又〔六〕入道殿打聽てべし口して去ばこそとて能々心得ぬ事に思云々又〔十〕陰陽頭安部時晴が笑ひる條に、壓口ベシ口と書たり〔今昔物語〕に女醫師の家に治療の處、貌をなほしかねて貝をつくりて泣ける云々、安齋云泣もの、口の形への字形に似

長押

沓新きも冠さならす

岩木にあられハ二ツ瓦三ツ棟に造たる船の昇居屋形の船

見みえの意義

たりへシ口といへ字口也今按るにへシといへシ付るな俗語に云ふにておさへ付るなり即おすことにて口の形をなぞるふる也壓口と書たるハ當れるなるべし猿樂の假面にへし面といへるものも此口付したる面なり今是を小兒の泣ことにべと作るべとかくなど是あり其口つきに喩ゆるなり

〔盛衰記六〕入道殿大納言に向て一長押上たる處に尻打係て清盛成親に尋問する處これハ長押と讀べし今本の點いか、

沓新きも冠とならずと云諺も昔ハさハ云ざりし〔盛衰記六〕西光父子斬る條に、雖冠古猶居頭、雖履新尙踏地、噎れる拳不當笑顏とあり又岩木にあられハと云ことも成親流罪の處に武士共ハさすが岩木をむすばねば各袖をぞぬらしけると云り

成親流罪の條に、二ツ瓦の三棟に造たる船二三十艘艘列けてこを下りしに今ハけしかる昇居屋形の船の淺猿かりけるに云々思ふに二ツ瓦といハ重ね深く昔て二枚重ねとなるにや昇居屋形ハつひ昇もて來れる如き庵屋と云なり

〔盛衰記〕成親大納言の配所へ北方よりの文の内に、心に任する旅の御住居ならば共に下て見みえ奉たきこと云々見えハ見らる、也これ又見る人にも見らる、人にも云べきハ蓮如と云もの讚岐院を訪ひ奉る處に淺増き御貌を見えん事も憚れば中々無由とて御泪のみ流させ玉ふとあるハ院御自ら見らる、を耻玉ふなり今漢籍を讀にまみゆと云ふ同言なり見もし見られもする故見みえとい云今目見と云も御目に見え奉るばかりにハ非ずと見みえの



そこはか  
止観行者  
四種三昧  
の大意

証言と知らるる○鬼界島の條、そこはかともなく浪に流るゝもくつの中に卒都婆一本見え來れをこぼくこの此そこはかかなり又〔卷八〕智者ハ秋鹿鳴テ山ニ入愚人ハ夏虫飛テ火ニ燒是ハ止観行者四種三昧の大意を釋しける絶句とかや

許魁の脅  
大腹賈  
私錢盜鑄

〔見聞集卷三〕徐岳許魁と云もの脅力あり轅門の石獅子左右を易たる事説鈴本に此條なし〔同三〕語云、密網漏於吞舟、張火飛蛾進集、信然、○〔同四〕輕烟輕雲媚家女云々、性多俠雅不喜媚客、大腹賈齋多金、賂之輒不顧也云々、大腹賈ハこの俗に腹脹れと云が如し〔同卷〕近來私錢薄小不堪且銅貨多僞、以致官錢壅滯、雖新例極嚴、而盜鑄日衆、余嘗謂錢視銅質之美惡輕重爲價、不禁自止、

人肉と食

崇禎壬午癸未間、斗米升錢、天下皆凶、而河南山東尤甚、在々以人肉療饑、雖至親好友、不敢輕造、入室守分之家、老幼婦女相讓而食、強梁者搏人而食、奸巧者誘人而食、甚有母殺其子而食者、云々、食人肉者、一至麥黃相繼病、疫死無子遺、云々、或以爲想肉、或以爲糟豚、或以爲軍糧、或以爲饒把火、不美羹、和骨爛、兩脚羊、是皆豺虎之尤也、又何忍言、老瘦男子謂之饒把火、少芥婦人謂之不美羹、小兒謂和骨爛、總名曰兩脚羊、

淨心の法  
號の淨土  
宗葬所の  
天台宗の  
歌誦百人  
撰の作者  
泉首せら  
る

三浦五郎左衛門茂正法名淨心正保元甲申三月十二日卒法號稱陽院定譽淨心居士葬東叡山普門院これ法號の淨土宗にて葬處ハ天台宗なるハ故ある事なるべし  
〔歌誦百人撰〕ハ馬文耕が撰なり憚りもなく當時上様の御詠もあり又俳優市川海老藏等まで入たり楨町にて召捕へられ泉首になりしと軍談師兼信もの語れり

延命院の  
仙石騷動  
の作者

近時手酌酒盛といふ狂歌師延命院が事を寫本に貸本としたる答にて江戸御構となる又戯作者一九が弟子なる者名を繼て一九となれり仙石家騷動の事を寫本にたたりしが是によりて亡命したりしとなむ

皆虛が〔世話盡〕明曆二年温な時分や猿の出つらん門もかすみて賣ぞ七色○こぼす涙ハ髪のかずくゝ、いかに但かく玉章の字しむらん

筆師に小  
法師と云  
ふと

〔續山井〕やり梅も風ハの道具おとし哉、春遊道具落しの事〔昔々物語〕に見ゆ〔同集〕筆ならば文字の法師かつくし、筆師に小法師某兵衛など名乗るハもと小法師といふ筆師ありしなり出齒が庖丁の如し

おも黒き  
鳥金

れも白ろしと云を打かへしておも黒きなど今人もざれて云ことなり「闇に梅たもくろ方」句ハ哉吟雪雪の歌や見て面黒き筆の跡林元

正保頃の  
町名

一夜曉がたままでと契りて金借るを鳥金と云こともや、古きこと、聞ゆ〔正直集七〕寛文二年版守武が〔獨吟追加〕とて載たる百韻の内「かへりてのくるかりがねをはらふ世にさため有こそからすなりけれ  
正保三年季貞が〔町名俳諧〕徳元判この内今聞えぬ町名往々あり寄合町トキ町長門町御成町海賊町橋の五輪町喰物町番匠町宮鍋町矢守町御壽町またよし町あり古く此名ありけるか但し六間町ハ別に出たり

〔菟玖波集十四〕みそぎする日にめぐり逢ぬる年をへしいとのみたれのくるしさに安部眞任

かたくり  
しき者  
延喜式  
古文眞  
寶云云  
三間堂  
創起

昔のたたくるしき事をいふ者をば延喜式と云へり後に古文眞寶といへるが如し〔本朝文鑑〕序に、何かの唐人の古文眞寶ならんや云々〔同書〕に字訓歌「寒ければ山より下を飛雁に物うちになふ人を戀しき此歌の炭字を讀なり」江戸淺草に三十三間堂創起せし事享保十年町奉行大岡越前守殿へ久右衛門より差出したる書付 一淺草三十三間堂の元來新兩替町弓師思立にて屋敷の儀の松平伊賀守様へ申上御公儀様へ被仰上堂屋敷拜領仕り取立可申私受取カラ木立ばかり千五百兩の契約にて寛永十九年造立霜月廿三日に相渡申候同十年より備後御弓の射手衆相集候て箭代ばかり取申事に御座候然共右カラ木立千五百兩の金子一兩も私方へ濟不申候依之申年御訴訟申上候處御公儀様より急度金子濟候様被仰付候へ共如何仕候哉相濟候義成不申候に付申年十月二日御評定所へ松平伊賀守様松平出雲守様安藤右京亮様朝倉石見守様神尾備後守様御詮議之上にて堂屋敷共に永代鏡屋久左衛門へ被下候間難有奉存支配可致候由急度被仰渡候則備後儀の御拂になされ堂地立退申候同日拜領仕當年迄八十二年代々支配仕候儀其紛無御座候事 覺白銀五枚堂銀 一同六枚矢驗見 一鳥目壹貫文灯明錢 一鳥目壹貫文染錢 右之通被致矢數候方より可差出候由鳥目壹貫文板錢同壹貫文矢驗見同壹貫文札錢右之通堂前稽古の方より可差出勿論堂守へ斷可有之縁の上より芝矢一切射手より射べからざる者也右之通御奉行所より御下知相違無御座候右御定め渡邊大隅守様島田出雲守様へ御願申上寛文十戌年十二月廿八日頂戴仕候

古へ遊女  
白拍子招  
來るに  
食店  
行菜  
鑑頭  
素分茶

〔東京夢華錄〕東角樓街巷云々條下に、又有下等妓女、不呼自來、筵前歌唱、臨時以些小錢物贈之而去、謂之割客、亦謂之打酒座、とあり〔板橋雜記〕などにいかにある事見え、こゝにて古へ遊女白拍子の類是を呼ばざるに押して參れる事多く見ゆ〔同書〕食店條に、大凡食店大者謂分茶、云々都人侈縱百端呼索、或熱或冷、或温或整、或絶冷精澆臙澆之類、人々索喚不同、行菜得之近局、次立從頭唱念報、與局内當局者謂之鑑頭、又曰着案訖、須臾行菜者左手扱三椀、右臂自手至肩、駄疊約二十椀散下、盡合各人呼索不容差錯、一有差錯、坐客白之、主人必加叱罵、或罰工價甚者逐之、云々及有素分茶、如寺院齋食也、こゝに食店を茶屋と云ことよしあり行菜の食物のかよひする者鑑頭の料理人養方など云者とみゆさま、人のあつらへたるをれ、調理して行菜なる者これを一度に多くもてくるに一つもたがふことなくよくなるらひ得たるものなごらいとおろそかになめけならずやこゝにて今食物の器物を多くつみかさねて持ありく、蕎麥屋またの臺屋といへるもの共なり素分茶の江戸などにいひ茶づけ屋の大かた素菜なれども是の料理の本膳ならずされと仕出屋あれば何をも辨ずることいと易し

目蓮救母  
の劇

〔同書〕中元節、拘肆樂人自過七夕、便般目蓮經救母雜劇、直至十五日、止觀者増倍、これにて十月日蓮記の狂言する心なり  
〔故實今物語〕といふ草子あり年號の削りて例の入木と云ことふたれど其間の繪をみるに寛延寶曆のころ物と見ゆ事、女童の手まり歌の解なれ共あらぬ事のみ附會して作れ、一ツ

幡隨院長  
兵衛の異  
説

シンマク  
云ふ事

も取べきものなし唯手まり歌の今とかいれるのみぞ其時の儘に有ける「向ふ通るの長兵  
ぢやないか鉄炮かついで小脇差をさして何處へ通ると問たれば雉子のお山へ雉打にきじの  
けんくはろろうつよてお茶まいれ新茶をまいれお茶も新茶も飲ともないがこゝな小娘に  
チヨとほれた「れせんや」れせん女郎となたのさしたる筈の拾たかもろたか美しや市右  
衛門どんの一むすこ女房が泣て恪氣する女房の龜屋のお鶴どのれつるが處から文がきた文  
の上書よんでみる一に香箱二に葛籠三にさらしの帷子を誰に着しよとて買てきたおまんに  
きしよとてかふてきたおまん死なれてけふ七日あすの待夜のぼた餅よとあり今唄ふ處と異  
同を知べし又此注解の中に島原一揆に滅亡したる寺澤兵庫頭が家來塚本織部が子息某本多  
中務太輔藩中櫻井庄右衛門が僕となりて常平といへり同家中なる彦坂善八と云ものを討て  
死罪に極りしを其前幡隨院上人の本多家信仰有ける故常平が命を乞て助けたり此常平則俠  
客幡隨院長兵衛なりといへり「關東俠客傳」の説と同じからず

安齋云俗語に物ことを猥ならぬやう取治るをシンマクすると云此字詳ならず思ひしに寛保  
癸亥年南溟といふ僧の著述して梓行せる「續沙石集」といふ書六卷に有り其第五教戒を記し  
たる詞に、人の常に慎莫二字を忘るべからず慎莫夜行、慎莫不忠、慎莫不孝等也といへり慎  
莫二字のつゝしみて此ことをするとなかれと云こと也是にて俗説のシンマク二字を始めて心  
付たり近年の人の著したる書なりとても書をば見べきもの也不慮に知見を開くことありと  
云へり書を見るべきものと云の誠にさることなから慎莫の二字を取られたるの非なるべし

策祝

步搖

文房四神

神粧

シンマクハ尻巻なりも尻舞といふ語より轉れる語にて物ことの終りを仕舞と云も其もと  
ハ尻舞なるべし尻まひり古くいへる語なり尻をシンとはぬるハ「榮花物語」花の御藥の後取  
と云ことあり屠蘇白散のおろしを給へり飲なり又殿をシンガリとよむ

「尚書後案卷十三」に周書金縢に、史乃冊祝曰、案曰、冊史記作、策古字同用、鄭曰、策周公所作、謂簡書也、祝者  
讀此簡書、以告三王、案曰、鄭以冊爲策、謂簡書者、冊策同、儀禮聘禮記云百名以上書于  
策、不及百名、書于方、注云、名書文、今謂之字、策簡也、方板也、疏云、簡者未編之稱、策是衆簡  
相連之名、鄭論語序云、易詩書禮樂春秋策皆尺二寸、孝經謙半之、論語四寸二分居一又謙焉、  
是策長短、鄭注尚書、二十字一簡服、虔注、左氏云、古文一簡八字、是簡容字多少、百名以下不假、  
連編之策、一板書盡、故言方板也、此祝詞百二十八字、故書于冊也、鄭以策文、周公自作、而傳  
云、史爲冊書祝辭非也、

「琅環記」探蘭雜志を引て云、人謂步搖爲女髻非也、蓋以銀絲宛轉屈曲、作花枝挿鬢、隨步  
輒搖、以增媚媚、故曰步搖、とあれば、あゆむにつれて動くもの也今こゝにていはひらく  
のかんざしと云もの即是なり銀玳瑁何にてもいふべし

「同書」致虛閣雜俎を引て云、筆神曰、佩阿、研神曰、淬妃、墨神曰、回氏、紙神曰、尙卿、筆神又曰、昌  
化、とあり文房四寶と尊むべきものながら各其神名を設たるの奇なり、唯是のみならず又探  
蘭雜志を引て、膏神曰、雁孃、黛神曰、天軼、粉神曰、子占、脂神曰、興贊、首飾神曰、妙好、衣服神曰、厭  
多、昔楊太真粧束、每件呼之、人謂之神粧、などあり

拾赤子  
賣赤子  
織婦  
乳子買

人置か

杜預書  
寄みて人  
に借さす

ケサイ

〔蘭州瑣語〕云、聞京師六七十年前、有呼拾赤子者、貧民子衆、即付小費予之、乃出門、又呼賣赤子、欲子者復以財易之、後官禁之、蓋以有不售而殺之者、又有婦人呼曰織、一男子擁機杼之具、隨後、續呼曰上工、亦官禁之、蓋有賣淫者也、こゝに六七十已前といへるは元祿中にあたる子を拾ふにあらざり、これの乳子買と呼ぶものにて〔職人繪本〕に圖も出て注して云ふ子を生して思案あるをば里につひすの昔よりの習ひなるべし、然れ共いづくに里子をあづかるとさだめがたき、此事なり、然るを乳を持たる女里子とりたいのぞみなれば、其者の肝煮にたのむその肝いりを乳子買と云なり、折節入口の當なれば、則彼乳ある女を引連て何所をさすともなく町々にてちごかひふとわめきめぐる也かやうの女幾人もあり、事なれ共それの機縁ありて子を養ふ殊に廣き都のうちぞかじと云へり、又其ころ人置か、と云へる者あり、今いふ女術なり、これの年よれる女二人してありけるよし也、是をもひとしく禁せられにき

〔瑣語〕又曰、杜預誠子曰、書勿借人、杜遷多藏書、每卷書曰、嚮及借人爲不孝、爲人子者、以手澤存、不輕敢借、人宜矣、命子孫不借、非吝則痴といへり、手澤の存といへ共積置て蠶魚に食しめむより同好の人の重寶とならむにまかじされ、借すのみならず賣らむも又よかんめり、好まぬ人のもたらしたらん、いとやくなし  
古く金ほるものをケサイといへり〔庭訓〕に藝才とかけけるは假字なるべし、思ふに〔埃囊抄〕に蝶蛤才といふことを載て虫の得たるさえの事に注せり、是も假名書にて虫の事にあらじけ

藝か身と  
助くる不  
仕合

肖像の寫  
し難き事

箭庭

らのらもじの郎字か助字かこれ又下才なるべし〔東海道名所記〕に入瀬の人の詞をいふに、我も出てニヤア今から京へ來たらニヤアとあり〔東廬子〕に矢春大原の土民おのれをゲラと云ひ下郎なるべしと云り、今もあかいふにこそ然らざれば藝才聞え難し  
〔東廬子〕又いふ藝が身をたすくる程のふしあひせと云句の錦花翁隆志といへる俳人の〔獨吟十百韻〕の中の句なり、海内に行滿て高名なる句なり、隆志の信徳の門人信安が弟子にして京醒井高辻の人なり、寶曆のはじめ物故す好事の者句の面白さに前句付の集に再び出せしより流布せり

肖像を寫さするに似ぬもの也と云こと高島千春林家の像をたのまれ行て寫せしかと稿ならず依て林家その説を録してあたふ葉盛が〔水東日記〕に云、予自癸未歲、廣州病後、切欲圖寫陋容、以貽子家、甲申八月、東朝房每舉以告知友、如姚大韋尙書、岳季方翰林諸公、乃各舉所知宛陵陳啓、陽州政輩凡五人、稿亦十餘易、無一肖者、已之矣、是年九月抵宣府、得雲中季芳、始能彷彿一二、諸公嘗云、貌有不易寫者、聞之久矣、中書舍人東陽吳正希純、嘗寫東里揚公坐立像及其諸子隨行像、一々皆逼真、建安公一日見之大驚異、且曰、吾平生傳神、不啻數十人、無一得真、希純乃能若是、即躬造希純請焉、希純亦爲之、屢易稿卒無二似此、亦事之不可曉者

〔舊本今昔物語〕に平貞盛朝臣於法師家射取盜人語に、四人の箭庭に射殺したり云々、思ふに此語の弓射る處を箭庭といふところに、弓射る如くつゞけさまに射たるなるべし、今もすみ

在地判

やかなるをやにいと云ふ〔同物語〕幼兒盜瓜蒙父不教語に、在地判取たる文を取出て云々在地判とい其所の長しき者共の判取たる也

暴夫の殘

〔同物語〕に平貞盛人に射られたる疵をかくして瘡と披露しひそかに醫師にみするに兒の肝を求めて治すべしと云り貞盛我子の左衛門尉が妻の懐妊せるを請て殺さんとす醫師云我子の胤の薬にならずといへば外に求めて病癒ぬさて醫師の京に上らんとする途中にて射殺さんとする時左衛門尉妻がまぬかれたるを喜び構へて醫師が命を濟へり抑貞盛矢疵を隠せしに公にも我を憑もしき者と思召て夷亂れたりとて陸奥へも遣さんどあるを其人を射られにけれと聞えんの極しき事にあらずやとての事とむ武夫の殘暴なるより醫師の不仁なること甚しからずや元より其業のことなどうけられぬ物語なる論に及ばぬ共此こと貞盛が一の郎等館諸忠が娘の語りけるを傳ふるよしなど記せるも昔の武士の荒夷の如き者にて有しにや

醫師の不仁

大小の札物折紙の

太刀の目貫

柄の卷や

〔續一步集〕觀山松宮俊房實凡小大の價金一枚より三枚五兩迄の極めあるを札物と云ふ四枚より已上を折紙物といふ也又金五枚の極を百貫といふ千貫と云ふ金五十枚なり  
〔同書〕に目貫上代の太刀皆目貫表裏一所に打たるものなり然るに表裏一所に打てば其所高くなりて手の内あしき故後世の人引わけて二所に用たり目釘の固めにならぬ其糸のこけてよらぬため振り留の手心もよければ也柄卷やうままりを專一とすべし當流の小菱片捻を用ふ兩捻の菱の上すれて切れ易し又捻りなしの菱流れて振心あし、故に下を捻て上をよせしにや

に卷を片捻といひ世にかひ物なしを好む人あり不案内なりかひ物にて菱こけざるなり又胡麻がら卷ひら卷等の異あり大菱の近日世上にはやれ共あまり不宜とて昔の嫌ひしなり入江友甫といふ御柄巻師に執政秋元侯必御指料を大菱に卷ことなかれと仰られしよし友甫物がたり有しを聞き卷かけ引通しの分ちの糸の切ぬ爲にも柄首の動かぬ爲にもよければ引通しを用るを可とす太刀の變して今の刀となりたるものなれば太刀の猿手を用る其替りなれば引通しの理なり然共一概のことにあらずよく卷たるの巻かけにても首の動くことなしと云り近時の大菱流行すれば小菱のみにくきやうなり用道利害に拘らず人心の移り易きものぞかし

童の勇力

宿殿

金漆

〔景清草子〕南都のサイセウ坊がことをいふ處、こつがひ人のまなびをしんのうるしをかひとつてつぎめ五体にまつかとさす云々其頃の物にキンノウルシと云こと見えたるに〔延喜主計式〕中男作物紙金漆云々ありてコンアブラと訓付たりこの金漆のこと、聞ゆ然らば件の草子なるもキンノウルシ歟但しこれの眞のうるしと云にて雜へものなき生うるしを云にや又重忠前驅の處、わらひにとつて誰ぞかた田の熊王はうらい丸ふくだの萬さいを先としてわつば甘人に赤地のにしきのひたれをさせまるまきの太刀をかつかせて弓手の脇をぞ通しけるこの童にの勇力ある者多し  
〔堀江物語〕此山におひします宿殿御なかもちのはつはを申うけてあんめうをつがんとて此はをまらまふけて候御はつはまいらせ玉へと大音あけて申ければ安藤五進出て申すやうい

かにや殿原山寺にちご里にのねうはうまゆくに宿殿とこそ申なれ汝がやうの者を山たちがうだうと云なり長もちのはつははしくばまぢかう参れとてめもかけずとほり玉ふ云々あり宿に宿殿との宿の者と云ものある是にや

ホッホ  
一件をひ  
さまきと  
云ふ

〔恨之助草子〕慶長九年雪の前文みる處、文をホ、に入玉ひホ、との懷中なり今ハホッホと云〔同草子〕このひとさまと申いそも我なす所のひがことなりひとさまとい一件といふこと也古き詞にのわらねとやさしく聞ゆ

穴目々々

〔太平御覽四百七十九〕桓仲之述異記曰、陳留周氏婢名興進、入山取樵、夢見一女、語之曰、近在汝目前、目中有刺煩、爲拔之、當有厚報、有見一朽棺頭穿壞、獨體墜地、草生、目中、便爲拔草、內著棺中、以篋塞穿、即於獨體處、得一雙金指環、是〔古事談〕其外〔袋草紙〕長明〔無名抄〕等に見えたる小野の獨體穴目々々の歌の事ハ此を取て作れる物語にや

關羅

〔歷代君臣圖像〕に包極が本傳を引て云々、爲京尹令行禁止、關羅童穉亦知、其名、語曰、關羅不到有、關羅包老、天下呼爲包待制、云々、關羅といへるハ其容貌を云にのわらねと其圖箱の如き冠帽をかうふる燕尾ハ一文字に長く横のれり今見る塑像の關羅の左右に十王とて有もの、形したり俗語の龍圖公案ハ此人の物語なり

萩藥師  
野老藥師

〔草木軍談〕と云草子に美濃國横藏の藥師如來ハ萩にて作る同國石越の圓興寺に安置せらる、觀音并も萩なり越後國久米山の藥師ハ野老にて作れり歌に久米山の藥師のみぐしとてろにて苦々しくもたふとかりけり萩ハ大木ありとそトコロハ粉にして煉りて器物に作るとい

香木の白  
菊柴舟

へりこの藥師も然せしにや

〔熟蕪稗〕洛北山寛永三年二條城へ、行幸の時初音といふ香を細川三齋より獻上なり禁裡にてハ名を白菊と付たまふ同木の末を松平陸奥守家にてハ柴舟といふ右引歌ハ「白菊にまさる句ひぞなかりける花のちくさの色しかれど」世の中のうさを身につむ柴舟やたかぬ先よりこがれこそすれ「きく度にめづらしければ邪公いづも初音のこいちこそすれ

〔鶴林玉露〕茶餅湯候余同年李南云、金茶經以魚目湧泉運珠、爲煮水之節、然近世淪茶餅、以鼎鑊、用餅煮水、難、以候視、則當以聲辨、一沸二沸三沸之節、又陸氏之法、以未就茶鑊、故以第二沸、爲合量而下、未若以皆今湯、就茶甌、論之則當用〔宗禪類鈔〕に今作二沸三之際、爲合量、乃爲聲辨之詩云、砌蟲唧々萬蟬催、忽有千車捆載來、聽得松風并澗水、急呼縹色緣盃盃、其論固已精矣、然淪茶之法、湯欲嫩而不老、蓋湯嫩則茶味甘、老則過苦矣、若聲如松風澗水、而遽淪之、豈不過於老而苦哉、惟移餅去火、少待其沸上、而淪之、然後湯適中而茶味甘、此南金之所、未講者也、因補以詩云、松風澗雨到來初、急引銅餅離竹爐、待得聲聞、俱寂後、一甌春雪勝醍醐、

鬼杉原

〔親義雜記〕水島流諸禮家に見ゆ杉原播州より出る今世鬼杉原と云もの一束一本に用る紙なり是昔の杉原にて禮式の品にのこれりと云へり一束一本といふを今略きて本束と其紙をいふ

百丐圖  
乞兒詩

陸次雲〔北野緒言〕唐六如居士伴狂玩世云々、又繪爲百丐圖、人止五十題、其首日、而今半是夫、而今半是之詩爲贈綠林豪客作也、移之於丐、將謂半在彼半在此耶、半丐於白日、其半在昏

奇南香

夜莫盡見之耶云々、明鼎移時、金陵百川橋下有乞兒題詩柱云、三百年來養士朝、如何文武盡皆逃、綱常留鼻田院、乞丐羞存命、二條赴河以死、

鏡背の紋

こゝにて奇南香に六國の名をもて分つ其中にラコクハ八絃譯史に暹羅本暹典羅解二國、暹乃赤眉遺種、土瘠難耕、羅斛土腴、暹人仰給、元時暹降於羅、合爲一國とある國なるべし、モタラも同書に蘇門答刺、一名須文達那、漢條支、唐波斯、大食地也とあり、鏡背にかたばみの紋あるハ其草の酸をもて鏡を磨く故なりといへるハ附會なるべし、其草を用ることハあれども紋ハ人々の家紋を付たるなりもし此説の如くならんにハ石榴をも付べきなりカタバミを鏡に用たる事ハ夫木集爲家「かたばみのそバに生たる鏡ぐさ露さへ月にかけみがきつ、ハ和名抄」にかゝみと云草四種あり徐長卿白前白蘇たっかゝみと云るハ芫蘭にて夢摩子のことなり是なるべし然るに藻鹽草にハかたばみに似たる草なりまろき葉の石にはふ草なりといへれば螺鹽草などにやあらむ非なるべし

龜泉

南海古蹟記東坡泉在、西城內、天慶觀蘇文忠公初鑿得一石、狀如龜泉涌出號龜泉、清冽亞達磨泉、淳祐間經略使方大琮、浚泉護以定林廢寺鐵井欄、大琮有鐵井欄銘、かめ井れのづから似たる名あり

大虎目禮古佛座

水鳥記といふ冊子の酒戰の戯文なり其中に大虎目禮木佛の座などといへる酒宴の道たがひに知たる事なれば云々有りわかまへがたし近年千住宿にて酒戰を催せる者ありて江戸の聞人に詩歌などを乞ひける太田南畝この文をとりて大虎目禮木佛座禮失求之於千住野と書

櫛に結ぶ

たりこの事を何と心得たりし歟此草子もとより誤字多し思ふに大虎目禮古佛座なるべし犬居ハ犬の如く居るなり目禮字の如し古佛座ハ動かぬにてみな無禮講のふるまひなるべし酒飲む禮式と心得るハ非なり

普請と云ふ

櫛に結ぶと云ふこと右京大夫建禮門院女房なり家集にやしまのねとゞにや此ころ人のきこゆめりその人の中納言と聞えしころ五節にくしをこひきこえたりしをたふとてくれなるのうすやうにあしわけをふねをむすびたるくしさをしたるがなのめならぬにかきてねしつけられたりし「あしわけのさゝるをふねに紅のふかき心をよするとをしれ云々枕雙紙」うれしき物の條、さしくし結ひせてをかしげなるも又うれし、抄にさし櫛作らすることにやといへりたのれ思ふに結ぶとの物の形を糸はなにて造れるなるべし櫛のむねに付ること、見ゆ女のわざにいふゑがき花むすびの即これらの用すべて菊綴衣服のもやう上繪何くれと廣かるべし五節の櫛ハ蠶紙に包み御前に奉ることなりそのかた古圖に見えたり

陰毛と毛虫になす

下學集普請諸人作事故云普請これ佛家の語なりハ勅修清規云、普請之法、蓋上々均力也とハ和爾雅に按普請二字、見三國志呂蒙傳、然非營作之義、といへり俗家に造營をさかいふハ後の事と聞ゆ

堤中納言物語堤中納言ハ兼輔卿なり承平三年三月薨ず、虫めつるひめ君の巻、ある人々の心つきたるあるべしさすがにいとをしとして「人に似ぬ心のうちハかはむしの名をとひてこそいみまはしけれ、むまの佐」かは虫にまさるゝまへのけのすゑにあたるばかりの人のなき

みはつる

鞠の名

鞠子ける

下駄を焼

みそ

月とスツ

かなといひてわらひて返りぬめり按るに〔和名抄〕兼名苑云、髯虫一名烏毛虫和名加と見え波無之今いふ毛むしなり彼姫君の陰毛を毛むしになすらへて右馬佐が嘲りたるなり  
 かはつるみの事を漢土に放手銃といふ〔笑林廣記〕にその詩を載たりもと姓倪なる人を嘲りたる詩とむをかしく作りたり  
 〔著聞集〕に侍従大納言成通卿の事をいふ處、鞠の精あらはれてその名三人が額に金の文字して一人の春楊花次の夏安林又次の秋園とありといふ事みゆおもふに楊花のヤクワ安林アリ諸本みな園生の是のみ二字なるべからず秋園生とありしが一字落たりと見ゆ園生いたふくあれ共なるべし故人の説もなければ知べきならぬとも古へ鞠を蹴るかけ聲ヤア、リオフと云へるなるべし  
 加藤千蔭ある人の許へ消息して青海苔と馬糞をこひけるに二物のいと殊なるを下駄と焼みそと云ふ俗語を引て云ひける手簡ありこの諺の世人たれもさる意と謂へりといふ非なり似たる物のいたく異なるたとへことにて月とスツポンと云へるが如しとも亦知らぬ人多しスツポンを丸と異名をつけて呼ぶ漢名にも團魚といふとひとし月の丸き物なれど丸と呼スツポンといいたく異なるなり件の諺もこの意にて焼みそを板に付てやくを江戸にて今いさもせざる故に此ことにも心付ずこれ下駄のやうにいあれど下駄といかけはなれたるをいふなり云ひ習ひたる俗のことくさに心得たがひいと多し  
 徂徠が〔政談四卷〕父が若き時はなしにて承りたり祖父普請を志たるに細川玄蕃頭有馬左衛

仲間の勤

め方

奉公引米

檢校の番

なし

盲人の支

相撲と武

藝とせし

門佐仲間を借したる嘶祖母の物語にて承りたり近頃の仲間の類米をさへ搗せず米つきと云もの御城下にてきたるに此二三年以來の事なり其前のなきことなり又松平伊豆守よりもち切といふこと出来て武家のみなこれになりたるより奉公引米といふ事をして供先にて口をぬらす云々  
 又〔同書八〕檢校の跡目御番に入らる、事謂れなき事なり其始め東照宮御小性盲目に成たるを檢校に仰付られたるより事起るといふ夫の元來侍なれば最のことなり其已後御扶持を下されたる檢校の跡までの濫吹なり座頭其弟子より金を取て夫にて渡世する者なれば畢竟乞食に似たる者なり御扶持方下され御側近く召仕るれども只坊主などの格なるべし紫衣を着する故五位なりと思ひて不學なる御老中などの兩番へ入らる、事にまたる成べし出家の紫衣をも官位とねもふの文盲なることなるべし紫衣いづれも平僧にて衣の色を御免ありといふ迄の事なり檢校の紫衣のまして夫とい間のあることなり檢校勾當といふ名も官位にあらざる高野の檢校も平僧なり勾當といふ何にても事を取捌く事なり勾當内侍と云も内侍にて事を取捌く故の稱號也天明五年御觸書盲僧の武家に限り青蓮院の宮支配たるべく候盲人の百姓町人に限り惣録の支配に限り候事  
 〔夏山雜談〕に昔の武士の組打を好みたる故に相撲を武藝とせしなり近世戦法をなりて組打を好まぬ故に武藝とせざる也是故に今の下賤の業となりぬ此説只一わたり然るべきやうなれ共誠にいさも非ず鎌倉將軍家の時歴々の武士相撲を取しも大力剛勇の人多かりしのみ



に非ず其頃はやりたることなり必戰場組打の爲に嗜めるものには有べからず其頃の戦ひ組打といふこと多く聞えたれ共甲冑を着て各利器を持ての事なれば素肌の手練といいたく異なるべし組伏られても利を得るものあり相撲の手をもてよくせん事覺束なし又武士組打を好まずとて相撲を武藝に屬せずしてなにかせん遺老物語に永祿以來出きはじめたるもの内にも相撲取はやることと見えたり武士にも取しものありしなりたのづから時の流行によれることなり治世ひさしくなればよき人の力わざすることなく強き人すくなかるべし相撲など取らぬもあらぬ理なりたましく有ても世につれてさることの賤しげに思ふなるべし

銭を撰む  
制札

如木水干

白張

如木雑色

錢を撰むならひや、後迄も有と見えて常磐橋御制札の寫に寛永の新錢金子壹兩に四貫文勿論壹分のに壹貫文の賣買たるべし若違背いたし高下の賣買仕に於ての雙方より其賣買の一倍爲過料これを出すべし云々大かけわれ錢かたなし鉛錢新惡錢此外えらむべからず若えらむ者五錢迄押てつかふ者有之の或、其處に三日さらし十日籠合たるべし其町々過料同前たるべし「明曆三年二月日」

仕丁

當世名聞  
と食る人々

とついで讀申候立て木の如くと云より斯如く申す雑色の金吾の棒を持立て警固する故に如木雑色と申候由とあり先生の木下順庵なり立て木の如きには非ず服のこのき也されど白丁も雑色も衣服の色をもて云にあらざ共無位無官にて奉仕する賤しきものなり色字の品字の如し白字の素字の意にて位官なきなり仕丁と云も此事にて丁の若き男強壯なるなり雑色の雑役勤るをいふ今シヨホクナシといふ俗言の如木なるべしシホタレたる貌なれば如木ならぬ意と聞ゆ

平太と云油うり遊女を思ふこと  
當世名聞を食ること世に聞えたる人名を賣んことを思ひてをこなるたばかり事して愚人を欺く笑ふべし畢竟見解なく耻を知らぬのかたはら痛き事になむそれらの行ひ世人にあまたあるべけれど己れ世中に交らざれば知るよしなし只一ツ二ツ聞ることあり寫山樓主人の當時名畫にて世にもてはやさるゝ誰かの企て及べきさを猶名を食りて諸大家よりの召ありていとまなしなど常に人にいふとながら或人とふらひしに主人畫をかきて居かたのらに客人三人四人ありしが或人にいふのけふのすこの暇ある故こゝらの詠らへもの少しばかりにてもかゝんとすあすの君の召あり明後日いたれかしの御もとの招かるゝなどかぞへいふに日次打つゝきて勞かゝしをこなどゝ常に暇ありていと羨しなど語るを聞て歸りしがあす又問ふべき事ありて行たるにあるに宿に居て畫をかき居しかば先生けふの某の君召れしにあらざると云に主笑てそこも事を解えぬ人にこそきのふの傍の客人に聞かする

狂歌師社  
中に錢あ  
る者の歌  
を高點と  
す

人の別號

趨迎して  
腰を折る  
に懶し

爲にさひいひしとかしと云り大むね是等にて知るべし會日人來るに朝より晩に至るまで應  
對し酒を飲ながら書をかく是の自ら飲の茶にて酒にのあらずすべてかやうの事どもある故  
樓の窓のかたへ絹素はりしわくの古りたるが夥しくかさねてあるが外よりあらに見ゆる  
なごいかまへて人に示さんといわらぬ共見る人これを嘲りて山下町邊やらむ泥鼈をうる  
家の外にその甲の剝たる古きも新しきも取ませてちたたく繩もて繋ぎたり寫山樓の絹のわ  
くの彼のすつばんの甲とひとしき看板なりといへり狂歌師眞顔の月次の詠草を點をかくる  
にも執筆草本をまたゝむる時其讀人の名を別に記さしめてこれを詠草に照して當時社中に  
て錢ある者の歌を高點とす又年の暮終り毎に社中より鏡餅を贈るものありてこれを排らへ  
置くこと也その中に俳優の當時名高き者の名をふるしたる餅あるの其が許より贈りたるや  
うに人に見するにて誠いたのれが家にて作りかされる也すべてこの趣のことのみして愚人  
を欺き行のれたり又一とせ京師より加茂季鷹江戸に下りてまばし有し程それが寓居に白木  
の臺に絹の巻物包める三ツ四ツ座右にかさね置て諸侯よりの贈ものゝ如く見せんとてのわ  
ざなり文晁なごの盛りに行のれたるに猶其風ありしといかなる事にか

〔枝山前聞〕に人の別號をいふ處、伯松則仲叔必竹梅云々

〔中洲野錄〕に弘治間、樂平有趙尹、考滿還任邑中、士夫皆趨逐之時、泰州守彭公福、獨以詩投  
之云、洎陽纒駐使君操、本欲趨迎懶折腰、莫怪野人疎禮節、好從揚畫說陽橋、云々

〔東海道名所記〕そのかみ芝居町にて座をはりかたり其後中橋へ移り又此界町へ移り語る

知名の人

芝居町ハ今の紫  
井町なるべし

〔南水漫遊〕豊井紀海音榎並氏貞峨といふ俗稱喜右衛門後喜八と改む僧となりて高節と云歸  
俗して醫を業とし又契沖師の門に入て歌道を學び契周といふ鳥觀齋とも號し淨瑠璃の作名  
海音といふ元文元年辰の夏法橋に叙し寛保二年戊十月四日一説延享行年八十歳にて没す墓ハ  
八丁目寺町寶樹寺にあり○文耕堂始松田和吉千  
前野門人なり○錦文流西鶴門人俳諧をよくす座塵社邊に住  
す○櫻塚西吟攝州池田人西鶴門人俳諧をよくす○三好松洛醫師  
なり吉田冠子人形つかひ吉田文  
三郎といふこれが倅二代目文三郎ねやまつかひの名人○並木文助北の新地の茶屋なり○竹  
本三郎兵衛竹本筑後掾が倅なり○近松半二種積伊助といふ醫師の倅なり○爲永太郎兵衛始  
ハ竹田庄藏○安田蛙文有馬家に仕へし人也○近松東南東南伊助といひ老後法体となりて綾  
子播磨と改三絃の上手なり○春草堂高田瑞庵といふ醫師なり俳名笛十○菅專助醫師の倅豊  
竹光太夫○長谷川千四和州長谷寺の僧還俗して作者となる○淺田一鳥森長三郎といふ謠の  
師なり○中村阿契始間助○八民平七坂町大坂屋太郎兵衛の倅なり○若竹笛躬若竹藤九郎と  
いふ人形つかひ也二代笛躬鹽屋治兵衛復松麟といふ紀の上太郎三井某嘉粟八貫又仙果堂と  
云○豊竹應律若太夫芝居主甚六と云○松田はく俳諧師岡本菊古後表隣と云○男徳齋竹本咲  
太夫といふ上るり語なり○榮善平道頓堀いろは茶屋○七才子岡本原一といふ醫師也○川四  
郎長町七丁目分銅河内屋四郎兵衛といふ宿屋なり豪家にして活達の人なり○中村魚眼難波  
新地中村屋といふ茶屋なり○近松やなぎ始並木柳といふ後改て柳太郎作とも云○司馬芝叟

盲者の記

獨笑庵の悴なり○梅の下風千葉軒○湖水軒佐藤太  
〔聲曲類纂〕にことし弘化丙午の春日尾荆山先生奥羽より越後の邊へ遊歴せられしに越後蒲原郡水原の町に瞽者あり和泉太夫が金平節の淨るりを凡三十段も記憶し語る一席五段六段のものを續けて語る其が師某座頭ハ凡そ七十段も覚えたりしが故人となり今の弟子其座頭に傳ふ其弟子あれど多く覺えたるものなく又盲人のこと故院本も所持することなく只記憶のみなりと語られき

道念節

道念節〔世事談〕に京に道念山三郎といふ興樗の音頭あり貞享の頃益踊口説といふ唄をうたひ出したり此節踊の拍子によく合たる間なれば今以これをよしとすと云へり〔松の落葉〕に道念咄といふ小歌あり作者道念仁兵衛とあり其歌「道念咄をいたそうぞよ此道念つねくなまぐさうに思ふたればあんの如くめんざうに大こくこそ置れたれ此大黒を繪像か木像かと思ふたりやおまんといへる大こくじやとありこれ道念ハ不律の僧の名にまたるなり〔壬生狂言〕の道念を思ふべし源内が〔神靈矢口〕の渡の道念もこれらをととりて名づけたる也山三郎仁兵衛などの木やりの音頭取なるべし

盛衰記に出たる事

〔源平盛衰記廿一〕兵衛佐殿隠臥木條、日も既に晚ければ遠近の入逢の野寺の螺鐘打ひけ共○〔同卷〕小坪合戦武藏國住人綴黨の大將に太郎五郎とて兄弟二人あり共に大力也けるが太郎ハ八十人が力あり東國無雙の相撲の上手四十八の取手に暗からず○〔同書廿二〕衣笠合戦三浦義明十三已來弓矢を取て今年七十九今此軍に會事老後の面目なり○〔同卷〕土肥焼亡

舞條、烏帽子商人大太郎云々宿所に請じ入奉て白瓶子に口褰みさまくの肴にてもてなし奉る云々不取敢折節なれハ急ぎアハテ、打程に七頭の右に一頭の左折り云々頼朝大太郎にえほしの禮する處土肥の次郎に當座とらせて着給ければ大太妻に私語ける今日此比身一ツ安堵し給はずして羸弱の商人に烏帽子を程の人の荒量にも給つる百町かなどつぶやきければ○〔同卷〕千葉足利催促事、上總介弘經ハ此事を聞海參に恐れて當國に井ノ北井ノ南應ノ北應ノ南マウ西マウ東より始て國中の輩背くをバ打隨ふをバ相具して一萬餘騎にて○〔同〕入道申官符事、げにも幼稚なればよもあらじなんと青道心をなして候へば今ハ哀ハ胸ヲヤクと申諭に合て侍り云々入道詞源氏を思召て平家をにくませ給ふと覺候とくねり申す○〔卷廿三〕平家水鳥の羽音に驚て逃上る條、小兒共ノ讀ム百詠ト云フ文に鳴集て動ずれば成雷と云ことあり○〔同卷〕新院自嚴島還御條、源中將通親卿御前に參て云々人の持る物を心の外にすかし取人をおとして思様の文をか、せんと仕るをバ乞素壓狀と申て政道にも不用神も佛も捨させ給ふ事にて候ぞ○〔同條〕平家と書てハヒラヤとよむ家のまろび倒れんずるにハ助と云て柱の代に大なる木を以てさ、へ直す事あり平家の大將軍に下し給へる權亮少將維落ければ右大將宗盛の騒ぎ歎たまふらんと云ふにそへて入道殿の「ひらやなる宗盛いかに騒らん柱とたのむ助を落して云々富士川のはたに物具多く捨たる中に忠清と銘書せし鎧唐櫃一合あり武者の具をば既に捨ぬ今ハ派世して墨染の衣をきよとも讀たり「富士川に鎧ハ捨つ墨染の衣ダ、キヨ後の世の爲と又上總介といへば其國の器によそへても讀たり「忠清はニケノ馬にや

乗つらん懸ぬに落るカヅサシリガヒ。○義經軍陣に来る事、齡廿餘り色白く勢小き男の顔ツラ眼居指過て見えけるに郎黨廿餘騎を相具して陣前に出來て○〔廿四〕兩院主上還御條、大政入道鼻うをわきてぞ思はれける今鼻があく雜色中間小舍人まで○坂東落書條、平氏持世既に廿一年也是則改一昔之代而相常源氏可持世之時乎○以三水之字作年號一品○南都燒亡の處、奈良の都の八重櫻東金堂に榮えたり興福寺胡德樂と酒を飲樂なり河南浦と鯉を切る舞なり河南浦の庖丁を舞澄したり云々○誰か佛法を無代にし逆罪を相招く

ウケムケの事

〔山崎久卿が筆記〕に世俗生れ年の五性によりてウケに入年ムケに入年ありてウケに入時の七フの祝ひとてフの字つきたる物七種をもて賀ふこと往昔よりの習俗なりけらし文字に有卦無卦と書ども正字にあらざる曆にも記さるることにて其義を釋るものを見ず然し小泉松卓が〔循環曆〕にいくりやうを載たると覺えつ按るに〔閑田蒿溪が隨筆〕に大般若經の中に貧窮有暇入無暇と云文ありこれより出たることよしをいへること有と覺ゆいと信難き説なりその由會て釋了阿に右の文あら前後の文ともに鈔録し何品に出と云ことを書てたまれといひて程へて逢たる頃いへる〔般若〕にその文なしと答へたりき後に〔大藏經〕中に〔入無暇有暇經〕一卷あり經を把て一讀するに世俗のいふ處と聊異なりされど有暇無暇と云こといふ是より出たり思ふに諺に貧乏無暇と云ことあれば吉年を有暇とし凶年無暇とするならんさて其年の吉凶何をもて定めたるなれば十二運の次第によれり十二運とい胎養長官帝沐臨この七運の吉なりこの年にわたるを有暇といひ衰病死墓絶この五運の凶なり

七福神

お菊物語

此五年にあたるを無暇と云なり○七フの祝ひと云ことを思ふに〔仁王經〕に七福即生七難即滅と云文あり七福神もそれより出たらんと云こと予が〔七福神考〕に已にいへり此七フも七福の語に原き且七の數の有暇七年によりて唱へそめしことなるべし  
〔浪華城菊物語〕田中意徳池田家の醫師なり祖母の大坂にて淀君に仕へし人にて名を菊とぞいひける落城の日元和元年五月七日長局に居申候なかくいまだ落城なぞいおもひもよらず候時蕎麥の粉の有けるを取出して其下女に申付是をそば焼にしてくれと申ける故其者の御臺所へ參り候跡にて玉造口の方のやけ申候と申候その外所々やけ申と殊外さわき立候故千疊敷の御縁側へ出申候へば能何方も見え候故出見候へばなる程處々焼立候故局へ歸り帷子を取出し二ツ重着て帶も三つして秀頼公より拜領の鏡を懷中して御臺所へ出申候得ば武田榮翁黒き具足を着て居申候其ほか見あらざる士と二人居申候女中にある知らざる士御臺所外にて肩口の疵をみて給いれ上帶をもあめて給ひ候へど申聲をも聞ながらその女中の如何あめされ候やかまひ不申差急ぎ出申候女中出不申様に榮翁申候へとも夫にもかまひず出申候其邊に金瓢箪の御馬印如何して落し置けんこれ有を御手長の者今の中居などいふやうの者也おあちやと申者と今一人して見て捨置て御耻辱を顯すなりとて取て打めきて捨けるそれをも見捨てやうく城外へ出申候處に竹束有て候得共武者も居不申又城中城外等にも見えかゝりに手負等も見え不申然る時竹束の陰より單物一ツ着たる者さび刀を抜もちて來り金にてもあらば出せよといふにより懷中の竹流し二本持て有しを出し遣す一本七兩貳分有り云扱其者に申へ若黨殿御陣

の何方ぞと問へば松原口と答へける故その處へ連行候へば又々金どらせの間連行くれとたのむいざ此方へと同道いたし候参るうちに要光院殿京極若狭守母義遊殿の御兄弟也士におはれ玉ひ後より御足をねさへて御のき候其外女中士も付居申候を見付則そこへかけより夫より御供申森口の或在家へ御立寄候所驚むしろを敷疊二ちやう古きを取り出し要光院をば其上に置申何れも其むしろに居申候その時何方より來しやらん行器にこわ飯もり候をみなく紙にのせて給へ申候是ハ若狭守殿より來りしなるべし要光院殿城中に御座候て其供の女中の中に秀頼公御召使の女中山城是ハ唯帷子一ツぬき下帶も一ツして居られる故夫にてハ難儀なるべしとて我帷子を一ツぬき下帶も一ツときて其女中に參らせける扱要光院殿にハ家康公御召に付御出候御迎ひに御乗物など參候其時女中へ被仰候ハ若し將軍様仰ありて何れも女の事なれども城中に居申たる者いかに仰付られべきもされず候へば随分宜敷可申上候得共兎角御下知ハ背かれず覺悟し給へと要光院殿仰られければ其時みな泣悲しむ事なびたし追付御歸被成候て御こしより御出もなきうちに事濟候て何れも皆望次第何方へも送り遣すべきよし上意とあればみな悦事かぎりなし其時ハ菊ハ松丸殿へ參り候半と存し京都へとてぞ參りけるさて其宮内娘も何方へ行へき處もなく一所にと頼まれ候故一所に京へ參候て大坂にて知たる町人へ便りて參候處に御城にてハ軽く存候町人に候へども殊の外大きな町人にて候然れ共大坂の落人故一夜も得留不申兩人ハ晒布一疋ツ、引出物にぞまける扱兩人ハ織田左門殿の屋敷へ參り候へば中々門内へも入不申宮内娘ハ左門殿姪故菊申候ハ是ハ御姪子にて候

がそれにて御入なきやと申に付早々内へ申入られ殊の外饗應にて左門殿姪を一人ひろひたりとて殊の外禮にてありし扱四五日左門殿に滞留のうちあやしげなる二階へあがりて二人かくれ居申候をここにその儘食など給へ申候扱いとま申て松丸殿へ參り候ハんと申時左門殿殊の外禮にて帷子に銀子五枚賜りけるさて松丸殿秀吉の妾へ御奉公致し居申候て後に意徳祖父方へ縁付申候後備前へ參候て死申され候右そば焼いたしに遣し候女ハいかになりけるやらん其人の語に秀頼公淀殿其外大藏卿れも立候局中ハみな山里へ被參候て御本丸にハ無御座候其儀ハはや落城二三日前より然る故御生死のはど如何と申候由

一其落城前かと鉄炮いづ方やら參り女中打ぬかれ其玉御だいの脇に留りける玉の通りける疊の縁きれ候由其玉三十匁ばかりと申候手の内へ入て見申候になる程其ほどの玉と存じられ候夫より其玉の來る方に幕をはられ申候

一軍評定此度御同所にて有し故聞ける事ども有しと也

一毎日々々やはり餅つかれける也其餅を皆々長局の局ことに配られける其仕形其餅を朝はやく局ことの前へ一ツ宛置て通る後々ハめづらしからぬ物故其儘明日迄置もあり然る時ハ其餅を脇へ立かけ置て又今日の餅を置けるとぞ

一天樹院様御ひんそきをも見けるが碁盤の上に御立被成候を秀頼公たかうなかなにて御髪をすこし御切そき被成ける也

一御膳をばね末より出すを御手長のもの請取其時お末のものどく味いたし又御側衆へ渡す

時に御手長の者毒味をして渡し候事也

一其落城の前京都より月心和尙といふ東福寺の出家兼て参り居被申候其人に菊申候の我々も頓て御いとま願申候て京都へ上り可申候間夫迄是を御預り可被下若其中落城も候いゝなきあともとむらひ給ひ被下候へと狭箱一つに着物又の器ども少々取入て月心にたのみ遣しけるなり其道具今も少々田中氏に残り有り

一この菊淀殿に御奉公申事の菊親を山口茂左衛門といふ其親をば山口茂介といひて淺井長政に仕ふ此淀殿の娘故幼少より御奉公申上茂左衛門後に藤堂和泉守高虎へ浪人客分にて三百石被下居申候然る時に大坂御陣の沙汰を聞て大坂城中へ來り御奉公を願候處則御具足被下候此時討死しけるなり其落着不知也其御具足拜領の時指物無之故娘の菊を頼て致しもらふ則白赤の絹を縫合せさし物にして遣しける其時茂左衛門悦で娘にも大きにかゝりけりと申夫も大かた暇乞にて有しと也此茂左衛門藤堂家へ出ける子細の前與右衛門と云て淺井家の足輕にて在し其小頭の茂介にてありしが殊外其砌高虎實にありて朝のものもたべざる事ありしに茂介妻殊外不ばかりて茶づけなと度々ふるまひける夫故後迄も茂介妻の恩をば忘れぬと高虎御申候よし是故茂左衛門をも呼出しさかも客分にして何れも家中にて殿わしらひにしたりけると也此茂介も後に千二百石迄淺井家にて取けると也此茂左衛門悴菊が弟を甚左衛門と云て安藝國にあり後に醫者になりて意朴と云ける今に其末ありやまらす菊落城の時二十歳後備前にて死ける時八十三歳なりかやう

の咄を聞たりとて後意徳物語なり此意徳といふの菊が孫なりと記すこれら希有の事なるべし

これによて考ふるに浪華城の廣大なる鎌倉の微々たるに比すれば人智をもて量りがたき事なりといひ傳ふれとこれを今に比しなばまた量りがたき事なるべしともくかの菊女の淺井家よりこのかたつきとひ参らせけるに軍評定なども開天樹院殿の御ひんそきをも見奉りし程ならむにいと近く召遣のれ格式もありしなるべしざるを長局より一婢に命じて蕎麥粉を焼に御臺所へやりしにても其手軽く程近きをみるべし又月心に預けたりしも要用の調度衣服なるべきが僅に挾箱一つといへるの外へ持ち出さむことたやすからぬ時なるべしと今にていひけなきやうに思われ千疊敷の御縁側へ出れば何方もよく見ゆるよしありて出たるもあさまなる事なるべしことに城内を逃けるとて道さへ案内ありけいふかしき事也既に東都御城内出火の時大奥の女中度方にくれて出る處をあらざ狼狽たりしを伊豆守殿御差圖にて御臺所口迄一通り疊を裏がへして道の目標とせられしがあやうく難をまぬかれたり今御用さゝの疊やとも此役蒙るなどもいふ也もとより大坂一城となりて大閤の御代といよろつ手挟くなりたるべしとこれ等の太平の日いまだ久しからざる故ともいふべしそれよりも不審の秀頼卿の御馬印の冬夏兩陣共に津川左近親行が司る所なりこの際に婦女の手をかりて纒にその辱をかくせしにやかゝるさまにて兎角に御和睦の事ゆかさりし時運といひながらうたてかりし事也此時御旗奉行郡主馬良列の預る所の黄幌をかへし奉り

おあん物語

て自害し左近も御馬印を返し置て切腹しよし諸書に載たり何れかまさしきやまらすわれ  
 いたゞ菊女が話の實ならんことをはつるなり  
 「おあん物語」子供あつまりおあん様昔物がたりなされませといへばそれが親父の山田志摩  
 といふて石田治部少輔殿に奉行し近江の佐和山に居られたる其後治部殿御謀叛の時美濃國  
 大垣に籠りて我等も一所に居ておあん様が不思議な事なされたよ夜々九ツ時分に誰  
 ともなく男女三十人程の聲して田中兵部殿チツ／＼とめきて其跡にてわつといふて泣聲  
 がしておあんやつたれとましや／＼怖ろまうれしやつたその後家康様より攻衆大勢城へ向は  
 れて云々大垣ノ城ニアルベカ跋云右志摩の土州の親類方へ下り浪人し土佐にて山田彦助といふ  
 人後賜也養育と成れおあんは森儀左衛門へ嫁す儀左衛門死して山田喜助養育なり喜助爲に  
 叔母なり寛文中齡八十餘にて卒す予其頃八九歳にて右の物語を折々聞覺たり光陰うつり  
 て正徳の頃に孫共を集めて此物語して昔の事世中の費を止めせばこまかしき孫共の昔のね  
 おんの彦根ばい今のぢさまの彦根ぢいよ何をおじやるぞ世の時々じやものとして鼻であしら  
 ふ故腹も立ども後世恐るべし又後の世如何ならん孫ども又おのが孫どもにさみせられんと  
 是をせめての勝手にいふてのちのちなまいだ／＼より外にいふ事もなく候かしくこれのみ  
 と思われ金がなく  
 ても米がなくても

此菊物語のもと下谷中徒士町に白井亭トホルと云撃劔家あり此人備前の藩中一統へ指南し其國  
 へ度々通りしとぞ其國の醫師田中氏に傳來せし菊物語を白井氏望みて寫し來り山崎久卿

に借したり其うつし是なり世に出したる原本也今の白井亭の子御徒士になりたり  
 近年おあん物語に菊物がたりを合せて刻したり是の淺河善庵か本を吉田愼之助に托して  
 校正して刻せる也愼之助此本の出處もまちぎして忽卒に刻したりこれのみならず昔々物  
 語なぞの少略の本にてよからぬを其儘はりたり殊に飛鳥川と云の他の本の名なるをこの  
 草子の一名とれもへり標題の八十の翁物語といへるの新たに命じたるなりその昔々とい  
 ふことをもちらぬ故なりこれも淺河に頼れてのこととぞ

この書のもと巻首に總目を掲げありしも細目に至りては更になかりき又文章の隨筆體なるをもて事に臨みてやゝ不便の感も少からざりきよりの再版に夫等の不便を補はんがために巻首に細目を出し頁數を附していさゝか見る人の便りとなしたり又各條の冒頭に其の要目を標記したるは巻首の細目と相對照して専ら索引の便を計らむか爲めなり其の要目の文字の如きは已を得ざるものゝ外はつとめて原文に従へり

明治三十六年七月

近藤 圭 造 再校

明治三十一年一月六日初版發行  
 明治三十六年七月十九日印刷  
 明治三十六年七月廿八日再版發行

著者故人 喜多村 信節

校訂發行  
兼印刷人

東京市牛込區赤城下町七十一番地

近藤 圭 造

東京市麴町區飯田町五丁目廿六番地

發行兼印刷所 近藤活版所



5x64





